日本語の「と・たら・なら・ば」が表す時間、原因・理由と条件の意味
—セルビア語との対照の観点から

ヤンコヴィッチ・スネジャナ

目次

目次 ..... i - iv

序章 1
1. 本研究の出発点 1
2. 目的 4
3. 方法 4
4. 構成 5

第1章　先行研究 7
1.1 日本語における条件表現の研究 7
1.1.1「と・たら・なら・ば」の形式別の用法分析 7
1.1.2「と・たら・なら・ば」の用法分類 11
1.1.3 条件文と時間文及び原因・理由文との関わり 15

第2章　条件の種類を見分けるパラメータ ― Comrie のパラメータに基づく日本語とセルビア語の条件構文の対照 ... 18
2.1 はじめに 18
2.1.1　セルビア語の「条件文」と日本語の「条件形」の定義 . 18
2.2　条件文の種類を見分けるパラメータ 19
2.2.1　節の順番 19
2.2.2　条件のマーカー 19
2.2.3　仮定の度合い 20
2.2.4　基準時 22
2.2.5　まとめ 22
2.3　セルビア語の条件の種類 24
2.3.1 セルビア語の条件の種類を見分ける基準 24
2.4　日本語の仮定条件における「と・たら・なら・ば」の使用に関する新たなパラメータ 29
2.4.1　条件構文の従属節のモダリティ 29
2.4.2　条件構文の主節のモダリティ 30
2.4.3　従属節と主節の事柄的な関係 32
2.5 まとめ 32

第3章　「と・たら・なら・ば」の非条件的な意味と用法 ― セルビア語の時間文と原因・理由文との対照を通じて .. 33
3.1 はじめに 33
3.2 先行研究 34

3.2.1 日本語の条件の意味分類における非仮定的な事柄 34
3.3 セルビア語の時間文及び原因・理由文 35
3.3.1 時間文 35
3.3.2 原因・理由文 37
3.4 研究方法 37
3.5 分析 37
3.5.1 既定の事柄 37
3.5.1.1 時間的な意味 37
3.5.1.1.1 Anterior 関係 37
3.5.1.1.2 Posterior 関係 48
3.5.1.1.3 Simultaneous 関係 52
3.5.1.2 原因・理由の意味 54
3.5.1.3 まとめ 57
3.5.2 予定的な事柄 57
3.5.2.1 時間的な意味 58
3.5.2.1.1 Posterior 関係 58
3.5.2.1.2 時間的副詞節の働き－Posterior 関係 59
3.5.2.1.3 非仮定の時間的 Posterior 関係 － 仮定条件の意味との重なり 61
3.5.2.2 まとめ 63
3.5.3 一般的に行われる事柄 64
3.5.3.1 時間的な意味 64
3.5.3.1.1 Posterior 関係 64
3.5.3.2 Simultaneous 関係 72
3.5.3.3 General 関係 73
3.5.4 原因・理由の意味 76
3.5.5 まとめ 77
3.6 「なら」が表す非条件的な事柄 78
3.6.1 既定の事柄 78
3.6.1.1 原因・理由の意味 78
3.6.1.2 まとめ 80
3.6.2 予定的な事柄 80
3.6.2.1 原因・理由の意味 80
3.6.2.2 まとめ 82
3.6.3 一般的な事柄 83
3.6.3.1 時間的な意味 83
3.6.3.1.1 General 関係 83
3.6.3.2 原因・理由の意味 84
3.6.3.3 まとめ 85
3.7 まとめ 86

第４章　「と・たら・なら・ば」の仮定的な意味と用法 ―セルビア語のレアルな条件、ポテンシャルな条件と非レアルな条件との対照を通じて.....89
4.1 はじめに.....89
4.2 先行研究.....89
4.3 分析.....92
4.3.1 条件構文の従属節のモダリティ.....93
4.3.1.1 レアルな未来の条件.....94
4.3.1.2 レアルな現在の条件.....98
4.3.1.3 ポテンシャルな条件.....100
4.3.1.4 非レアルな現在の条件.....103
4.3.1.5 非レアルな過去の条件.....106
4.3.1.6 まとめ.....106
4.3.2 条件構文の主節のモダリティ.....109
4.3.2.1 レアルな未来の条件.....110
4.3.2.2 レアルな現在の条件.....117
4.3.2.3 ポテンシャルな条件.....123
4.3.2.4 非レアルな現在の条件.....128
4.3.2.5 非レアルな過去の条件.....130
4.3.2.6 まとめ.....134
4.3.3 従属節と主節の事柄的な関係.....138
4.3.3.1 レアルな未来の条件.....139
4.3.3.2 レアルな現在の条件.....141
4.3.3.3 ポテンシャルな条件.....143
4.3.3.4 非レアルな現在の条件.....145
4.3.3.5 非レアルな過去の条件.....146
4.3.3.6 まとめ.....147
4.4 まとめ.....151

第５章　考察.....156
5.1 はじめに.....156
5.2 日本語とセルビア語の条件表現の類型論観点からの対照...156
5.2.1 従属節のモダリティの観点から.....157
5.2.2 主節のモダリティの観点から.....157
5.2.3 従属節と主節の事柄的な観点から.....158
5.2.4 日本語とセルビア語の共通点と相違点.....159
5.3 仮定性の観点からの対照分析.....160
5.3.1 非条件的な意味.....160
5.3.1.1 時間を表す文の性質から.....161

5.3.1.2 原因・理由を表す文の性質から 161
5.4 仮定的な意味と用法の対照分析 162
5.4.1 レアルな条件と日本語の条件形の使用傾向 162
5.4.2 ポテンシャルな条件と日本語の条件形の使用方法 162
5.4.3 非レアルな条件と日本語の条件形の使用傾向 163
5.5 まとめ 164

第6章　結論 166
6.1 本研究のまとめ 166
6.2 研究史的意義 168
6.3 今後の課題 169

巻末資料—セルビア語動詞の変化 170

参考文献 184

用例出典 189

序章

1. 本研究の出発点

本論文では、日本語の基本的な条件形「と・たら・なら・ば」が表す非条件的な意味と条件的な意味を仮定性（hypotheticality）の観点から眺め、セルビア語との対照を通じて、考察・分析を行う。本研究の主要な課題は、スラブ語に属するセルビア語と日本語という類型的に異なる言語の対照を行うことにより、日本語の条件構文の様々な仮定的な意味を分析することと同時に非条件的な意味と区別させることである。

セルビア語と日本語では、「条件」という概念には、大きな違いがある。セルビア語の「条件」とは、必ず仮定的な事柄を表していて、いくつかの種類に分けられている。これに対して、日本語の「条件」は、仮定的な事柄だけではなく、時間、原因・理由などの非仮定的な事柄も表すことができるカテゴリーである。さらに、仮定条件における「と・たら・なら・ば」の使用規則は明確ではない。セルビア語では、ある条件を表すための言語的手段は明確であるのに対して、日本語では一つの条件形がいくつかの条件の種類を表すことができる。それゆえ、セルビア語を母語とする学習者にとって、日本語の条件構文は非常に困難な項目の一つである。

日本語の「と・たら・なら・ば」の形式をセルビア語に訳すと、意味はほとんど変わらないし、四形式の違いが出てこない。どの条件の種類でどの形式を使用すべきか、明確な規則がないため、同じ文にどの形式でも入れ替えができるとセルビア語話者の日本語学習者は誤解してしまう。次の例を見てみよう。

(1) 雨が降れば、試合を中止する。
　　雨が降ったら、試合を中止する。
　　雨が降るなら、試合を中止する。

これらの文をセルビア語に訳すと、次のようになる。

Ako[接続詞] bude padala kiša[第二未来形], otkazaćemo[未来形] utakmicu.

この用例の場合は、「降れば」、「降ったら」、「降るなら」の意味をセルビア語に訳すと同じものになるため、セルビア語母語話者の学習者は「ば・たら・なら」の区別が分からなくて、条件構文と非条件的な文との区別さえできなくなってしまう。

次の文を見てみよう。

(2) *本を読むと、私に貸してください。

本を読んだら、私に貸してください。

*本を読むなら、私に貸してください。

*本を読めば、私に貸してください。

(「*」は非文であることを示している)

この文のセルビア語訳は、次のようになっている。

Kad 接続詞 pročitaš 現在形 knjigu, pozajmi 命令形 mi je.

では、上記の例文では、時間的な意味を表しているにもかかわらず、なぜ条件形が使用されているのだろうか。しかも、「と・たら・なら・ば」の意味の違い、正しい使い方は、どのように区別すればいいだろうか。

条件文と他の複文との関係については、すでに多くの研究がなされてきている。その中で用いられている「既定性」(Settledness) と Realis/Irrealis[1] という概念に特に注目したい。これらの概念は、日本語の条件形と時間文および原因・理由文との関わりの理解にとって重要な手がかりとなるからである。

有田(2006b)は、発話時点で真偽が決定している文を「既定の文(settled sentences)」と呼び、発話時点で真偽が決定していない文を「非既定の文(unsettled sentences)」と呼んでいる。また、Akatsuka (1985)と和佐(2006)は、Realis/Irrealis の概念を使って条件文と時間文、原因・理由文との関係を研究してきた。Akatsuka (1985)は結論として、英語の時間節の接続詞である when, そして原因・理由節の接続詞である because, since は、Realis 領域において、条件節の接続詞の if に対応していると述

[1] Mithun (1999)は、Realis と Irrealis を次のように定義している。The realis portrays situations as actualized, as having occurred or actually occurring, knowable through direct perception. The irrealis portrays situations as purely within the realm of thought, knowable only through imagination. (Realis とは事態を実現したこと、起こったこと、あるいは実際に起こりつつあることとして描写する。それは直接的な知覚を通して知り得るものである。Irrealis とは事態を純粋に思考の領域内にあるものとして描写する、それは想像を通してのみ知り得るものである。)(和佐、2006)

べている。しかし、セルビア語母語話者の日本語学習者にとっては、settled sentences、あるいは Realis 領域に属する文は、条件として捉えられておらず、また unsettled sentences の中の仮定性のない文も、条件としては理解しづらい。

さらに、用例（2）を見れば分かるように、「たら」の使用しか許容できない理由がある。それは、従属節と主節の関係、即ち、文末の表現にある。

北條（1964）は文末表現が「と」と「ば」の用法にどんな影響を与えているかについてこう考察している。「と」の文末には意志表現の強い文はまったくつけられない（3a）が「ば」の文末にはまったくつけられないとは言えず（3b）、例 3c-3f のようにつけられる場合もある。しかし、3c-3f が可能である理由については述べていない。

（3）a* 病気になると、休んだほうがいい。

b* 病気になれば、休んだほうがいい。

c 分からなければ、手をあげなさい。

d 寒ければ、窓を閉めてください。

e 時間があれば、電話をかけてください。

f 食べられれば、食べてください。

（3a-3fは北條「1964：76」からの引用）

田（1989：62）は、北條（1964）が述べた文末表現のことを「モダリティ」という用語を使って、次のように結論づけている。

「条件語の本来持つ性質上の用法に起因するのであるが、本質的には、文末のモダリティが従属節の条件語を規定するのである。つまり、どのような「述べ方」「表現意図」で表現するかによって、どの条件語を使うかが制約されるのである。」

そして稲葉（1990：70）は田（1989）の研究成果について、田が述べたことを捉えなければならないといっている。つまり、どの条件接続辞を用いるかによって、主節の文のモダリティが制約されるといっている。さらに「ば」の文末表現について次のように述べている。

「「ば」は、従属節の述語が動作性の場合と従属節の述語が状態性、または従属節が話者の自己意志で制御できないような事柄の場合では、主節制約が異なるので別々に扱うことにする。「ば（動作性）」の場合は、主節は「描写文」、「判断文」に限

られ、「意欲文」、「命令・依頼文」は不適格文となる。「ば（状態性）」の場合は主節に制約はない。」

以上のように「と・たら・なら・ば」の時間、原因・理由文との関係、また主節制約について沢山論じられているが、まだ十分に明らかにされていない側面もある。たとえば、条件形の用法において、どの条件形がどの条件の種類を表すことができるのか、またどの場合に非条件の意味を表しているかについてはまだ十分な研究がなされていない。

2. 目的

本研究では、日本語の「と・たら・なら・ば」が表す非条件的な意味をセルビア語の時間、原因・理由文、条件的な意味をセルビア語の条件構文と対照し、その用法を探っていく。研究課題は、以下の三点である。

1. Comrie（1986）が定めた条件のパラメータは、セルビア語と日本語の条件構文においてどのような役割をはたしているのか。日本語の条件構文を考察するにあたって、このようなパラメータは十分であるのか。
2. 「と・たら・なら・ば」は、どの場合にどのような非条件的な意味を表しているのか。時間文、原因・理由文との関係はどうなっているのか。
3. 「と・たら・なら・ば」はどのような仮定的な意味を表すことができるのか。仮定的な用法における四形式の使用傾向と特徴を探ってみる。

以上のような分析は、日本語の条件構文の用法を知るための方法であると同時に、日本語とスラブ語系であるセルビア語の条件構文との類似点及び異なる点をみいだす手がかりにもなるので、見ていくことにする。

3. 方法

本研究では、日本語とセルビア語の対照を通じて、「と・たら・なら・ば」の非条件的な用法における時間的な意味及び原因・理由の意味を探っていく。また、仮定的な用法において、従属節のモダリティ、主節のモダリティと両節の関係を分析しながら、両言語における対照項目の対応関係、その共通点と異なる点を探ることにした。

研究方法において、日本語の文学作品から時間的な意味及び原因・理由の非条件的な意味を持つ「と・たら・なら・ば」の例を取り、日本語とセルビア語の対訳からその対応関係を分析した。また、仮定的な意味を持つ「と・たら・なら・ば」の例をとり、日本語とセルビア語の対訳からその対応関係を分析した。集めた例の翻訳に関しては、著者が直接翻訳した。翻訳の客観化を極めるため、日本語とセルビア語の対訳本を用いた翻訳の形が望ましいとは考えられるものの、日本語とセルビア語の直訳の本がまだ少なく、英語などの外国語経由で翻訳されたものが多いため、著者が直接翻訳することにした。翻訳の際、翻訳の正確さ及び客観性に注意した。

4. 構成

本論文の構成を以下に述べる。

序章では、研究のきっかけとなった問題点を明らかにし、研究目的と研究方法を述べる。

第 1 章では、日本語の「と・たら・なら・ば」のさまざまな意味と用法に関する先行研究を概観する。

第 2 章では、Comrie が定めたパラメータに基づいて日本語とセルビア語の条件構文を対照し、考察したい。日本語の条件構文を分析する際に、Comrie が定めたパラメータは通用するのか、それに加えなければならない基準があるのか、を検討したい。

第 3 章では「と・たら・なら・ば」が表す非条件的な意味を探って、どの条件形がどの場合に非条件的な意味を表すことができるのかを調べる。特に時間と原因・理由の意味に焦点を当てた。また、時間文、原因・理由文との関係はどうなっているのかを考察していきたい。さらに、セルビア語の時間文、原因・理由文などの複文との共通点と異なる点を探りたい。

第 4 章では、「と・たら・なら・ば」が表すさまざまな仮定的な意味を分析する。セルビア語の条件の種類（レアルな条件、ポテンシャルな条件、非レアルな条件）と対照し、「と・たら・なら・ば」はどんな条件の種類を表すことができるのかを調べ

る。さらに、格条件の種類においての「と・たら・なら・ば」の用法を従属節のモダリティ、主節のモダリティ、従属節と主節の関係という三つの観点から分析する。四形式の使用傾向と違いを調べる。

第5章では、第2章、第3章と第4章で得られた結果について考察を行う。

最後の第 6 章では、本研究から得られた新たな知見をまとめ、今後の研究課題について述べる。

本論文の構成

まえがき：本研究の出発点、目的、方法、構成

↓

第1章：先行研究

↓

第2章：条件の種類を見分けるパラメータ　－　Comrie のパラメータに基づく日本語とセルビア語の条件構文の対照

↓

第3章：「と・たら・なら・ば」の非条件的な意味と用法
—セルビア語の時間文と原因・理由文との対照を通じて

↓

第4章：「と・たら・なら・ば」の仮定的な意味と用法
—セルビア語のレアルな条件、ポテンシャルな条件と非レアルな条件との対照を通じて

↓

第5章：考察

↓

第6章：結論

第１章

先行研究

1.1　日本語における条件表現の研究

日本語学では、条件表現についての研究は数え切れないほど沢山ある。その中には、「と・たら・なら・ば」の個々の形式における意味、用法、特徴づけについて分析しているものもあるし、四形式間の相違に焦点が置かれる研究もある。また、条件という概念とさまざまな非条件的な意味との関連についての研究もなされている。本論文では、セルビア語を母語とする日本語学習者に対して重要だと思われる条件表現の分析を三つのグループに分けて、まとめた。

1.1.1「と・たら・なら・ば」の形式別の用法分析

個々の条件形の特徴についての研究の中から、まず Alfonso（1966）と久野（1973）の研究を取り上げたいと思う。Alfonso が日本語の条件形の分析を英語の if/when との比較を通じて行っているのが、ヨーロッパ言語に属するセルビア語を母語とする日本語学習者にとってとても重要だと考える。セルビア語の場合は、条件の概念が英語と共通する部分が多い。最も重要な共通点は、条件（if）の概念であるのか、それとも時間（when）の概念であるのかは、仮定性（hypotheticality）の基準によって決められることである。

久野（1973）は事柄を「一般の出来事」と「過去の出来事」に分けて、「と・たら・なら」の文法的な制約を分析している。

以下に Alfonso と久野 の各条件形の分析における共通点及び異なる点について述べる。

Alfonso と久野によれば、「と」は従属節が先行条件を表し、主節がその「当然の結果」、「習慣的な結果」、あるいは「不可避的な結果」を表すとされている。（例文は久野（1973：116）から引用）

(4)a 太郎は日光へ行くと、田中さんの家に泊まる。

　b＊　太郎は日光へ行くと、弟を連れて行く。

例　4b　の「と」の使い方は不適当である。その理由は、「弟を連れて行く」である主節が「日光へ行くと」である従属節の完了以前に起きる動作・状態を表しているからであると久野は説明している。

(5)a お酒を飲むと、顔が赤くなる。

b　夏になると、ニューヨークに行きます。

c*　来年夏になると、ニューヨークに行きます。

久野は 5c の「と」の使い方も不適当であるとしている。「と」は「当然の結果」、「習慣的な結果」を表すが、5c の「来年の夏」は一回限りの動作を表しているため、5c の文法性が低いと説明している。Alfonso はこの件については触れていない。

また、「と」の制約については、主節は命令・要求・決意を表すことはできないと主張している。

(6)a* 寒いと、もっと着なさい。

b*　夏になると、ニューヨークに行ってください。

c*　太郎が来ると、帰ります。

「と」の主節が従属節の「当然の結果」、「習慣的な結果」、あるいは「不可避的な結果」を表すという制約を持つ。命令・要求・決意は、いわば話し手の考えで決められるものであることから、「と」の主節は、命令・要求・決意を表すことができない。例文の「もっと着なさい」、「ニューヨークに行ってください」、「帰ります」は命令・要求・決意を表すため、これらの文は非文となる。

久野は、「過去の出来事を表す場合」の「と」の用法について、「と」は過去の文で使われる場合、「当然の結果」、「習慣的な結果」、「不可避的な結果」を表すのではなく、過去の一回限りの出来事を表していると指摘している。
たとえば、次のような例である：

(7)a 家を出ると、雨が降っていた。

b　家で寝ていると、二郎が訪ねてきた。

つまり、7a の「家を出る」ことと「雨が降っていた」こととの間や、「家で寝ている」ことと「二郎が訪ねてきた」こととの間には、必然的な結果の関係が含まれていないことを指摘し、Alfonso が提示した「と」の説明だけでは不十分であると指摘している。

(2)「たら」について

「たら」は従属節が完了してから主節が起きることを表している。文末の動詞が現在形の場合は、条件的あるいは仮定的なことを意味する。文末の動詞が過去形の場合は、時間的に先行することを意味する。

(8)　夏になったら、ニューヨークに行きます。

(9)　家を出たら、雨が降っていた。

久野は、「たら」の制約について、「主節が過去の出来事を表す場合には、従属節と主節の間に、主節の主語による意図的な時間的前後関係があってはならない」と付け加えている。

(10) a* 太郎は夏になったら、軽井沢に行った。

b　夏になったら、太郎は軽井沢に行ってしまった。

(11) a*　太郎は家に帰ったら、ご飯を作った。

b　太郎は家に帰ったら、花子から手紙が来ていた。

つまり、10a と 11a では、主節の主語の意図による前後関係が認められるため、非文法的であり、そのような意図が認められない b の文は文法的である。すなわち、過去の出来事を表す場合、10b と 11b の「太郎は軽井沢に行ってしまった」「花子から手紙が来ていた」のような主節がしばしば「思いがけない出来事」を表している。

(3)「なら」について

Alfonso の説明によると、「なら」は他者の発言を取り上げて、トピックにするものである。「なら」の用法において、久野は次のような制約を挙げている。

1) 従属節が確実な出来事を表す場合には「なら」が用いられない。

(12)*　夏になるなら、ニューヨークに行きます。

2)従属節が実現・完了しなければ、主節が生じ得ないような動作・状態を表す場合は非文法になる。

(13)a* たばこを飲むなら、やめられなくなるでしょう。

b　太郎は日光へ行くなら、弟を連れて行く。

ここでは、たばこをやめられなくなるという状態の前には、たばこを吸うという動作がまず実現しなければならないので、13 a の例は非文である。これに対して、13b の「弟を連れて行く」ことは「日光へ行く」ことがまだ完了しないうちに起きることが可能であるため、非文法にならない。

(4)「ば」について

Alfonso によると、「ば」は、従属節が先行条件を表し、主節がその「当然の結果」、「習慣的な結果」、あるいは「不可避的な結果」を表し、条件的あるいは仮定的なことを意味する。

(14)a 春になれば、花が咲く。

b 100 から 50 をひけば、50 になります。

また、「ば」には次のような制約がある。次の例に見られるように、動作性述語[2]の場合は、主節は、命令・要求・などを表すことはできない。

(15)a 欲しければ、取ってください。

b 仕事が終わらなければ、休んではいけません。

c* 本を読めば、貸してください。

15a の「欲しい」と 15b の「終わらない」は状態性述語であるので、主節は命令・要求などを表すことができる。ところが、15c の「読む」は動作性述語であるため、主節に命令を表すことはできない。

久野は、「ば」について言及していない。

吉川（1989）は、文末制限からみた「と・たら・なら・ば」について、次のように指摘している。

と　　文末が制限される。

ば　　バの形の述語（従属節）が動作性だと文末が制限される。

バの形の述語（従属節）が状態性だと文末が制限されない。

たら　文末制限がない。

制限される文末の形とは意志、命令、依頼、禁止、忠告、勧誘、希望の表現のことである。これらの表現をするときは、条件の「と」は使えない。「たら」は使える。

宮島(1964)も、「主文に命令・すすめ・許可・希望・意志など判断以外の表現がくる場合にはタラが用いられる。バが使える場合もあるが、トは使えない。

（16）a　　電車に乗ったら，歌はやめなさい。（命令）

---

[2] 動作性述語とは、例えば、「行く」、「読む」などで状態を表さず、具体的な動作を表す動詞である。それに対して、状態性述語とは、例えば、「いる」、「終わらない」、「行ける」、「ほしい」などで、状態を表す動詞、動詞の否定形、動詞の可能形、形容詞である。

b　　気分が悪かったら、帰った方が良い。（すすめ）

c　　金ができたら、山へ行きたいな。（希望）

d　　くわしい予定がわかったら、またお知らせします。（意志）

16b,c,d は、「バ」でもいえるが、16a は置き換えられない。命令が下にくるもののうち、従属節と主節の主体が同じで、従属節が動作の場合（a はこれにあたる）には、「タラ」でなければいけないようである。」としている。

しかし、「仮定的な条件」に属する文においては、主節に意志表現がくる場合と、それ以外の表現がくる場合とはその制限される内容が異なる。つまり、意志表現の場合は、従属節の述語が動作性であっても、従属節と主節の主体が異なれば、使用可能である。

(17)「貴方が仕ないと仰有ってくだされば安心してお待ちしているんだけど・・・」（こんなこと）

(18) そして友がつまらないと云えばよすつもりだったが、・・・。（晩秋）

(19)　踏み絵に軽く足をのせれば、即刻、ここから放免してやる。（沈黙）

また、「と」にも意志表現がくる用例がみられる。

(20) 断っとくがな、へんなまねをすると一人は叩っ殺すぞ、・・・」（さぶ）

「と」、「ば」の使用において、主節のモダリテイに制約があるということは確かであるが、このモダリテイの制約は、従属節のモダリテイとの関係から説明する必要がある。つまり、「仮定的な条件」に属する文には、後に細かく説明するように、いくつかの条件の種類が見られる。どのタイプに属するかによって、従属節のモダリティも主節のモダリテイの制約も異なるからである。

以上、「と・たら・なら・ば」の形式別の用法、特徴づけ及び制約についての研究を取り上げたが、以下では、四形式の用法の分類を行った先行研究を概観したい。

1.1.2.「と・たら・なら・ば」の用法分類

「と・たら・なら・ば」の用法に関する分類を行った研究について見てみたい。

小林（1996）によると、古典語の二つの条件の形である「未然形+ば」、「已然形+ば」による文を、松下（1930）の分類を把握した上で、次のように分類できる。（参考

として、松下は 1）仮定（未然仮定/現然仮定（いわゆる恒常条件））2）確定（必然確定/偶然確定）に分類している）。

「

仮定条件　　完了性／・・・花咲かば見む。

非完了性・・・君行かば我も共に行かむ。

順接条件

恒常条件・・・・・・・・・酒を飲めば酔ふ。

確定条件　　必然確定・・・今日は雨降れば客無し。

偶然確定・・・顧みすれば月傾きぬ。

それぞれの定義は、次のようになる。

完了性仮定条件・・・・・未来時において、動作・作用の完了した場合を仮定するもの。

非完了性仮定条件・・・・現在の事実に関する仮定や、現在あるいは過去の事実に反する仮定（反実仮想）など、完了性以外の一切の仮定をさす。

恒常条件・・・・・ある条件が成立する際にはいつでも以下の帰結句の事態が成立するという、恒常的・普遍的性格を持ったものとして提示するもの。

必然確定条件・・・・・条件句が原因・理由を表し、条件句と帰結句とが必然的な因果関係で結びつくもの。

偶然確定条件・・・・・条件句が帰結句の事態の成立する単なるきっかけであったり、帰結句の事態を認識する前提であったりするもの。

（中略）以上により、本書においては、「已然形+ば」による普遍的・一般的表現を仮定条件・確定条件とは異なるものとして設定し、その上でその歴史的な変遷の過程、様相を把握しようと思う。なお、このような立場は、湯沢幸吉郎氏の分類にもみえる（湯沢<一九五九>）。また、山口堯二氏は、この恒常条件にあたるものを「一般条件」の名で呼び、松下の扱いに対して、

<古典語におけるこの種の条件関係を確定・仮定という二つの範疇のいずれかに収めようとすることには多少の無理を感じるのであり、それを避ける意味で私は確定・仮定のいずれとも区別する視点に立とうとした。（山口<一九八

0>）>と述べている。用語は異なるが、基本的な視点は本書の立場と一致しているものといえるであろう。」

現代語の条件形「と・たら・なら・ば」による条件構文においても、ほとんど上のように、仮定条件/恒常条件/確定条件の三つに分類している。ここに、田(1989)の分類と中島（1997）の分類を取り上げてみると、田 は、1)仮定条件、2)既定条件、3)恒常条件の三つに、中島は、1)仮定的条件、2)事実的条件、3)一般的条件の三つに分類しているのである。田 の「既定条件」と中島の「事実的条件」は同類のものをさしており、「既定条件」は、小林の「確定条件(偶然確定）)」のことである。

益岡・田窪(1989)では、条件表現は「ある事態と別の事態との依存関係」を表すものであると述べられている。また、表 1. で示されているように条件表現を四つに分類している。それは、法則的、偶有的、仮定的、反事実的である。「法則的」とは、ある事態が起こることが、必ず別のある事態が起こることを意味するという因果関係のことである。その場合は、「ば」が用いられる。「偶有的」とは、話し手が事実として認識している依存関係を表し、「と」が用いられ、「たら」になると事態の完了性を表す。「仮定的」は、「と・たら・なら・ば」が用いられ、「もし」、「仮に」などを伴って使用することもある。「反事実的」は条件文を表す時、主節に逆接の接続助詞「のに」などをつける場合が多い。

表 1. 益岡・田窪(1989)による分類

条件表現	形式	例文（益岡・田窪（1989：192－3））
法則的	ば	ちりも積もれば山となる
偶有的	と たら	この商品は、涼しい季節になると売り上げが落ちる この仕事が終わったら、少し休みましょう
仮定的	ば	もし彼の理論が正しいとすれば、大変なことになる
反事実的	ば たら	もし私が鳥であれば、あなたのところに飛んでいけるのに あの薬を飲んでいたら、いまごろは大変なことになっていたところだ

前田(1991)は、小説に書かれている条件表現「と・たら・なら・ば」の例を取り出し、レアリティーという観点から考察して、分類を行った。前田はまず、条件表現のもっとも基本的なものとする「仮定的」について二種類に分けた。一つは「仮説的」、つまりレアリティーが未定である場合である。もう一つは「反事実的」、つまり、事実に反する事柄を、それが実現した場合を想定して仮定する場合である。前田が行った分類は表 2. で示している。

表 2. 前田(1991)による分類

					レアリティー 前件	レアリティー 後件		ナラ	バ	タラ	ト
条件的用法	仮定的	一回	事実的		事実	反事実	①	○	×	×	×
			反事実		反事実	反事実	②	○	◎	◎	○
			仮説		未実現	未実現	③	◎	◎	◎	○
			事実的		事実	未実現	④	○	○	○	○
	非仮定的	多回	一般(恒久)		(不問)	(不問)[4]	⑤	×	◎	◇	◎
			反復・習慣		事実	事実	⑥	○	◎	◇	◎
		一回	様々な状況	連続			⑦	×	△	△	◎
				きっかけ			⑧	×	○	◎	◎
				同時			⑨	×	△	◎	◎
				発見			⑩	×	○	◎	◎
				時			⑪	×	△	◎	◎
				場所			⑫	×	○	◎	◎
非条件的	並列・列挙						⑬	○	◎	×	×
	評価的用法						⑭	×	◎	◎	○
	終助詞的用法						⑮	×	○	○	×
	後置詞的用法						⑯	△	○	○	○
	接続詞的用法						⑰	○	○	○	○

◎＝幾らでも用例がみられる
○＝用例もあり，使えると判断できる
◇＝不可能ではないだろうが，用例はほとんどない
△＝近い用例はあるが，制限がある
×＝使えない

表 2. によると、1－4 は仮定的条件文で、これらの従属節の出来事は事実的なことを表している。2 及び 3 は反事実条件文と仮説的条件文である。
5－12 は、非仮定的な条件文で、5 と 6 によって表されるのは出来事が繰り返し起こるものである。7－12 は様々な状況を表しながら、一回しか起こらない出来事を表すものである。

13－17 は、「と・たら・なら・ば」の形が使われているが、条件的なことを表していないため、非条件的な用法としている。
しかし、前田(1991)の分類は、前田自身も指摘しているように、「と・たら・なら・ば」四形式の使い分けについては明快な基準を打ち出すことは完全にはできず、問題点はそのまま残っている。

これらの研究に対して、高橋ほか（2005）は、従属句節(条件節）のモーダルな性格から、条件文を五つに分類する事ができると指摘した。その内容は次のようである。

- 仮定的な条件（成立するかどうかまだ分からないのだが、成立するかもしれないし、成立しないかもしれない条件）をさしだすもの
- 予定的な条件（一定時間後に成立が予定されている条件）をさしだすもの
- 反現実の仮定的な条件(現実にはないのに、仮に、あることとしてさしだす条件)をさしだすもの
- 既定の条件（すでに現実に成立した条件）をさしだすもの
- 一般的な条件（特定の時間位置に限定されず、習慣的な繰り返し、あるいは一般的な可能性として成立する条件）をさしだすもの

(21) a　あした雨がふったら、えんそくはやめる。

b　むこうについたら、電話しろ。

c　もしもおれがおんなだったら、おまえのようなおとこがすきになっただろう。

d　目をさまして、あまどをあけると、ゆきがつもっていた。

e　このあたりはおお雨になると、かならずみずがつく。

つまり、21a は仮定条件、b は予定的な条件、c は反現実の仮定的な条件、d は　既定条件、e は一般的な条件である。高橋ほかの分類で注目すべきなのは、今まで仮定的な条件として取り扱ったものの中から予定性のものを取り出して、仮定的な条件とは異なるものとして分類したことである。

1.1.3. 条件文と時間文及び原因・理由文との関わり

定延(2006:197－198)は条件表現をプロトタイプカテゴリとしてみているうちに、こう述べている。「さまざまな言語を通じてみると、どの言語でも安定して条件表現になっているもの(予測的条件文)がある一方で、言語によって条件表現になったり、ならなかったりするものがある。

（中略）これらを把握するには、条件表現は『典型』（プロトタイプ）と『周辺』を持つプロトタイプカテゴリである。条件表現の典型はどの言語でも一致しやすい一方、どこまでを条件表現とするかは言語ごとにずれている」という考え方が便利と思われる。」また、言語内でも条件表現がほかの表現と重なってしまう例も珍しくないと指摘している。日本語の場合も、条件節が時間節と重なったり、目的節、原因・理由節と重なったりすることが多いという。

益岡（2006）は、レバらしさ、タラらしさ、ナラらしさがどこにあるかを考察しながら、こう述べている。

レバ形式の条件文は、前件と後件で事態間の一般的因果関係（General causal relation）を表す。前件の事態が「因」、後件の事態が「果」を表すという。たとえば、

（22）需要が増えれば価格が上がる。

タラ形式の条件文については、前件で未実現の個別的な事態を表し、後件でその実現に依存して生起する別の個別的事態を表すと主張している。その特徴を個別的事態の時間的依存関係（temporal dependency）と呼んでいる。たとえば、

（23）向こうに着いたら、連絡してほしい。

ナラ形式の条件文については、こう説明している。前件においてある事態が真であると仮定し、それに基づいて後件において話し手の判断や態度を表す性格がある。ナラ形式の条件文の特徴として「仮定性」（hypotheticality）を挙げている。

（24）私は肝の中でどうせ無料の原稿だから、好き放題を書こう、もし原稿料を払ってくれるのなら、彼の販売拡張に協力しようと思ったのですが,・・・。（文芸春秋編「司馬遼太郎の世界」）

益岡（2006）自身が指摘しているように、三つの形式に固有の因果性、時間的依存関係、仮定性があるが、それは、条件文の一般的規定にどう関係するのか、さらに条件表現が原因・理由表現、時間表現とどう関係しあうのかという問題を取り上げるのが非常に重要である。

有田（2006a）は、条件文/原因・理由文/時間文との関係について論じる中で、非仮定的な事柄を表す条件形の意味特性について考察する。まだ実現していない事態を表す「たら」は「未実現性」を、実現された事態を表す場合は、「非予測性」を持っていると主張している。また、有田（2006b）は settledness という概念を中心にして、日本語と英語の条件文と時制節性について考察をする。結論として、有田（2006b：147）は、「英語の条件形式 if は時制節を取るのに対し、日本語の条件形式は、英語同様完全な時制節を取る形式（ナラ、ノナラ、トスレバ）と不完全な時制節を取る形式（レバ、タラ）に分けられる。（中略）日本語の条件形式のうち不完全な時制節をとる条件形

式は既定的な条件節を表すのに制約があり、一方、完全な時制節をとる条件形式は、非既定的な条件節を表すのに制約がある。」と主張している。

Akatsuka（1985）は、英語の時間節の接続詞である when, そして原因・理由節の接続詞である because, since は、Realis 領域において、条件節の接続詞の if に対応していると述べている。高梨(2003)も、条件文と理由文は、基本的には、従属節が仮定的であるか、事実的であるかによって区別されるとしている。また、前田(1998)でも「条件文」は「仮定的な因果関係を表す」と定義され、「事実的な因果関係を表す」のは、「原因・理由文」であるとしている。

西光（2006）は、条件表現と隣接概念の概念空間図を提案した。

時間関係（when）	因果関係　（because）
条件関係（if）　（不確定）	

西光（2006：219）の説明によると、「時間関係は認知的には一番単純な関係である。単に二つの出来事の時間的重なりを述べるのみであるから、特別な認知プロセスを経る必要がない。現実因果関係は、2 つの出来事の間に因果関係が成立するということを確認しなければならない。2 つの出来事を確認するだけでは不十分で、その裏に一般的な因果関係が成立しているという一般的な知識が必要となる。条件関係は、確定していない出来事を想定し、一般的因果関係の知識を活用してどのような結果になるかを予想するというかなり現実から離れた複雑な認知プロセスを必要とする。」

以上、本研究と関連のあるもののうち、検討を要するものを取り上げた。このような問題点を念頭において、仮定条件を他の事柄から明確に区別しているためセルビア語との対象に最も適切であると考える高橋ほか（2005）の分類に基づいて日本語の「と・たら・なら・ば」の時間関係、原因・理由関係および条件関係の考察を進めることにする。

第2章
条件の種類を見分けるパラメータ
ー　Comrie のパラメータに基づく日本語とセルビア語の条件構文の対照

2. 1 はじめに

条件表現は言語によって、その言語形式と意味は様々である。実際は、その変異の中に、共通している部分があると考えられるが、その部分がどこに有るかは明らかにされていない。また、言語によって、固有だと思われる部分もあるが、それはどこにあるか、唯一つの言語を研究しているだけでは、その特徴がその言語に固有のものであるのかどうか、分からない。

本章では、セルビア語と日本語の条件表現の類似点と異なる点を見出すために日本語の条件表現をセルビア語の条件表現と対照し、類型論の観点からみていく。

2.1.1　セルビア語の「条件文」と日本語の「条件形」の定義

本研究のキーワードとなっているセルビア語の「条件文」と日本語の「条件形」との定義から始めたいと思う。セルビア語の条件文とは、主節の状態が成り立つために必要な条件となる現実的状態ではなく、仮定的状態を表すモーダルな従属文のことである（Stanojčić, Popović, Micić, 1989）。日本語の条件形は、主としてあわせ文のなかの続ける文の述語として用いられる形で、言い終える文の表す事柄の条件、すなわちその事柄が成り立つために必要な事柄を表す形である。（鈴木、1989：349）また、高橋ほか（2005）も日本語の条件文について次のように述べている。「日本語の条件句節（a）と主節（a）との関係の基本は、はこのそとの関係をあらわすことであって、この関係さえなりたてば、未来のことでも、過去のことでも、また、現実のことでも、非現実のことでも、あらわすことができる。」（高橋ほか 2005：263）

ここで見られる違いは、セルビア語の条件文は必ず仮定的状態を表す文でなければならないことに対して、日本語の条件表現は必ずしも仮定的な事柄を表すとは限らない点である。

本研究では、日本語の仮定的な事柄を表す文しか条件文として扱わないこととする。非仮定的な事柄を表す文は、非条件的な意味を持つ複文　ー時間文あるいは原因・理

由文　ーとして扱うことにする。即ち、条件の種類を見分けるパラメータについて論じる際に、それは仮定的な事柄のみに対するパラメータを意味する。

2.2　条件文の種類を見分けるパラメータ

Comrie　(1986)　は、類型論の観点から、条件文のパラメータ (parameter) を次のように提示した。それは (1) 節の順番　(clause order) , (2) 条件のマーカー (marking of conditionality), (3) 仮定の度合い (degrees of hypotheticality)　と (4) 基準時 (time reference) である。

2.2.1　節の順番

Stanojčić, Popović, Micić (1989) によると、セルビア語では、条件節は主節に先行することが普通であると同時に主節が前に来ることも可能である。たとえば、

(25) Ako[接続詞] dobijem[現在形] premiju, kupiću[未来形] auto.

もし宝くじに当たれば、車を買う。

あるいは、

(26) Kupiću[未来形] auto ako[接続詞] dobijem[現在形] premiju.

もし宝くじに当たれば、車を買う。

(25) の場合は、条件節で表されている事態が強調されている。宝くじに当たるという出来事が最初に起こり、車を買うという動作が発生するのである。つまり、(25) の文は出来事の順番を反映した語順で表す意味内容になっている。(26) の場合は、主節の出来事が条件構文のフォーカスであって、条件節は主節の出来事が成立するための重要な事態として表現されている。

セルビア語と違って、日本語では、主節が従属節の後に来るという文法規則 (主節の動詞は必ず文末に来る) がある。

2.2.2　条件のマーカー

セルビア語では条件を表すマーカーは接続詞の ako,　ukoliko, li, kad, da である。しかし、条件文の意味を正確にする手段として重要なのは、条件節および主節で使われている動詞の形である。接続詞と動詞の形の組み合わせによってセルビア語では、条件の意味のタイプ、すなわち条件文の種類が区別される。条件節および主節の動詞の形がどれだけ重要な役割をはたしているかが、接続詞 kad の例を見てよく分かる。Kad は時間

を表す接続詞として時間文で最も多く使われている。時間文では、動詞の現在形、過去形、または未来形と一緒に使われている。一方、条件文の場合は、動詞の接続法または第二未来形[3]の使用によって、kadの時間文との区別がつく。

日本語の場合は、「と・たら・なら・ば」それぞれの意味と用法が異なっているにもかかわらず、共有している部分もあり、入れ替えの可能な場合とそうではない場合がある。 たとえば、日本語の「と・たら・なら・ば」は、条件を表す場合に使われるだけではなく、時間を表す場合にも使われる。また、有田（1999）は、プロトタイプという観点から日本語の条件文の説明を試みているうちに、基本的な条件形式としては、ば系列の「れば」、「たら」、「なら」のみを認め、時間を表す性質を持っている「と」および「たら」の一部分は、条件文の非典型例とみなしている。すなわち、日本語の条件のマーカーは、条件のみを表すとは限らない。日本語の条件のマーカーは、条件を表すものと時間や原因・理由のようなさまざまな非条件的な意味を表すものとに分けられていない。「もし」、「仮に」などは、条件のマーカーの機能をしているが、これらの言葉の条件文における使用は不可欠なものではないので、マーカーのみによって非条件的な意味、また条件の種類を見分けることはできない。

2.2.3 仮定の度合い

Comrie（1986） によると、英語の条件節では仮定の度合いが二つに分けられる。それは、仮定の強いもの（たとえば、非現実の条件）と仮定の弱いもの（たとえば、一般条件）である。仮定が強ければ強いほど出来事の起こる可能性は低くなる。

セルビア語では、仮定の度合いは、接続詞と動詞の形の組み合わせによって明確に表されている。このパラメータによって、セルビア語の条件は三つのタイプに大別される：現実の（レアルな）条件，潜在的（ポテンシャルな）条件と非現実的（非レアルな）条件である。

レアルな条件の例は：

(27) Ako[接続詞] je[現在形] Marko u školi, preneću[未来形] mu poruku。

マルコが学校に来ていれば、伝言を伝えておく。

ポテンシャルな条件の例は：

---

[3] 第二未来形 （futureII）は発話時の後の時間で、他の動作の前か他の動作と同時に実現すると推測される動作を表している法である。
例：もし間に合えば、芝居の切符が買える。

(28) Kad[接続詞] bih dobio[接続法]/Da[接続詞] dobijem[現在形] premiju, kupio bih[接続法] auto.

もし、宝くじに当たれば、車を買うけど。

非レアルな条件の例は：

(29) Da[接続詞] sam imao[過去形] više slobodnog vremena, bavio bih[接続法] se sportom.

自由な時間がもっとあったなら、スポーツをやってたのに。

日本語では、例 30－32 に示されているように、条件節「と・たら・なら・ば」間で仮定の度合いがそれぞれ異なる。同じ条件形式が使われても、仮定の度合いがそれぞれ異なる（例 30－35）（Jacobsen, 1984））。

(30) ボタンを押すと/押したら、明かりが点いた。

(When I pushed the button, a light went on.)

(31) ボーナスが出れば/出たら、新しい車を買う。

(If/when I get my bonus、I'll buy a new car.)

(32) もっと早く起きれば/起きたら、間に合ったのに。

(If we had gotten up earlier, we would have made it on time.)

(33) 家に帰ったら、すぐ電話をする。

(When I get home, I'll phone you right away.)

(34) 太郎に会ったら、そのことを話しておく。

(If/when I see Taro, I'll talk to him about that.)

(35) 雨が降ったら、試合は中止になる。

(If it rains, the match will be canceled.)

(30) の「と・たら」は時間を、(31) の「ば・たら」は条件を、(32) の「ば・たら」は非レアルな条件をそれぞれ表している。また、(30) から (35) まで「たら」が用いられているが、(30) 、(33) は実際に話し手が従属節の行動を行うと、主節の出来事が自然に起こるか、話し手が意志的に行うことであるため、仮定の意味合いがないか、もしくは低いと言える。一方、(31) , (34) , (35) はより高い仮定の意味を表しており、(32) は仮定の度合いがこの中で最も高いのである。

このように、日本語の場合は、仮定の度合いの区別は、ある程度文脈からすることができる。一方、セルビア語の条件のマーカーの形式の違いから仮定の度合いがはっきり区別される。さらに、日本語で条件文として扱われている文はゼロから最大までの仮定の度合いを表すことができるのに対して、セルビア語の条件文はゼロの仮定の度

合いを表すことはできない。この違いは、日本語の条件の意味と非条件的な意味を整理するに当たって、とても重要な手がかりになる。

2.2.4 基準時

Comrie（1986）は、英語の条件文を根拠に仮定の弱い条件文は、基準時が未来であり、仮定の強い条件文は、基準時が過去であるとしている。

セルビア語では、条件節および主節で使用できるのは、動詞の現在形、過去形、未来形、第二未来形と接続法である。仮定の度合いが最も弱いレアルな条件の条件節には動詞の現在形または第二未来形、主節には未来形が用いられる。ポテンシャルな条件の条件節には接続法または現在形が用いられ、主節には接続法が使用される。仮定の度合いが最も強い非レアルな条件の条件節には接続法、現在形および過去形、主節には接続法が用いられる。

日本語では、テンスがあるものの、仮定の度合いによってテンスが変化するという条件節の基準時に関する Comrie（1986）の枠組みには入らない。日本語の場合は、テンスは条件節ではなく、主節によって表されている。しかも、現在形と未来形の区別が明確ではない。仮定性の最も強い非レアルな条件のマーカーとして主節の述語の過去形を指摘できるのである。

2.2.5. まとめ

以上述べたことを Comrie（1986）が提示した条件節のパラメータに基づいて、英語の条件節と比較しながら、表 3. でまとめてみる。

表 3. 日本語の条件節とセルビア語の条件節

パラメータ	セルビア語	日本語	英語
節の順番	条件節→主節 主節→条件節	条件節→主節 （文法的）	条件節→主節 主節→条件節
マーカー	接続詞 ako, ukoliko, li, kad, da + 条件節及び主節	「と・たら・なら・ば」、「もし」、「仮に」、非レアル	「If」

	の述語の形	な条件の主節の述語の過去形など	
仮定の度合い	• テンスとアスペクトの関わりで • マーカーで • ゼロの仮定性は条件文として取り扱わない	• テンスとアスペクトの関わりで • マーカーで • ゼロから可能	テンスのバックシフト（時制後退）で
基準時	仮定の度合いによってテンスがバックシフトするか法に変化する	仮定の度合いによってテンスが変化しない	仮定の度合いによってテンスがバックシフトする

表 3. では、条件構文のパラメータを考察してきた。日本語の条件節とセルビア語の条件節の類似点と異なる点をまとめてみると、以下の通りである。

1）節の順番：日本語の場合は、セルビア語と違って、必ずしも条件節の出来事が主節の出来事に先行するとは限らない。

2）マーカー：セルビア語では条件のマーカーは接続詞と主節のテンスである。日本語の場合は、「と・たら・なら・ば」は条件のマーカーだけではなく、非条件的な事柄のマーカーとしての機能も見られる。どの場合に条件のマーカーで、どの場合に非条件的な事柄を表しているかは整理されていない。条件のマーカーとして「もし」、非レアルな過去の条件の主節の過去形、主節においての判断文の「だろう・はず・仮に・に違いない」などが挙げられる。

3）仮定の度合い：日本語の条件節では、単純にマーカーの違いだけによって仮定の度合いを区別するわけではないため、セルビア語の条件節より仮定の度合いの区別の仕方が複雑である。セルビア語の場合は仮定の度合いは明確に文法化されている

し、条件の接続詞およびテンスの選択は重要なパラメータである。日本語の場合は仮定の度合いが明確に文法化されていない。

4) 基準時：セルビア語の場合は、基準時は条件節にも主節にも条件ごとに定められている。日本語の場合は、基準時は主節によって表されているし、未来形と現在形の区別がつかない場合が多い。例外は、「するなら・したなら」の従属節である。日本語の場合は、仮定の度合いによってテンスが変化することはないが、セルビア語の場合は、テンスのバックシフト（時制後退）が起こるかテンスが法に変化する。

本研究にとって、仮定の度合いを中心的なパラメータとして採用したい。つまり、仮定性のない文を条件文としてではなく、非条件的な意味を表す時間文や原因・理由文として扱うことにする。

2.3. セルビア語の条件の種類

2.3.1. セルビア語の条件の種類を見分ける基準

セルビア語では、二つの中心的な基準により条件の意味のタイプ、即ち条件文の種類が区別される。その基準は：(1) 条件の実現がどれだけ可能性のあるものか（仮定の度合い）、と (2) 条件節のテンスである。

条件の実現性の度合いによって、条件は三つのタイプに大別される：現実の（レアルな）条件，潜在的（ポテンシャルな）条件と非現実的（非レアルな）条件である。いずれも従属節（条件節）によって条件が、主節によって帰結が表される。条件節は ako, ukoliko, kad, da などの接続詞によって導かれる。

現実的（レアルな）条件とは、アクチュアルで、実現の可能性がある条件のことである。この条件の実現は不確かながらも、予想できるものである。この条件のマーカーは ako,ukoliko という接続詞＋動詞の現在形か未来形である。

潜在的（ポテンシャルな）条件は、実現の可能性があるものの、現実的（アクチュアル）ではない。想像されただけのものか、実現の可能性が低い条件のことである。条件節が現実に起こるかどうか不明の事柄を想定して述べる。この条件のマーカーは接続詞 kad+接続法、また接続詞 da+動詞の現在形（アスペクトは完成相）である。この条件文は仮定性格（hypothetical character）が強くて、条件の結果の予測よりも推測を表しているのである。

次の文を比べてみよう：

(25) Ako[接続詞] dobijem[現在形]/budem dobio[第二未来形] premiju, kupiću[未来形] auto.

宝くじに当たれば、車を買う。

(28) Kad[接続詞] bih dobio[接続法]/Da[接続詞] dobijem[現在形] premiju, kupio bih[接続法] auto.

時　　当たる /もし　当たる　宝くじ　　買う　車

もし、宝くじに当たれば、車を買うけど。

二つの文の違いは次のように説明できる：

文(25) を言った人は本当に宝くじを買って (actuality)、当たるチャンスがあると思っている人。 文(28)を言った人は、宝くじに当たるチャンスが非常に少ないと考えている人、あるいは宝くじを買ってもいないで(non-actuality)，当たった状況を想像しているだけの人である。

非現実的(非レアルな)条件とは、実際に起こらなかった、また、起こることのない非現実的な事柄の仮定を表す条件のことである。この条件のマーカーは接続詞 da ＋動詞の現在形か過去形＋主節の接続法である。

二つ目の基準である条件節のテンスによって、「未来の条件」、「現在の条件」と「過去の条件」が区別される。

レアルな条件文には、未来と現在の条件が見られる。

現実の未来についての予定が条件となる場合には従属節の述語に未来形が用いられる。レアルな未来の条件の例としては次の文が挙げられる：

(36) Ako[接続詞] se potrudite[現在形], uspećete[未来形].

努力すれば、できるようになる。

(37) Ja ću ići[未来形] sam ako[接続詞] niko neće doći[未来形].

もし誰も来ないのなら、私一人で行きます。

(38) Ako[接続詞] već nećeš da radiš[現在形], nemoj[命令形] bar drugima da smetaš.

君はもう仕事をしないのなら、せめて他の人の邪魔をしないでよ。

レアルな現在の条件文の条件節は現実に起きた、あるいは起こりうる事象を表す。レアルな現在の例としては次の文が挙げられる：

(27) Ako[接続詞] je[現在形] Marko u školi, preneću[未来形] mu poruku.
マルコが学校に来ていれば、メッセージを伝えておきます。

(39) Ako[接続詞] sam izabrao[過去形] pogrešnu metodu, molim vas[現在形] da mi oprostite.
もしも私が間違った方法を取ったのなら、どうかお許しください。

(40) Ako[接続詞] je[現在形] namerna rečenica običnog redosleda, zarez se ne stavlja[現在形].
もし目的文が通常の語順なら「、」は置かれません。

ポテンシャルな条件文 には、未来の条件のみが見られる。 条件節には現在形、とくに完成相現在形、または接続法が良く用いられる。

(9) Da[接続詞] dobijem[現在形] premiju, kupio bih[接続法] auto.
もし、宝くじに当たれば、車を買うけど。

条件節で述語の現在形に変わり第二未来が用いられることもある。ここで現在形と第二未来形の使用に意味的な違いはない。

(41) Upozorite[命令形] ih ako[接続詞] vas budu ometali[第二未来形] u radu.
彼らがあなたの仕事を妨げることになったら、注意してやってください。

(42) Sve ćemo mu reći[未来形] ukoliko[接続詞] ga bude zanimalo[第二未来形].
もし彼が興味を持ったなら、彼には何もかも話しましょう。

ポテンシャルな条件文には条件節、主節ともに接続法で表されることも良くある：

(43) Ljudi bi ostali[接続法] ovde još dva dana ako[接続詞] bi se vreme poboljšalo[接続法].
天気が回復するようなことがあれば、人々はここにもう二日滞在するだろう。

非レアルな条件文（現実に反する事柄）の条件節は da+現在形、または kad+接続法で表される。「もし仮に…ならば）だろう/だったろう」の主節は接続法で表される。非レアルな条件文には、現在と過去の条件が見られる。

非レアルな現在の条件の例としては、次の文が挙げられる：

(44) Da[接続詞] imam[現在形] auto, mogao bih[接続法] odmah da dođem.
もし僕に車があれば、すぐに行けるのに。

(45) Da[接続詞] imam[現在形] kuću u centru grada bilo bi[接続法] jako dobro.
仮に町の中心に家を持っていたら、そりゃあいいだろう。

(46) Kad[接続詞] bi njegovi deda i baka bili živi[接続法], jako bi se obradovali[接続法].
彼の祖父母が生きていたら、どんなにか喜んだことだろう。

非レアルな過去の条件文の例を見てみよう：

(47) Da[接続詞] sam dobio[過去形] na lutriji, kupio bih[接続法] auto.
宝くじに当たっていれば、車を買ったのに。

(48) Da[接続詞] sam znao[過去形] da je ulica bila blokirana, ne bih pošao[接続法].
通りが閉鎖されていたことを知っていたなら、私は出かけなかっただろう。

セルビア語の最も重要な条件の種類は次の表 4. で表すことができる：

表 4. セルビア語の最も重要な条件の種類

条件の種類	複合文の構造		例
	条件節	主節	
レアルな未来の条件	—接続詞 ako, ukoliko＋現在形/未来形 II	未来形	Ako[接続詞] budem imao[第二未来形] više slobodnog vremena, baviću se[未来形] odbojkom.

			これからもっと自由な時間があれば、バレーボールを始めたいと思います。
レアルな現在の条件	—接続詞 ako, ukoliko＋現在形/未来形 II	現在形	Ako 接続詞 je 現在形 Marko u školi, preneću 未来形 mu poruku. マルコが学校に来ていれば、メッセージを伝えておきます。
ポテンシャルな（未来の）条件	—接続詞 kad＋接続法 —接続詞 da＋現在形（動詞のアスペクトは完成相）	接続法	Kad 接続詞 biste se potrudili 接続法 /Da 接続詞 se potrudite 現在形, uspeli biste 接続法. 努力すれば、できるようになるでしょう。
非レアルな現在の条件	—接続詞 kad＋接続法 —接続詞 da＋現在形（動詞のアスペクトは継続相）	接続法	Kad 接続詞 bih imao 接続法 više slobodnog vremena/Da 接続詞 imam 現在形 više slobodnog vremena, bavio bih se 接続法 sportom. もっと自由な時間があれば、スポーツをやりたいんだけど。
非レアルな過去の条件	—接続詞 da＋過去形	接続法	Da 接続詞 ste se potrudili 過去形, uspeli biste 接続法. もっと努力をしていれば、できたのに。

Stanojčić, Popović, Micić （1989: 309）

2.4　日本語の仮定条件における「と・たら・なら・ば」の使用に関する新たなパラメータ

以上のことから、Comrie（1986）が定めたパラメータ、そして、セルビア語の条件の種類を見分けるために最も重要なパラメータである仮定の度合い、基準時、条件のマーカーは、日本語では必ずしも文法化されているわけではないことが判明した。このことを理由に、日本語の条件形の使用を分析する際に、三つの新しいパラメータを付け加えたいと思う。それは、（1）従属節のモダリティ、（2）条件形の使用によく制限を与える条件構文の主節のモダリティと（3）従属節と主節の事柄的な関係である。このパラメータに基づいて日本語の条件構文を総括的に考察しながら、「と・たら・なら・ば」の意味と用法を分析していきたいと思う。

2.4.1　条件構文の従属節のモダリティ

奥田靖雄（1986：5）は、「あわせ文のなかに、その構成要素として、はいりこんでくる《ひとえ文》は、もはや、厳密な意味では、ひとえ文ではない。ひとえ文はそれ自身で文としての完結性をもっているが、あわせ文のなかの<<ひとえ文>>はそれをもたない。したがって、あわせ文の部分としてのひとえ文である。文＝部分である。この文＝部分には、ひとえ文にはみられない、あらたな特徴がそなわっている。そして、それは、なによりもまず、通達的な単位としての独立性をうしなっている、ということのうちにあらわれてくる。「すれば」とか「するなら」とかいうかたちを述語にする≪つきそい文≫」は、あとに≪いいおわり文≫がつづくという前提のもとになりたっているのだが、そのことは≪ひとえ文≫にはみられない、あたらしいモーダルな意味が≪つきそい文≫にそなわっているからである。（中略）modus(モーダルな意味)は、はなし手がとりむすんだ、文の対象的な内容と現実とのかかわり方であって、はなし手の、現実に対する積極的な態度がそこに表現されている。モーダルな意味modusはすべての文にとって欠かすことのできない、いちばんたいせつな文の文法的な特徴である。文の存在を決定づけていて、文の陳述的な構造のなかで土台をつとめている。文の対象的な内容としての出来事は、モーダルな意味のなかにつつまれて、存在していて、そのそとには存在することができないからである。」と文のモダリティの役割についてこう述べている。

ここでは、高橋ほか（2005）の先行研究に基づいて、条件構文の従属節のモーダルな性格について考察することにする。また、それと同時に、各条件形の用法においての特徴と傾向も調べてみることにする。

仮定的な条件は、まだ現実に成立しておらず、成立するかどうかも明らかでない事柄を表すため、これに属する文は、複雑なモーダルな性格を持っている。つまり、話し手が従属節の内容を仮定として差し出す場合、その条件の成立に対して取りたい行動や、期待や意志などを差し出して、自分の態度を示している。従属節のこうした性格から次の四つのタイプに分けることができる。

(1) 話者の決意が表されている場合

話者が取りたい行動や、意志性、つまり決意 が見られる事柄が条件として差し出されている場合である。したがって、従属節の述語は意志動作である。

(2) 話者の願望が表されている場合

話者が条件の成立すること、あるいはしないことを望んで、それを条件として差し出している場合である。したがって、可能動詞、「~してくれる」が従属節の述語として用いられる。

(3) 話者か主体の聞き手に対する働きかけが表されている場合

これに属する文は、話者の願い事が成立するために必要な行動を取るように聞き手に求めている。

(4) 話者の条件の成立可能性に対する判断が表されている場合

これに属する文は、条件が成立する可能性についての判断、話者なりに予測した上でそれを条件として差し出している場合である。

2.4.2. 条件構文の主節のモダリティ

伝統的な文法論では、文を平叙文（declarative）、命令文（imperative）と疑問文（interrogative）に分けている。

奥田（1985）は、文を述べ立てる文とたずねる文に分けていて、述べ立てる文をさらに物語文、待ち望み文、誘い掛け文に分けている。物語文は言い切りの文と推し量りの文に分類している。

本研究では、文を

(1) 平叙文

(2) 判断文

(3) 決意文

(4) 依頼文

(5) 命令文

(6) 願望文

(7) 誘い掛け文

(8) 問いかけ文

(9) 疑念文

に整理した。

このように分けた基準は二つあった。第一に、形態論的に考えて分類した。第二に、条件構文を考察するにあたって各条件形と主節のモダリティおよび各条件形と従属節と主節の事柄的な関係との呼応関係を調べるのに有効に働く面を考えて分類したのである。

平叙文は、ある経験や知識に基づく推測などが述べられている文のことである。

〔形式〕「~する」/「~だ」、など。

判断文は、述べられている事柄に話者の判断（確信、推量など）が表されている文のことである。

〔形式〕「~はずである」/「~だろう」/「~かもしれない」/「~に違いない」、など。

決意文は話者の意志が表されている文のことである。

〔形式〕「~する」/「~しよう」/「~するつもりだ」、など。

依頼文は、話者が相手にあることを依頼する文のことである。

〔形式〕「~してください」/「~してくれ」/「~していただけませんか」/「~して」、など。

命令文は、話者が相手にあることをするように命令する文のことである。

〔形式〕「~しろ」/「~しなさい」/「~したまえ」、など。

願望文は、話者の願望が表されている文のことである。

〔形式〕「~したい」/「~してほしい」、など。

誘い掛け文は話者が相手にあることを誘いかける文のことである。

〔形式〕「~しよう」/「~しませんか」、など。

問いかけ文は、話者が疑問に思っていることを相手に問いかける文のことである。

〔形式〕「~か？」/「~する？」/「~どうする？」/「~でしょうか？」、など。

疑念文は、話者が疑問に思っていることを独り言で述べている文のことである。
〔形式〕「~するのではないか」/「~しなかったのか」/「~しないだろうか」/「~どうだろうか」/「~どうするだろう」、など。

2.4.3 従属節と主節の事柄的な関係

日本語の条件構文の中の各条件形の使用にあたって、従属節と主節の事柄的な関係が重要であるため、その関係を考察してきた。次の6種類を分けることができた。

(1) 従属節の条件の実現が主節の事柄の前提になる場合
(2) 従属節の条件が主節の事柄の原因・理由になる場合
(3) 従属節か主節の事柄の実現の方法が表されている場合
(4) 主節で従属節の条件の実現に関する評価が表されている場合
(5) 主節で従属節の条件に関する結論が表されている場合
(6) 主節で従属節の条件が実現した場合の反応が表されている場合である。

2.5 まとめ

以上セルビア語と日本語の条件構文においてどのようなパラメータが働いているかを考察してきた。Comrie (1986)が定めたパラメータを両言語に応用してみると、セルビア語と日本語の場合このパラメータの文法化の度合いが違っていることが分かった。最も重要な違いは、仮定の度合いのパラメータにある。セルビア語話者の日本語学習者の「条件」という概念の認識にとってこの最も重要なパラメータを基準にすれば、日本語の場合、「条件」として取り扱うことができるのは、仮定的な事柄のみである（反現実の仮定的な事柄を含む）。
日本語の仮定条件におけるパラメータとして従属節のモダリティ、主節のモダリティ及び従属節と主節の事柄的な関係を提案した。このパラメターによる仮定条件の分析は第4章で行うことにする。

第3章
「と・たら・なら・ば」の非条件的な意味と用法
—セルビア語の時間文と原因・理由文との対照を通じて

3.1 はじめに

日本語の条件表現「と・たら・なら・ば」の間には、微妙な意味の違いが存在しているだけではなく、それぞれの条件形の使用規則が明確でないため、セルビア語を母語とする日本語学習者にとって非常に難しい項目の一つとなっている。さらに、セルビア人の日本語習得プロセスを最も妨げる要因として、日本語の条件形には仮定的な用法以外に非仮定的な用法もあることが挙げられる。「と・たら・なら・ば」の非仮定的な意味と用法は、時間文、原因・理由文の意味と用法と交差することが多い。一方、セルビア語の条件文は仮定の事柄しか表せないため、日本語の条件形の非仮定的な意味は条件文としてではなく、時間文あるいは原因・理由文として受け止められている。

本章の目的は、高橋ほか（2005）の条件分類に基づいて、「と・たら・ば」が表す既定の事柄、予定的な事柄と一般的な事柄をセルビア語の時間文、原因・理由文と対照し、その意味と用法を分析することである。「なら」の条件文は、従属節の事態が真であると仮定し、それに基づいて主節において話者の判断・態度を表すという特殊な性格を持っていることから、本章で「と・たら・ば」と別にして扱うことにする。

セルビア語の時間文と原因・理由文は、その中で使われている接続詞と述語の形によって条件文とは明確に違う。さらに、時間の概念、また原因・理由の概念が複数の接続詞とテンスで表され、それぞれの接続詞は、微妙に異なる意味特徴を持っている。セルビア語の時間文と原因・理由文を、日本語の条件形が表す時間的な意味、原因・理由を表す文の意味と対照することによって、日本語のこのような文が、セルビア語の時間文と原因・理由文と同じスケールの意味を表しているのか、あるいはその意味領域はセルビア語とは違うのか、を明らかにする。

3.2　先行研究

3.2.1 日本語の条件の意味分類における非仮定的な事柄

日本語の条件形「と・たら・ば」の意味や用法に関する研究には様々なものがあるが、その中でも、「と・たら・ば」の意味分類については多く論じられてきている（前田（1991）、益岡（1993）、高橋ほか（2005）など）。日本語の条件形は、仮定の事柄だけではなく、すでに成立した事柄も条件としてさしだすことができる。1.1.2. ですでに説明したように、高橋ほか（2005）の条件表現の意味分類には、次のタイプがある。

- 仮定的な条件（成立するかどうかまだ分からないのだが、成立するかもしれないし、成立しないかもしれない条件）をさしだすもの
- 予定的な条件（一定時間後に成立が予定されている条件）をさしだすもの
- 反現実の仮定的な条件（現実にはないのに、仮に、あることとしてさしだす条件）をさしだすもの
- 既定の条件（すでに現実に成立した条件）をさしだすもの
- 一般的な条件（特定の時間位置に限定されず、習慣的な繰り返し、あるいは一般的な可能性として成立する条件）をさしだすもの

しかし、これらの条件の種類のうち、「既定条件・予定的な条件・一般的な条件」は、条件の意味よりも、非仮定的な意味—時間及び原因・理由など—に近い意味を持っていると言える。セルビア語と比較してみても、条件文ではなく、時間文及び原因・理由文に対応している。

1.1.3. で述べたように、条件文の時間文及び原因・理由文との関わりについての研究がたくさんある。

先行研究では、「既定・予定・一般的な事柄」は、条件よりも時間及び原因・理由に近い特徴を持つことが認められている。しかし、その事柄の中の各条件形がどのような時間関係の種類を表すことができるか、またどのような場合に原因・理由関係を表すかについての研究はそれほど多くはない。

以下では、高橋ほか（2005）の条件の意味分類を参考にしながら、「と・たら・ば」が表す時間および原因・理由関係をセルビア語の時間文、原因・理由文と対照し、その対応関係、共通点と異なる点について考察する。

3.3 セルビア語の時間文及び原因・理由文

3.3.1 時間文

セルビア語の時間文はある事態が実現した時間，あるいは期間（Time measurement） を表すために使われる複文である。セルビア語の時間文の特徴は、時間的接続詞 kad, dok, pošto, nakon što, čim, samo što, tek što, pre nego/no što, otkad, otkako を用いることである。

セルビア語の時間文は、基本的に二つの意味を持っている。（1）狭い意味（本当の意味）の時間文。主節で行われている動作が現実した時間を表す（「いつ？」への答え）；（2）Time measurement （時間量）の意味の時間文。主節で行われている事態が続く期間の意味を表す）。

主節の事態と時間節の事態の実現の時間的関係には、三つの種類が見られる。（1）Anterior 関係、すなわち、主節の事態は、時間節の事態の実現の前に行われている。（2）Posterior 関係、すなわち、主節の事態が時間節の事態の実現の後、あるいは、実現し始めた後に行われる。（3）Simultaneous 関係（同時性）。

セルビア語の時間文の体系を、表 5. に示す。

表 5. セルビア語の時間文の体系

主節と時間節の関係のタイプ	時間文の意味	
	狭い意味での時間文	Time measurement の意味での時間文
Anterior 関係	接続詞 pre nego/no što （～る前に），kad（～時），dok（～るまで）	接続詞 otkad （～てから），otkako （～てから）
Posterior 関係	接続詞 kad（～時），pošto （～てから），nakon što（～た後），čim（～てすぐ），samo što （～てすぐ），tek što（～たばかりの	接続詞 dok （～まで）、（～ながら），sve dok （～までずっと），dok god （～までずっと）

	ときに)	
Simultaneous 関係	接続詞 kad （～時），dok（～まで）[4]	接続詞 dok （～ながら），sve dok（～ながらずっと），dok god （～ながらずっと）

セルビア語の狭い意味での時間文の一般的な接続詞は、kad で、ほかの接続詞は、特別な意味を持っている。たとえば、狭い意味の Posterior 関係の接続詞 čim は、「～てからすぐ」という意味を持っており、pošto, nakon što（～てから）よりも意味領域が狭い。Čim は、いわゆる Immediate 関係を表している。Samo što（～てすぐ），tek što（～たばかりのときに）は、時間節の動作の実現が始まってまもなく主節の動作が始まったことを意味している。

Time measurement の Simultaneous 関係と Posterior 関係における sve dok, dok god（～ながらずっと）は、dok（～ながら）の強調された形式で、主節と時間節の動作がずっと同時に行われている（Simultaneous）、あるいは、主節の動作が時間節の動作の実現まで続いていることを意味している（Posterior）。Anterior 関係の接続詞 otkad, otkako（～てから）は、主節の動作の実現の始まりを指す 、あるいは、従属節の動作が実現する期間の始まりを表している。

セルビア語の時間的な意味にもう一つの文の種類を加えたいと思う。それは、従来 all-time 条件として扱われてきた事柄である（例：春が来ると、花が咲く）。この用法では、一定の時間に限定せずに、主節の事柄と従属節の事柄がいつも一緒に行われる、仮定性のない事柄が表される。この用法の特徴は、条件文で使われている接続詞 ako, ukoliko（もし～ば），または時間文の接続詞 kad と動詞の現在形が用いられることである。このような関係を時間的 General 関係と呼ぶことにする。

---

[4] 接続詞 dok は、狭い意味の時間文でも、Time Measurement 文でも使用できる。たとえば、

a) Dok[接続詞] smo stigli[過去形] u bioskop, film je već bio počeo[過去完了].
映画館に着いた時に、映画はもう始まっていた。（Anterior 関係）

b) Sačekajmo[命令形] dok[接続詞] ne dođe[現在形、否定] Taro. （Time Measurement,「～まで」の意味）
太郎が来るまで待ちましょう。

c) Radio sam[過去形] gimnastiku dok[接続詞] sam slušao[過去形] muziku. （Time Measurement,「～ながら」の意味）
音楽を聴きながら体操をした。

3.3.2 原因・理由文

この文は、主節で行われている動作の原因・理由を表す複文である。原因・理由文の特徴は、接続詞 jer 、zato što, stoga što、što、pošto, kako, budući da が用いられることである。これらの接続詞は、日本語の「から、ので」の意味を表している。

3.4 研究方法

本章では、日本語の「と・たら・ば」そして「なら」が表す非仮定的な意味（時間と原因・理由）と用法に焦点を当て、日本語とセルビア語の対照の観点から従属節と主節の関係の種類及び両言語における対照項目の対応関係を探る。

研究方法について、日本語の文学作品から既定の事柄、予定的な事柄と一般的な事柄の「と・たら・ば」の例を取り、日本語とセルビア語の対訳からその対応関係を分析した。「なら」については、3.6. で分析を行う。

3.5 分析

収集した 1702 の「と・たら・ば」の用例の内、1236 例は既定の事柄、104 例は予定的な事柄と 362 例は一般的な事柄を表していた。

3.5.1 既定の事柄

ここではまず日本語の「と・たら・ば」が表す、すでに現実に成立した（つまり既定性のある）事柄の意味を分析してみよう。

3.5.1.1 時間的な意味

既定の事柄の「と・たら・ば」には、どのような時間的な意味が見られるかを見ていこう。

3.5.1.1.1 Anterior 関係

「と」

(49)会社に<u>帰ると、</u>工場長が数人の工員たちと食堂で麦茶を飲んでいた。（黒い雨）

Kad[接続詞] sam se vratio[過去形] u firmu, direktor je sa nekoliko radnika pio[過去形] čaj u trpezariji.

(50)目をさまして、<u>あまどを開けると</u>、雪が積もっていた。（日本語の文法）

Kad[接続詞] sam se probudio[過去形] i otvorio[過去形] prozor, bio je napadao[過去完了] sneg.

(51) 手をあてて見ると少し水気が来たようにむくんでいる。（鼻）

Kada[接続詞] je prislonio[過去形] ruku, (on je primetio[過去形] da) je[現在形] malo vlažan i otekao.

(52) その若葉の色をよくよく眺めると、一々違っていた。（こころ）

Kada[接続詞] posmatram[現在形] pažljivo to mlado lišće, svaki je[現在形] list različit.

(53) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。（雪国）

Kad[接続詞] smo prošli[過去形] dug tunel na granici, tu je bila[過去形] Snežna zemlja.

(54) 吊橋を渡ると、道は少しの間川に沿って走っていた。（あすなろ物語）

Kad[接続詞] sam prošao[過去形] most, (video sam[過去形] da) ide put pored reke.

以上の文は、既定の事柄で、日本語の文法では、発見の場面を設定しているものとして扱われている。しかし、これらの文をセルビア語の時間文および原因・理由文と対照してみると、それぞれの文の間に、微妙な意味違いとそれに対応するいくつかの文のパターンが見られる。発見の場面が表されていても、それは、広い意味での「発見」で、次のようにより狭い意味に分類することを提案したい。

(1) 話者が場所の移動によって知ることができた、すでに実現した動作や状態を描写する事柄

話者が移転して、新しい場所で、ある動作や状態が実現したことを知る。これらの文の特徴は、従属節で動く動作を表す動詞 が用いられることと主節で話者が新しい場所で目にした動作あるいは状態が表されていることである。状態は、自然の状態、人間の状態などを含む。これらの文の主節の特徴は、多くの場合現在形か過去形の継続相が使われることである。

(2) 狭い意味での発見

これらの文の特徴は、話者が自分の行為の結果として発見した新しい事実や場面が主節で表されることである。

(3) 確認

これらの文の場合は、主節で時間的あるいは空間的な情報が確認され、またはある事実や現象が確認される。多くの用例の場合は、話者はその事実が確認できることを予想していた。

(4) 認識

これらの文の特徴は、従属節で「気がつく」、「考える」などのような動詞が用いられ、主節には事態の新しい展開、話者の気づいたことや結論が表される。

(1) 話者が場所の移動によって知ることができた、すでに実現した動作や状態を描写する事柄

「と」

(49) 会社に帰ると、工場長が数人の工員たちと食堂で麦茶を飲んでいた。(黒い雨)

Kad 接続詞 sam se vratio 過去形 u firmu, direktor je sa nekoliko radnika pio 過去形 čaj u trpezariji.

(55) 店に入ると すでに高根圭一が来ており、隣りにブロンディがいた。(新橋烏森口青春篇)

Kad 接続詞 sam ušao 過去形 u radnju, tu je već bio 過去形 Keichi Takane, i pored njega je bila Blondy.

(56) グレイハウンドバスのロスアンジェルス発着所へ行ってみると、数台の超新型、超大型バスが一斉にエンジンをふかしながら出発を待っていた。(若き数学者のアメリカ)

Kad 接続詞 sam došao 過去形 na Grayhound autobusku stanicu u Los Anđelesu, vec su čekali 過去形 da krenu najnoviji ogromni autobusi, zagrevajući motore.

(57) ジョバンニは玄関を上って行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被って寝んでいたのでした。(銀河鉄道の夜)

Kad 接続詞 je Đovani ušao 過去形, njegova majka je spavala 過去形 u sobi pored ulaza s belim platnom na licu.

(58) さすがにがっかりしてカジノを抜け出ると、東の空は既に白みはじめていた。(若き数学者のアメリカ)

Kad 接続詞 sam razočaran izašao 過去形 iz kazina, nebo na istoku je već počelo 過去形 da se beli.

(59) 部落長の家へ報告に行く父と別れ、僕が倉庫の二階へ上って行くと、弟は寝台の上に坐ったまま眠りこんでいるのだった。(飼育)

Rastao sam se s ocem koji je otišao kod predsednika sela da ga izvesti, i kad 過去形 sam se popeo na prvi sprat skladišta, moj brat je spavao 過去形 sedeći na krevetu.

(60) 鮎太は寺へ帰ると、雪枝が彼の部屋で待っていた。(あすなろ物語)

Kad 接続詞 se Ayuta vratio 過去形 kući, Yukie je čekala 過去形 u njegovoj sobi.

(61) 東京へ帰って見ると、松飾はいつか取払われていた。(こころ)

Kad[接続詞] sam se vratio[過去形] u Tokio, novogodišnji ukrasi su već bili uklonjeni[過去形].

(62) 部屋にもどると土曜の午後なので、もう誰ものこっていなかった。(パニック)

Kad[接続詞] sam se vratio[過去形] u sobu, pošto je bila subota po podne, više niko nije bio[過去形] ostao.

「たら」

(63) 「さっきお部屋へ戻ってみたら、もういらっしゃらないんでしょう。」(雪国)

Kad[接続詞] sam se vratila[過去形] u sobu, već nije bio[過去形] tamo, je li tako?

(64) 今裏へ回って見たら、この文庫が落ちていて、中に這入っていた手紙なんぞが無茶苦茶に放り出してあった。(門)

Kada[接続詞] sam otišao[過去形] iza kuće, našao sam[過去形] Bunko-kutiju ispuštenu, tamo-amo bila su izbačena pisma i druge stvari koje su se nalazile u kutiji.

話者が場所の転回によって知ることができた、すでに行われた動作や状態を描写する事柄の意味で使われているのは、「と」と「たら」のみである。「ば」の用例はなかった。このような文のパターンには、セルビア語では条件文の接続詞ではなく、時間文の接続詞 kad が対応する。時間の Anterior 関係を表しているのである。日本語の場合は、主節で現在形か過去形が用いられ、アスペクトは多くの用例の場合、継続相である。

(2) 狭い意味での発見

「と」

(65) そうして隣りを見ると、女がすっぱだかで寝ているんだけれど、(新橋烏森口青春篇)

Kad[接続詞] sam pogledao[過去形] okolo, žena je spavala[過去形] naga.

(66) 腰障子を開けると三造の家内が店先にかけていた。(雪の日)

Kada[接続詞] sam otvorio[過去形] koši-šođi, Sanzova žena je sedela[過去形] u prodavnici.

(67) こちらも水を飲んでやろうと思って近づくと、水を飲んでいるのでなくて、伏せて水に顔を突っ込んだまま死んでいる。(黒い雨)

Kada[接続詞] sam se približio[過去形] da i ja popijem vode, (shvatio sam[過去形]) da on ne pije[現在形] vodu nego leži[現在形] mrtav sa glavom u vodi.

(68) ページをめくると、長ったらしい副題。(ブンとフン)

Kada 接続詞 okreneš 現在形 stranu, tu je 現在形 predug podnaslov.

（69）見ると冴子の枕の横には、カステラの紙包みがきちんと置かれてあった。（あすなろ物語）

Kad 接続詞 sam pogledao 過去形, (video sam 過去形 da su) kolači upakovani u papir stajali su 過去形 pored Saekinog jastuka.

「たら」

（70）そろそろ片目をあけてフトンからのぞいてみたら、この猫がもう一匹、友達をつれてきて、自分の餌の残りを食べさしてやっているのよ。（花終わる闇）

Kad 接続詞 sam polako otvorila 過去形 jedno oko i virnula 過去形 iz kreveta, ova mačka je dovela 過去形 još jednu mačku, svog druga, i pustila je 過去形 da jede ostatak njene hrane.

（71）文章に慣れぬコチコチした文を書いているのかと思ったら、結構まとまったことが書いてある。（二十歳の原点）

Mislila sam 過去形 da se nije navikao na pisanje i da piše kruto, međutim, njegove rečenici su bile 過去形 prilično sređene.

「ば」

（72）見れば下宿の内は何となく騒々しい。（破戒）

Kad 接続詞 sam video 過去形, u domu je bilo 過去形 nekako bučno.

（73）君は無抵抗なのかと思えばそうでもない。（パニック）

Mislio sam 過去形 da ne se odupireš, međutim, ne 現在形 baš.

（74）積極派かと思えばチャッカリ計算もしている。（パニック）

Mislio sam 過去形 da je aktivan tip, medjutim, proračunat je 現在形 dovitljivo.

発見の意味で使用できる形式は「と・たら・ば」であるが、「と」の用例は最も多い。狭い意味での発見もセルビア語の時間的な Anterior　関係に対応し、接続詞 kad が使用される。ただし、この場合の「ば」には、特殊な使い方があって、よく「~かと思えば、話者の予想外の結論がでる」という文のパターンになっている。このような文は、セルビア語の重文に対応し、食い違う二つのことを並べて言う時の接続詞 ali[5]が使用される。

---

[5]セルビア語の重文には、次の主なタイプがある：同じように成り立つ二つのことを並

(3) 確認

「と」

（75）そこで俳助、風呂敷をあらためてみると、たしかに背負って出たはずの一万円札が一枚もない。（ブンとフン）

Zatim、kad 接続詞 je Haisuke proverio 過去形 sadržinu furošikija, (video je 過去形) da nema 現在形 nijedna novčanica od 10,000 jena koje je sigurno izneo na leđima iz banke.

（76）半町ばかり行って復た振返って見ると、未だ友達は同じところに佇立んでいるらしい。（破戒）

Išao sam pedesetak metara. Kad 接続詞 sam se osvrnuo 過去形, izgledalo je da moj drug još stoji 現在形 na istom mestu.

（77）ふと気がつくと午前三時、というような時間になっていた。（新橋烏森口青春篇）

Kad 接続詞 sam primetio 過去形, već je bilo 過去形 tri sata ujutro.

（78）安田は女房孝行一途の亭主かもしれない。じっさい、調査すると、夫婦仲は円満らしいからね。（点と線）

Možda je Jasuda muž koji je uvek ljubazan prema svoji ženi. Stvarno, kada 接続詞 smo istraživali, (nasli smo 過去形 da) odnos između njega i žene je 現在形 dobar.

（79）運転席の計器盤を見ると、時速は七五マイル（約一二〇キロ）を示している。（若き数学者のアメリカ）

Kada 接続詞 sam pogledao 過去形 brzinomer ispred vozača, brzina je bila 過去形 75 milja (oko 120 km) na sat.

（80）さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、何時になく短くなっている。（鼻）

Kad 接続詞 je izvadio 過去形 nos koji je po drugi put skuvao, on je, naravno, postao 過去形 kraći.

（81）目を覚ますと、五時だった。（風に吹かれて）

Kad 接続詞 sam se probudio 過去形, bilo je 過去形 pet sati.

（82）勘定して見ると、先生が毎月例として墓参に行く日が、それから丁度三日目に当っていた。（こころ）

べる場合（接続詞 i, ni, niti, pa, te）, alternative を並べる場合（接続詞 ili）, 食い違う二つのことを並べる場合（接続詞 a, ali, no, nego, već, pa ipak）.

Kad 接続詞 sam izračunao 過去形, dan na koji Učitelj svakog meseca ide na groblje, bio je 過去形 tačno za tri dana od tada.

（83）時刻表を調べると、まさに上野発急行<<十和田>>が浅虫駅を発車したばかりなのだ。（点と線）

Kad 接続詞 sam proverio 過去形 vozni red, (primetio sam 過去形 da) Ekspres "Towada"koji kreće sa Uena, tek je krenuo 過去形 sa stanice Asamushi.

「たら」

（84）まだ目分量だけど、高さをはかったら二階の便所の窓にうまく届きそうだった。（新橋烏森口青春篇）

Kad 接続詞 sam izmerio 過去形, činilo mi se 過去形 da može da stigne do prozora u kupatilu na prvom spratu.

（85）もう一冊、買い入れようと思いましたら、本屋さんでも売切れなんですって。（ブンとフン）

Htela sam da kupim još jednu (knjigu), a već je bilo rasprodato 過去形 u knjižarama.

（86）なめてみたら鉄分の味がした。（二十歳の原点）

Kad 接続詞 sam liznula 過去形, imalo je 過去形 ukus gvožđa.

確認の意味においては「と・たら」の二つの形式が使用できる。このような事柄は、セルビア語の時間的 Anterior 関係を表し、接続詞 kad が対応する。

(4) 認識

「と」

（87）私の目にはやや異様に映ったが、少し考えるとそれは当り前のことだった。（若き数学者のアメリカ）

Meni je to izgledalo pomalo čudno, ali kada 接続詞 sam malo razmislio 過去形, to je bilo 過去形 normalno.

（88）考えてみると、私の大きくなる頃が、ちょうどうちの苦しいときだったらしいわ。（雪国）

'Kada 接続詞 razmislim 現在形, doba dok sam rasla je verovatno bilo 過去形 najteže kod nas u kući. '

(89)「後で考えると、本当は危なかったですよ。・・・」(焚火)

'Kada 接続詞 razmišljam 現在形 o tome posle, bilo je 過去形 opasno....'

(90) しかし、あとになって考えてみると、このとき課長にわたされた一枚のボロ布ははなはだ象徴的な役目をになっていた。(パニック)

Međutim, primetio sam 過去形 kasnije da je to jedno staro platno, koje mi je dao šef, bilo 過去形 baš simbolično.

(91) 今思うと、ムチャクチャだよな。(満月)

Kada 接続詞 pomislim 現在形 sada, bilo je 過去形 preterano.

(92) 今考えるとその時の自分が可笑しい。(花埋み)

Kad 接続詞 sad razmislim 現在形, tada sam bio 過去形 čudan.

(93) 今考えるとあれは一種の強制的アルコール中毒化が行なわれたのではないか、と思うのだが。(新橋烏森口青春篇)

Kad 接続詞 sada razmislim 現在形, pomišljam 現在形 da se desila 過去形 jedna vrsta nasilnog trovanja alkoholom.

「たら」

(94) 考えてみたらあの頃というのはじつに本当にいい時代だったんじゃないだろうか——と思うのだ。(新橋烏森口青春篇)

Kad 接続詞 razmislim 現在形, to doba je u stvari bilo 過去形 zaista lepo vreme.

「ば」

(95) 駒子に言われてみれば、十分に心疚しいものがあった。(雪国)

Kada 接続詞 mu je Komako rekla 過去形, osetio se 過去形 dovoljno krivim.

(96) この虚偽の痲痺には、破廉恥な危険が匂っていて、島村はじっとそれを味わいながら、按摩が帰ってからも寝転んでいると、胸の底まで冷えるように思われたが、気がつけば窓を明け放したままなのであった。(雪国)

Ova lažna paraliza ima besramnu opasnost u sebi. Posle je otišao maser, a Shimamura je nastavio da leži uživajući u toj opasnosti. Osetio je kao da mu je hladno do dna duše, i kada 接続詞 je primetio 過去形, ostavio je 過去形 prozor otvoren.

(97) 今にして思い返せば、その時には彼は死を決していたのだ。(こころ)

Kad 接続詞 sad razmišljam 現在形, on se tada već bio odlučio 過去形 na smrt.

このような文では「と・たら・ば」も使われていた。これらの文の特徴は、「気がつく、考える、思う」などの動詞の使用である。セルビア語の時間文の接続詞 kad が対応し、Anterior 関係を表している。

上のような広い意味での発見を表す文の四つの種類は、セルビア語に訳すとき、次のような文の構造になる：

表 6. 広い意味での発見を表す Anterior 関係の既定の事柄・セルビア語の時間文の構造と対応関係

従属節		主節
時間節の接続詞 kad+動詞の過去形か現在形、または重文の二つの違う事柄を結ぶ接続詞 ali	「分かる」、「見る」、「発見する」のような日本語の用例には使われていない動詞がセルビア語訳に必要になってくる。	動詞の現在形か過去形（継続相か完成相）

セルビア語訳では、従属節と主節のつながりのようなものが必要になってくる。日本語の場合は、主節のテンスのバックシフト（時制後退）が起こらないで、従属節は、主語が発見した（見ている）場面を現在行われている事態として導入しているからである。セルビア語訳の場合は、「分かる」、「見る」というような動詞がつながりの役をするか、主節のテンスのバックシフトが必要である。

以上述べたような文はすべて、すでに既定した事柄である。「会社に帰る」という動作の後に、「工場長が数人の工員たちと食堂で麦茶を飲んでいる（のを見た）」というの場面が続いているが、従属節と主節を結んでいるのは、条件の意味ではなく、二つの節で行われている動作の実現の時間だと思われる。それと同じように、「腰障子を開けると」は、「三造の家内が店先にかけていた」で記述されている主節の事柄を

起こす条件ではない。「三造の家内が店先にかけている（のを見た）」という発見を可能にした動作である。しかし、「見る、分かる」のような発見を表す動詞が使われているわけではなく、主節は条件節とは意味的に独立したあり方を表している。つまり、従属節と主節の事柄の関係は両節の動作の実現の時間である。したがって、この場合のいろいろな意味の発見を表す「と・たら・ば」の従属節は、条件ではなく、時間的意味を表していることが明らかになった。

以上の用例から分かるように、「ば」も既定の事柄をさしだしながら、時間的な意味を表すことができる。このような文の場合は、「考える」、「調べる」、「思う」などのような動詞が最も使われるのが特徴的である。このような文のパターンは、従属節の動作が実現した時に、すでに存在している主節の事態が分かるようになるということである。主節の動作の実現が、従属節の動作の実現の以前になる時間的関係を示している。

このような従属節と主節の関係はセルビア語の時間的 Anterior 関係に対応している。これらの文をセルビア語に訳す場合、接続詞 kad が使用されるが、主節と従属節の間を結ぶ役割をする「見る・分かる」などの動詞の過去形も必要になる場合がある。セルビア語のすべての Anterior 接続詞が使用できるかどうかのテストを行った結果、pre nego/no što（～る前）という接続詞が対応しないことが判明した。さらに、セルビア語の主節の動作が続いている期間を表す Time measurement の接続詞も、既定の Anterior 事柄には対応しないことが明らかになった。

セルビア語の Anterior 関係を表す時間文は、主節の動作が従属節の動作の前に実現することを表すのだが、なぜ日本語の場合は、同じような時間的 Anterior 関係が条件形で文法化されるのだろうか。

以上述べたような事柄においての「と・たら・ば」は、ほとんど時間節の「した時」で置き換えられる。

（49a）会社に帰った時に、工場長が数人の工員たちと食堂で麦茶を飲んでいた。

（64a）今裏へ回って見た時に、この文庫が落ちていて、中に這入っていた手紙なんぞが無茶苦茶に放り出してあった。（門）

この場合の「と」と「時」の意味のニュアンスは違う。「と」節では、主語が発見した新しい場面の展開の意味が強調されているのに対して、「時」節では、ただ、従属節の動作が実現した一定の時に、主節の事態が存在していたということを示しているのである。

以上のことをまとめてみると、時間的な Anterior 関係は、「と」と「たら」が主に表す。「ば」も Anterior 関係が表せるが、それは主として「思う」、「考える」のような動詞が使われるときである。

表 7. Anterior 関係の既定の事柄における「と・たら・ば」の使用

		と	たら	ば	合計
時間的 Anterior 関係	話者が場所の移動によって知ることができた、すでに実現した動作や状態を描写する事柄	72/ 87.8%	10/ 12.2%		82/ 100%
	狭い意味での発見	72/ 66.7%	30/ 27.7%	6/ 0.6%	108/ 100%
	確認	47/ 68.1%	10/ 14.5%	12/ 17.4%	69/ 100%
	認識	19/ 65.5%	3/ 10.3%	7/ 24.1%	29/ 100%
合計					288

Anterior 関係を表す既定の事柄とセルビア語の時間文の構造と対応関係は、表 8. で表す。

表 8. Anterior 関係の既定の事柄・セルビア語の時間文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	「と・たら・ば」＋動詞の完成相	動詞の現在形か過去形（継続相、たまに完成相）	主節の動作が従属節の動作の前に実現して、話者が発見した、すでに実現した場面、新しく分かった事態、確認した事実や認識したことを表す場合

セルビア語	Anterior 節続詞 kad,dok＋動詞の過去形（完成相）、または、違う事柄を結ぶ重文の接続詞 ali	動詞の過去形（継続相、たまに完成相）	主節の動作が従属節の動作の前に実現する場合（日本語に見られるような発見などの意味合いはない）

3.5.1.1.2 Posterior　関係

「と」

（98）石は何か大きな声で話していたが、私の姿を見ると、急いで土間に隠れてしまった。（流行感冒）

Ishi je pričao nešto glasno, a kad 接続詞 je video 過去形 mene, brzo se sakrio 過去形 .

（99）島村も頬が火照るようで、さっさと通り過ぎると、すぐに駒子が追っかけて来た。（雪国）

Shimamura se zacrveneo i kad 接続詞 je prošao 過去形, odmah za njim je krenula 過去形 Komako.

（100）青年が出て行くと画廊の客は七瀬ひとりになった。（エディプスの恋人）

Kada 接続詞 je mladić otišao 過去形, Nanase je ostao 過去形 jedina mušterija u galeriji.

（101）加藤はその木村をしばらく見おろしていたが、自分もシャツを脱ぐと、木村と同じように畳の上にごろりと横になった。（孤高の人）

Kato je neko vreme gledao odozgo Kimuru, ali je, kada 接続詞 je skinuo 過去形 majicu, legao 過去形 na tatami kao Kimura.

（102）暗くなると大人たちは幾人かずつ、僕に励ましの言葉を投げて帰って行った。（飼育）

Kada 接続詞 se smračilo 過去形, po nekoliko odraslih mi je uputilo 過去形 reči ohrabrenja i otišlo.

（103）ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。（銀河鉄道の夜）

Kad 接続詞 se Đovani poklonio 過去形, otvorio je vrata i došao 過去形 do kasira gde je bio pre.

（104）授業が終ると、加藤は隣席にいた木村敏夫に引摺られるようにして教室を出ていった。（孤高の人）

Kad 接続詞 se završio 過去形 čas, Kato je otišao 過去形 iz učionice tako što ga je povukao Toshio Kimura koji je sedeo pored njega.

（105）とちゅうでバスがとまり、おなご先生をおろすとまた走っていった。（二十四の瞳）

Autobus je usput stao i kada 接続詞 je izašla 過去形 učiteljica Onago, opet je krenuo 過去形.

（106）波の音に耳が馴れてしまうと、薄気味の悪いほどあたりはしんとした。（草の花）

Kada 接続詞 sam se navikao 過去形 na zvuke talasa, u okolini je postalo 過去形 tako tiho da mi je bilo jezivo.

（107）手を振り払うと、急ぎ足に駅の方へ走って行った。（草の花）

Pošto 時間的接続詞 je protresla 過去形 moju ruku, otrčala je 過去形 ka stanici brzim korakom.

（108）父は住職との久々の対面に昂奮して、大そう疲れていたが、金閣ときくと、息を切らしながら私の肩につかまってついて来た。（金閣寺）

Otac se uzbudio kada je video glavnog popa posle dugo vremena, i bio je umoran. Međutim, kad 接続詞 je čuo 過去形 Kinkaku, držao se za moja ramena i išao 過去形 za mnom, jedva dišući.

（109）村人の歌がすむと、今度は私たちが合唱しました。（ビルマの竪琴）

Kad 接続詞 se završila 過去形 pesma seljana, onda smo mi pevali 過去形 u horu.

（110）駅へ着くと、雪枝は待合室に入って行った。（あすなろ物語）

Kad 接続詞 smo stigli 過去形 na stanicu, Yukie je ušla 過去形 u čekaonicu.

（111）私が帰りかけると、彼は私を呼びとめて暫く考えていた。（草の花）

Kada 接続詞 sam krenuo 過去形 da odem, on me je pozvao i malo je razmišljao 過去形.

「たら」

（112）そうして、一ヶ月もたったら、その恋人は戦死してしまはった。（金閣寺）

Zatim, kad 接続詞 je prošlo 過去形 mesec dana, njen ljubavnik je umro 過去形 na ratištu.

（113）今日実は仲田の処に行ったら、門の処で出あったのだ。（友情）

Kad 接続詞 sam danas stvarno otišao 過去形 kod Nakate, sreli smo se 過去形 ispred kapije.

（114）「こないだ津田にあったら君のものに随分感心していた」（友情）

Kad 接続詞 sam se nedavno video 過去形 sa Tsudom, prilično se interesovao 過去形 za tebe.

（115）それから又一年ばかり経ったら、叔父の子の安之助が、大学を卒業して、小六が高等学校の二年生になった。（門）

Onda kad 接続詞 je prošlo 過去形 oko godinu dana, sin mog strica, Yasunosuke je diplomirao 過去形 na fakultetu i Soroku se upisao u drugi razred gimnazije.

（116）その運転手らしき男に、モアナ・ホテルへも立ち寄ることを確かめようと何か言いかけたら、まだ言い終らぬうちに、私のスーツケースをいとも無造作に、ほとんど乱暴とも言えるように車の最後部に放り込んだ。（若き数学者のアメリカ）

Kad 接続詞 sam zaustio 過去形 da kažem nešto tom čoveku koji izgleda kao vozač, da potvrdim da idemo do Moana Hotela, on je bacio 過去形 moj kofer nepažljivo, čak i nasilno, u zadnji deo auta.

（117）　日本へ帰って二年程したら、新着の文芸雑誌にグレイグ氏が死んだという記事がでた。（永日小品）

Kada 接続詞 su prošle 過去形 otprilike dve godine otkako sam se vratio u Japan, u novom književnom časopisu je izašao 過去形 članak da je umro gospodin Grejg.

（118）お前が出掛けて行ったら尚話も何にも無くなって閉口した。（好人物の夫婦）

Kada 接続詞 si otišao 過去形, nismo imali ništa da pričamo i spleli smo se 過去形.

（119）ベッドのうえにはらばいになってここまで書いたら、背骨が痛くなりました。（聖少女）

Kada 接続詞 sam dovde ispisao 過去形 ležeći na stomaku na krevetu, počela je 過去形 da me boli kičma.

Kada 接続詞 sam okrenuo 過去形 glavu nazad i pitao ‘Kako znaš?’, odgovorio je 過去形‘ Tako što kriče čaplje. ‘

（120）私らが、ほうりだしてしまったら、十日もたたずに、すっかり埋まっちまって・・・（砂の女）

Nije prošlo 過去形 ni deset dana otkako 接続詞 smo mi to izbacili, a bio je 過去形 sasvim zakopan.

（121）私がそれは感傷で着てるの？とその時たずねたら、そんなんじゃない、死人は戻らないし、モノはモノだと言った。（ムーンライト・シャドウ）

Tada, kada 接続詞 sam pitala 過去形 ‘Da li to nosiš zbog bolećivosti?’, rekao je 過去形 ‘Ne. Mrtav čovek se neće vratiti, a stvar je stvar.’

時間的な Posterior 関係を表す「たら」文の構造も「と」と同じである。主節の動詞は、過去形の完成相であって、状態を表すときだけは、継続相である。

「ば」

（122）海に面した山に中腹まで耕している耕地をみれば、その勤勉さに感心するよりも悲惨な生活の苦しさがしんと伝わってきました。　（沈黙）

Kad[接続詞] sam video[過去形] zaoranu plodnu zemlju na planini pored mora, živo sam osetio[過去形] težinu njihovog života, pre nego divljenje njihovoj vrednoći.

（123）男は佐知子を見つけて歩み寄っていった。テーブルのそばまで行き、椅子に掛けるかと思えば、そうではなかった。彼は掌の中から紙片のようなものを彼女の前に落として、通りすぎた。（死なれては困る）

Muškarac je našao Sachiko i prišao. Došao je blizu stola i, kad[接続詞] je izgledalo[過去形] kao da će da sedne na stolicu, međutim, nije seo[過去形]. Ispustio je iz ruke nešto kao papirić ispred nje i prošao.

時間的な Posterior 関係を表す「ば」は、主に、「気がつく」、「思う」のような動詞と一緒に使われている。

「一ヶ月もたつ」、「耕地をみる」という従属節の動作は、主節の述語の過去形で示されているように、すでに実現した動作で、仮定的な事柄ではなく、時間を表しているのである。これらの用例の場合、主節の動作は、従属節の動作の後に行われているので、セルビア語の時間的 Posterior 関係に対応している。このような文をセルビア語に訳すときに Posterior 関係の接続詞 čim, pošto, kad などを使用する。なお、これらの事柄の場合も、time measurement の接続詞は対応していない。

ここで例文（99）と（112）を時間表現で言い換えてみよう。

（99a）島村も頬が火照るようで、さっさと通り過ぎたときに、すぐに駒子が追っかけて来た。

（112a）そうして、一ヶ月がたってから、その恋人は戦死してしまはった。

これらの言い換えられた用例と比べると、時間表現を使った文と条件表現を使った文の意味のニュアンスの違いがよく分かる。条件表現を使用して時間を表す場合、従属節と主節の時間的な関係がより緊密になる、つまり Immediate 関係に近づいてくる。

このような文の構造とセルビア語の時間文との対応関係は、次のようになっている。

表 9. Posterior 関係の既定の事柄・セルビア語の時間文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	「と・たら・ば」＋動詞の完成相（たまに継続相）	動詞の過去形（完成相、たまに継続	主節の動作が従属節の動作のすぐ後に行われる、

		相）	あるいは、従属節の動作によって引き起こされた場合
セルビア語	Posterior 接続詞 kad, čim など+動詞の過去形（完成相）	動詞の過去形（完成相、たまに継続相）	主節の動作が従属節の動作の後に行われる場合（直行性などの意味合いはない）

3.5.1.1.3 Simultaneous 関係

以下の例も、条件ではなく時間の意味を表している典型的なものである：

「と」

（124）部屋で本を読んでいると、とつぜんどこかでドカンという大きな音がした。（日本語の文法）

Dok 接続詞 sam u sobi čitao 過去形 knjigu, odjednom se odnekud začuo 過去形 jak tresak.

（125）フン先生が、あっけにとられてきょろきょろあたりをみまわしていると、上の方から声がした。（ブンとフン）

Dok 接続詞 se profesor Fun, začuđen, osvrtao 過去形 okolo nemirno, začuo se 過去形 glas odozgo.

（126）堤防に出る手前のところで小休止をしていると、巡査部長の佐藤進さんに声をかけられた。（黒い雨）

Dok 接続詞 sam se malo odmarao 過去形 na mestu blizu brane, policajac Susumu Sato me je pozvao 過去形.

（127）島村が彼らしく楽しい空想をしていると、「駒ちゃん、駒ちゃん。」と低くても澄み通る、あの葉子の美しい呼び声が聞えた。（雪国）

Dok 接続詞 je Shimamura kao i uvek zaneseno maštao 過去形, začuo se 過去形 nizak ali bistar i lep glas Yoko, kako zove‘Koma, Koma.’

（128）この店で五人揃ってめしを食っていると、とつぜんハットの鎌田が原島久三という古参の社員と一緒にその店にやってきた。（新橋烏森口青春篇）

Dok 接続詞 smo svi petoro jeli 過去形 u ovom restranu, Kamata je iznenada došao 過去形 zajedno sa starijim službenikom Hisazo Harajimom.

「たら」

（129）私は仕事が休みだったのでパンをかじりながらだらだら新聞を読んでたら、雄一が部屋から出てきた。（キッチン）

Pošto nisam išla na posao, polako sam čitala [過去形] novine grizući hleb, kada [接続詞] je Yuichi izašao [過去形] iz sobe.

（130）いろいろ考えていたらすっかり頭が冴えてしまい、もう一度眠り直そうと努力したがどうしても駄目だった。（若き数学者のアメリカ）

Dok [接続詞] sam puno razmišljao [過去形], potpuno sam se rasanio [過去形]. Trudio sam se da opet zaspim, ali nisam mogao.

（131）あの日は、珍しく早く帰って、家にいましたよ。テレビを視てたら、あねから電話で、事件を報されたんです。（死なれては困る）

Tog dana sam se vratila s posla neuobičajeno rano i bila sam kod kuće. Dok [接続詞] sam gledala [過去形] televiziju, sestra mi se javila [過去形] telefonom i obavestila me o tom slučaju.

（132）「くものやつが硝子にいたらね、凄い大きな蝿が飛んできたんだ。そしたらあいつめ、戸のうしろへ逃げてしまいやがった」（結婚の生態）

“Dok [接続詞] je pauk stajao [過去形] na staklu, priletela je [過去形] vrlo velika muva. Onda on je pobegao iza vrata.“

（133）電車に乗っていたら、横に坐ったおっさんが、こう大きく新聞を広げてね、せっかくだから横眼で読ませてもらったんだ、降りるまで。（一瞬の夏）

Dok [接続詞] sam se vozio [過去形] vozom, čiča koji je sedeo do mene je ovako raširio [過去形] novine, pa sam ih krajem oka čitao, sve dok nisam sišao.

以上のような文の中でも、従属節は、主節の事柄を起こす、あるいはその実現を可能にすることはできない。「部屋で本を読んでいると」と「とつぜんどこかでドカンという大きな音がした」と言う事態は、同時に、しかし、意味としては、全く関係なく、独立に行われた事柄である。したがって、従属節と主節との関係はこの場合でも時間的な意味で、従属節の動作が続いている間に主節の動作が行われたというSimultaneous関係である。

「読んでいると」、「視ていたら」は、「読んでいる時に」、「視ている時に」で置き換えても意味は変わらないが、「と・たら」は、従属節の動作を中断させた主節の事柄への話者の驚き、意外性の意味を内在させている。

このような文は、セルビア語へ時間的な Simultaneous 関係を表す接続詞 kad, dok で訳されている。Time measurement の接続詞はこの場合も対応していない。

これらの文の特徴は、従属節の述語の継続相と主節の述語の完成相の組み合わせである。

表 10. Simultaneous 関係の既定の事柄・セルビア語の時間文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	「と・たら」＋動詞の継続相	動詞の過去形（完成相）	主節と従属節の動作が同時に行われるが、従属節の動作を中断させた主節の事柄への話者の驚き、意外性の意味を内在させる場合
セルビア語	Simultaneous 接続詞 kad, dok+動詞の過去形（継続相）	動詞の過去形（完成相）	主節の動作と従属節の動作が同時に行われる場合（意外性などの　意味合いはない）

「ば」には、Simultaneous 関係の用例はない。

3.5.1.2 原因・理由の意味

「と」

（134）　役人が背後から突き飛ばすと恩人たちは浜の上に倒れた。（沈黙）

Kada/pošto [接続詞] je činovnik gurnuo [過去形] dobrotvore, oni su pali [過去形] na plažu.

（135）鮎太は冴子がいなくなると、勉強するのに気が抜けた気持だった。（あすなろ物語）

Kada/pošto [接続詞] je otišla [過去形] Saeko, Ayuta se osetio [過去形] kao da je izgubio želju da uči.

（136）　然し友達の仲田に勧められると、ふと行く気になった。（友情）

Ali, kada/pošto [接続詞] mi je preporučio [過去形] prijatelj Nakata, odmah sam poželeo [過去形] da idem.

（137）内藤は、私が答えに窮しているのを察すると、助け船を出してくれた。（一瞬の夏）

Kada/pošto [接続詞] je Naito primetio [過去形] da ne znam šta da odgovorim, pomogao [過去形] mi je.

「たら」

（138）あの店で買ったら、安く買えました。（日本語初歩）

Kada/pošto 接続詞 sam kupila 過去形 u toj radnji, jeftino sam platila 過去形.

（139）「耳が痛い」

竹一は、立ったままでそう言いました。

「雨に濡れたら、痛くなったよ」（人間失格）

Bole me uši, rekao je Takeichi stojeći.

Zabolele su 過去形 me kada/pošto 接続詞 sam pokisao 過去形.

（140）ハンバーガーとごく日本式の発音をしたら通じなかったので、ハ(・)にアクセントを置いて思い切りキザに発音してみたら、たちどころに通じた。（若き数学者のアメリカ）

Kada/pošto 接続詞 sam rekao 過去形 s izgovorom u japanskom stilu "Hanbaagaa", nije me razumeo 過去形. Zato sam probao da izgovorim otmeno i odmah je razumeo.

例文（134）の中の従属節の「突き飛ばす」は、主節の「倒れる」という動作を招いた既定性のある文のことであるため、条件よりはその原因・理由として考えることができる。例文(139)、(140)も、時間的な意味とともに、原因・理由の意味としても解釈できる。

既定の事柄を示す「と・たら」の従属節は、時間節と同時に原因・理由を表すこともできる。しかし、例文(49)，(55)に、そのような解釈はできない。

（49a）*会社に帰った（ため、から、ので）、工場長が数人の工員たちと食堂で麦茶を飲んでいた。

ただし、「と」が表す既定の事態が時間とともに原因・理由としても解釈できる例は少なくない。たとえば、

（141）ふたを開けると（開けた時/開けたので）、ゆげがぱあっとまいあがった。（日本語の文法）

Kad/pošto 接続詞 sam podigla 過去形 poklopac, para je pokuljala 過去形.

（134a）役人が背後から突き飛ばすと(突き飛ばした時/突き飛ばしたので)恩人たちは浜の上に倒れた。（沈黙）

(134)，(141)の用例は英語に訳す場合も、原因・理由の接続詞 because や since でも、時間を表す接続詞 when でも訳すことができる。日本語でも時間関係や原因・理由関係を内在させていると言えよう。

原因・理由関係を示す既定の「と・たら」と時間関係を示す既定の「と・たら」との違いは時間的関係の種類と主節のアスペクトによって表されていると思われる。既定の事柄の Posterior 関係を表す、そして、主節の動詞が完成相である 52 の例を分析してみると、その中の 48 例（92.3%）が時間としても原因・理由としても解釈できる例であった。つまり、Posterior 関係で、主節の述語が完成相の場合は、「と・たら」は、原因・理由関係の意味を表す傾向があると言えるだろう。一方、既定の事柄の Anterior 関係を表す、そして、主節の動作が継続相である 37 例を分析してみると、36 例（97.3%）が時間関係しか表せなかった。Anterior 関係で、主節の述語が継続相の場合は、主語が従属節の動作が行われた段階で発見した、すでに存在していた様子を物語っているのであり、時間関係を表す傾向が強いことが判明した。原因・理由を表す既定の事柄は、セルビア語では pošto などの因果関係の接続詞で訳される。次の例を見てみよう：

（141）ふたを開けると、ゆげがぱあっとまいあがった。（原因・理由、時間）

（30）ボタンを押すと（押したら）、明かりが点いた。（日本語の文法）（原因・理由、時間）

Kad/pošto 接続詞 sam pritisla 過去形 dugme, upalilo se 過去形 svetlo.

（142）うちへ帰ったら、お坊さんが来ていました。　（日本語の文法）（時間）

Kad 接続詞 sam se vratila 過去形 kući, tamo je već bio 過去形 sveštenik.

49）会社に帰ると、工場長が数人の工員たちと食堂で麦茶を飲んでいた。（時間）

原因・理由文を表す既定の事柄とそのセルビア語訳の構造と対応関係は、次のようである：

表 11. 原因・理由関係の既定の事柄・セルビア語の原因・理由文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	「と・たら」＋動詞の完成相	動詞の過去形（完成相）	主節と従属節が原因・理由を表しながら Immediate 関係を内在させている場合
セルビア語	因果関係の接続詞 pošto、zato što など＋動詞の過去形（完成相）	動詞の過去形（完成相）	従属節の動作が主節の動作の原因・理由になっている場合

3.5.1.3 まとめ

次に、収集した既定の事柄の用例の中で、時間的関係の各種類を表すために、また原因・理由関係を表すために、どの条件形が最も多く使用されているかを示す。

収集した 1236 の用例の内、288 例は Anterior 関係の事柄を表しており、858 例は Posterior 関係、52 例は Simultaneous 関係、38 例は原因・理由の事柄を表していた。各事柄における「と・たら・ば」の使用率は、表 12. のようになる。

表 12. 既定の事柄の各種類における「と・たら・ば」の使用率

	時間			原因・理由
	Anterior	Posterior	Simultaneous	
と	81.9 %	90.2%	73.1%	68.4%
たら	11.8%	7.2%	26.9%	31.6
ば	6.3%	2.6%		

表 12. から明らかなように、既定の事柄では圧倒的に「と」の用例の数が多い。特に「たら・ば」との差が大きいのは Anterior と Posterior 事柄を表す場合である。Simultaneous 関係を表す場合と原因・理由を表す場合には、「と」と「たら」との差は小さくなっている。

3.5.2 予定的な事柄

ここでは、一定時間後に成立が予定されている事柄の意味と用法を分析してみよう。この文のタイプは、非既定の文で、つまり未来への予定、確信、推量を表す文である。このような文には、二つの意味が見られる。いずれも未来の事柄を表しているが、一つは、非仮定的な時間の意味で、もう一つは、仮定的な事柄であり、条件の意味である。両方とも Irrealis 領域の事柄である。このような事柄の場合、セルビア語を母語とする日本語学習者にとって最も困難だと思われるのは、非仮定の意味と仮定の意味を区別することである。ここでは、予定的な事柄が非仮定的な意味を表す場合に、従属節と主節の間にどのような関係が見られるかを見ていきたいと思う。

3.5.2.1 時間的な意味

予定的な事柄を表す文の従属節と主節の時間的な関係はセルビア語の時間的 Posterior 関係に対応している。事実的に行われた事柄を結ぶ Anterior 関係や Simultaneous 関係の用例はない。

3.5.2.1.1 Posterior 関係

「たら」

(143) 千枝子が帰ったらお昼にいたしましょう。(草の花)

Ručaćemo 未来形 kada 接続詞 dođe 現在形 Chieko.

(144) 夕方、哲生がやってきたら、私の大きな荷物を持たせて両親のところに帰って、しばらくは知らぬ顔をして穏やかに生活しよう。(好人物の夫婦)

Kada 接続詞 dođe 現在形 Tetsuo uveče, zamoliću 未来形 ga da ponese moj velik prtljag i otićiću kod roditelja, živeću umereno praveći se da ništa ne znam.

(145) 外山三郎は授業が終ったら加藤にどこの山をどう歩いて迷ったのか聞こうと思っていた。(孤高の人)

Saburo Sotoyama je mislio kad 接続詞 se završi 現在形 predavanje pitaće 未来形 Katoa na koju planinu se peo i kako se izgubio.

(146) 夕御飯済んだら、もう一度ここへいらっしゃい」(あすなろ物語)

Kad 接続詞 večeraš 現在形, dođi 命令形 ponovo ovde.

(147) 「これを終ったら食事にしよう」(死者の奢り)

Kad 接続詞 ovo završimo 現在形, mi ćemo da jedemo 未来形.

(148) 妹が十八にでもなったら見せてやってもいい。(友情)

Kad 接続詞 moja mlađa sestra napuni 現在形 osamnaest godina, možemo 現在形 da joj pokažemo.

「ば」

(149) 雨期に入れば警史たちの捜索もややゆるむでしょうから、・・・。(沈黙)

Kad 接続詞 se uđe 現在形 u kišnu sezonu, policijska istraga će verovatno popustiti 未来形...

(150) やがて丁年に達すれば、私も兵隊にとられる。(金閣寺)

Kad 接続詞 odem 現在形 u penziju, i ja moram 現在形 da idem u vojsku.

（151）以下はそれから彼の話し出した彼の「薫さんの話し」である。然し、この話はあまり精しく書くわけには行かない。何故なら、時期が来れば彼自身精しく書くつもりでいる材料だからである。（冬の往来）

Dole je njegova “Priča o Kaoru” o kojoj je krenuo da govori. Ali ne mogu deteljno da pisem o ovoj priči, jer on sam namerava 現在形 da piše o ovome deteljno kad 接続詞 dođe 現在形 vreme.

以上の用例はすべて Posterior 関係を表している。これらの文は、従属節の動作が実現してから主節の動作が実現するという Posterior 関係を表し、セルビア語では kad, pošto などの Posterior 関係の接続詞で表される。

3.5.2.1.2 時間的副詞節の働き－Posterior 関係

Posterior 関係の中には、特別な働きをする文のパターンが見られる。それは、時間的副詞節の機能をする文である。

「と」

（152）「兄さんは来年になると月給が上がるんでしょう。」（門）

Bratu će iduće godine (kad 接続詞 postane 現在形 iduća godina) porasti 未来形 plata, zar ne?

（153）リーチは三ヶ月ほどすると一家を挙げて英国へ帰るはずである。（雪の日）

Riči treba 現在形 posle 接続詞 tri meseca da se vrati 現在形 u Englesku zajedno sa svojom porodicom.

（154）夜にならないと行動を開始しない。（パニック）

Nećemo 現在形 da otpočnemo aktivnosti dok 接続詞 ne padne 現在形 veče.

「たら」

（155）一時間か一時間半したら、帰る。（痴情）

Vratiću se 未来形 kući kad 接続詞 prođe 現在形 sat ili sat i po.

（156）九月になったらまた貴方に会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。（こころ）

Nisam lagao 過去形 kada 接続詞 sam ti obećao 過去形 da ćemo se ponovo videti u septembru 時間的副詞 (kad 接続詞 dođe 現在形 septembar).

（157）「明後日？明後日になったら、ぼくはもういませんよ。」（砂の女）

‘Prekosutra? Ja više neću biti 未来形 ovde prekosutra 時間副詞 (kad 接続詞 dođe 現在形 prekosutra).’

（158）宗助は弟に夕方になったら、ちと洋燈を点けるとか、戸をた閉てるとかして、忙しい姉の手伝いでもしたら好かろうと注意したかったが、・・・。（門）

Sosuke je hteo da opomene svog brata da、kada 接続詞 padne 現在形 veče, upali 現在形 zapadnjačku lampu ili zatvori vrata, da pomogne sestri koja je zauzeta, ali…

（159）いつか死ぬ時がきたら、台所で息絶えたい。（キッチン）

Kada 接続詞 dođe 現在形 vreme da umrem jednog dana, želim 現在形 da umrem u kuhinji.

「ば」

（160）やがて年の暮れから正月になれば、あの道が吹雪でみえなくなる。（雪国）

Krajem godine, kad 接続詞 dođe 現在形 Nova godina, taj put se neće videti 未来形 od snega.

（161）もうあと十日もすれば退院してもいいとお医者様から言われた日のことでございます。（錦繍）

To je dan kada mi je lekar rekao da ću za deset dana 時間副詞 moći 未来形 da izađem iz bolnice.

（162）十五年たてば、娘婿は四十二歳になる。（錦繍）

Muž moje kćerke će imati 未来形 42 godine kroz 15 godina 時間副詞.

（163）「明日になれば、くわしく答えられると思います」（冬の旅）

Mislim da ću sutra 時間副詞 (kad 接続詞 dođe 現在形 sutra) moći 未来形 detaljno da odgovorim.

（164）四年たてば俺だって今の俺ではない」（友情）

Kad 接続詞 prođu 現在形 četiri godine, ni ja više neću biti 未来形 sadašnji ja.

（165）「・・・二週間経てば、国から届く筈だから、・・・」（永日小品）

Za/kroz dve nedelje/時間副詞 kad 接続詞 prođu 現在形 dve nedelje, trebalo bi 接続法 da stigne iz zemlje.

「来年になる」、「一時間半する」、「二週間経つ」という事柄は、すでにそうすることになっている、つまり「必然性」の事柄である。このような従属節では、事柄は必ず成立し、成立しない可能性はほとんどない、すなわちその仮定性はほぼゼロに近い。そうすると、この場合の「と・たら・ば」は仮定的な事柄ではなく、時間を表す副詞節の働きをしていると言える。これらの従属節が、条件形ではなく、時間的な副詞で置き換えられることも、この節の時間性について物語っている（来年になると=来年、二週間経てば=二週間後）。これらの用例は、従属節の動作が実現してから主節の動作が実現するという Posterior 関係を表し、セルビア語では kad, pošto などの

Posterior 関係の接続詞か時間的副詞節（za/kroz dve nedelje）で訳される。この文の場合は、Time Measurement の接続詞も対応する。

これらの用例の従属節を「てから」で置き換えれば Posterior 関係がより強く強調されるが、その場合は、単に動作の順番に重点が置かれる。「と・たら・ば」の形式は、文末のモダリティと関わりながら、推量の意味、決心の意味、確信などの意味を表すのが特徴と言えるだろう。

時間的な副詞節の働きをする節と時間的な Posterior 関係を表す文における日本語とセルビア語の構造と対応関係は、次のようである。

表 13. Posterior 関係の時間的副詞節の働きをする予定的な事柄・セルビア語の時間文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	時間副詞＋「と・たら・ば」＋動詞の完成相	動詞の現在形か未来形（完成相）、もしくは、推量、決心、確信など	一定時間後に成立が予定されている事柄で、推量、決心、確信などの意味を表す場合
セルビア語	Posterior 関係の時間接続詞 kad, pošto など/時間副詞（動詞は完成相） *Time measurement の接続詞も対応する	動詞の未来形(完成相)	未実現の事態で、主節の動作が従属節の動作の後に行われる場合（予定性の意味合いはない）

3.5.2.1.3 非仮定の時間的 Posterior 関係 ― 仮定条件の意味との重なり

「たら」

（166）「家に帰ったら、払うわよ。」(哀しい予感)

Kad/?ako 接続詞 se vratim 現在形 kući, platiću 未来形 ti.

（167）山田さんが来たら、教えてください。（日本語初歩）

Kad/?ako 接続詞 dođe 現在形 gospodin Yamada, javite 命令形 mi.

（168）明日雨が降ったら、遠足はやめる。(日本語の文法)

Ako 接続詞 padne 現在形 kiša, nećemo ići 未来形 na izlet.

（169）「きみが死んだら、葬式にはそうしてやる」（ビルマの竪琴）

Kad/Ako 接続詞 umreš 現在形, uradiću 未来形 tako na sahrani.

（170）結婚したら、すぐに子供がほしいわと呟いた。（結婚の生態）

Kad/Ako 接続詞 se udam 現在形, želim 現在形 odmah da rodim dete, rekla je.

（171）大丈夫よ、水をやったら又直ぐ生きッ返るから、（下略）（痴人の愛）

U redu je, kad/ako 接続詞 damo 現在形 vodu, odmah će oživeti 未来形 ponovo, (...)

（172）疲れたら休めよ（二十歳の原点）

Kad?/ako 接続詞 si se umorio 過去形, odmori se 命令形.

「ば」

（173）「日記を見れば、直ぐ分るわ。」（雪国）

Kad/Ako 接続詞 pogledaš 現在形 dnevnik, odmah ćeš razumeti 未来形.

予定的な事柄の中には、もう一つ、注目すべきことがある。例文(166)、(167)を見て分かるように、このような文は、非仮定の予定的な Posterior 関係とともに仮定的な事柄を表すことができる。セルビア語では、仮定的な意味は接続詞 ako で表される。この二つの意味の中からどちらの意味になるかは、文脈からしか分からない。時間的な意味を表す文としても、仮定的な意味を表す文としても捉らえられるため、非仮定の時間的な意味と仮定的な意味が重なってしまう例である。それは、特に、「たら」節に見られる現象である。例文（166）、（167）は時間文としての認識が強いが、例文(168)は仮定的な意味しか表せない。時間的な意味の場合は、セルビア語の従属節の訳は時間的な接続詞 kad＋動詞の現在形になる。仮定的な意味の場合は、セルビア語の従属節の訳は仮定的な接続詞 ako＋動詞の現在形である。

この用例の分析の結果、表 14. で表されているように、予定的な事柄を示す従属節の「と・ば・たら」は仮定的な事柄を表すとともに、非仮定的な時間の Posterior 関係も表せる。予定的な事柄は、Posterior 関係以外の意味を表すことはできない。

非仮定の時間的 Posterior 関係を表す予定的な事柄の日本語の文とセルビア語の文の構造との対応関係は次のようである。

表 14. 非仮定の Posterior 関係の予定的な事柄・
セルビア語の時間文の構造との対応関係

	従属節	主節	使用範囲
日本語	「たら・ば」＋動詞の完成相	動詞の未来形、もしくは推量、決心、確信，依頼、約束など	時間的 Immediate 関係（直後性の意味合い）、最低限条件
セルビア語	Posterior 関係の接続詞 kad, čim, pošto など＋動詞（完成相） *Time measurement の接続詞も対応する	動詞の未来形、もしくは推量、決心、確信、依頼、約束など	未実現の事態で主節の動作が従属節の動作の後に行われ、実現が確かな場合（Time measurement の場合、最低限条件の意味合いがある）

予定的な事柄の意味には、セルビア語の Time Measurement の接続詞は対応していることが分かった。Time Measurement の接続詞を使用すると、最低限の条件の意味合いが含まれる。

予定的な事柄には原因・理由の意味は見られない。その主な理由として次の二つが挙げられる。一つは、予定的な事柄の時間性そのものである。もう一つは、原因・理由の場合は、話者のある事柄についての知識が確かでなければならないが、予定的な事柄の場合は、時間の意味と仮定の意味が接近するので、確信度の高い原因・理由文の意味が表せない。

3.5.2.2 まとめ

収集した予定的な事柄の 104 の用例はすべて Posterior 関係を表していた。その中の各条件形の使用率は、表 15. のようになっている。

表 15. 予定的な事柄における「と・たら・ば」の使用率

	時間			原因・理由
	Anterior	**Posterior**	**Simultaneous**	
と		36.5%		

たら		40.4%		
ば		23.1%		

予定的な事柄を表現するために、最も使用されたのは「たら」であったが、「ば」、特に「と」との差はそれほど大きくはない。要するに、未実現の事態、しかも仮定の事態に接近する事柄を表すには、どの条件形も頻繁に使用される。その頻度は、「と・ば」にかかる主節のモダリティ制約にもよるものであろう。

3.5.3 一般的に行われる事柄

ここでは、習慣的な繰り返し（過去あるいは現在における規則・不規則的な習慣など）や一般的な可能性として成立する事柄の意味と用法を分析してみよう。

3.5.3.1 時間的な意味

収集した用例の分析の結果、一般的な事柄の時間的な意味には、Posterior、Simultaneous と General の意味が見られた。このような一般的に行われる事柄の特質は、従属節の動作がいつも主節の動作に伴って実現することである。それゆえ、主節の動作が従属節の動作の前に行われる Anterior 関係を表さない文である。

一般的な事柄は、次のように分類したい。

(1) 過去の習慣を表す事柄

(2) 過去の経験を表す事柄

(3) 現在の習慣を表す事柄

(4) 現在の経験を表す事柄。

(1) と (3) は、話者が過去において規則的に行った動作、または現在でも規則的に行う動作について述べる場合である。(2) と (4) は、話者が過去において経験したこと、または現在でも経験することがある事態について述べる場合である。

3.5.3.1.1 Posterior 関係

(1) 過去の習慣

「と」

(174) 読み書きに疲れると<u>よく</u>縁の椅子に出た。（城崎にて）

Kad 接続詞 bih se umorio 接続法 od čitanja i pisanja, izašao bih 接続法 na verandu i seo na stolicu.

（175）彼は疲れると熊のように雪洞にもぐって眠り、嵐が止むと、また歩いた。（孤高の人）

Kad 接続詞 bi se umorio 接続法, ušao bi 接続法 u jamu u snegu i spavao. Kad bi prošla oluja, opet bi hodao.

（176）日が高いうちは喫茶店だったが、暮れると必ず呑み屋へ行くことになった。（一瞬の夏）

Dok je sunce visoko, bili smo u kafiću, ali kad 接続詞 zađe 過去形, uvek smo odlučivali 過去形 da idemo u kafanu.

（177）夏になると、伊豆屋の直ぐ半町程の下が子供たちの泳ぎ場になった。（あすなろ物語）

Kad 接続詞 je došlo 過去形 leto, mesto oko 50 metara dole tačno od prodavnice Izuya je postalo 過去形 dečije kupalište.

（178）自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出入りを眺めていた。（城の崎にて）

Kad 接続詞 mi je bilo 過去形 dosadno, često sam gledao 過去形 s ograde kako ulaze i izlaze pčele.

（179）そして他処からの貰いものがあると、祖母は自分ではそれを食べないで、鮎太に食べさせた。（あすなろ物語）

I kad 接続詞 bi dobila 接続法 nešto od komšije, baba nije jela 過去形 to sama nego je davala Ayuti da jede.

（180）つまり、鮎太も祖母のおりょうも、毎年夏になると、別々にそれぞれ肉親のいる場所へ里帰りをするという恰好であった。（あすなろ物語）

Ukratko, i Ayuta i njegova baka Oryo su išli 過去形 kod svojih rođaka svake godine kad 接続詞 dođe 現在形 leto.

（181）父が上京して来ると、自分は、毎朝そそくさと登校するのでしたが、しかし、本郷千駄木町の洋画家、安田新太郎氏の画塾に行き、三時間も四時間も、デッサンの練習をしている事もあったのです。（人間失格）

Kad 接続詞 je otac dolazio 過去形 u Tokio, svako jutro sam žurio 過去形 na fakultet, ali ponekad sam išao u školu slikanja Shintaroa Yasude, slikara u Sendagiju, Hongo, i vežbao sam skeč 3 ili 4 sata.

（182）ぼくは編集部ではまだ一番の若手で、同僚たちと金があるとにかく酒ばかり飲んでいた。（新橋烏森口青春篇）

Ja sam još uvek bio najmlađi u uredništvu i kad 接続詞 bih imao 接続法 para samo bih pio 接続法 sa kolegama.

（183）毎朝、ベッドからとび起きると、鏡にむかっていばり方の研究するほどの念の入れ方であった。（ブンとフン）

On je bio toliko pažljiv da je svako jutro kada 接続詞 ustane 現在形 iz kreveta stajao 過去形 naspram ogledala i proučavao načine da bude uobražen.

「ば」

（184）そして後はひまさえあれば、台所で料理を作っていた。（キッチン）

Kad 接続詞 god bih imala 接続法 vremena, spravljala bih 接続法 jela u kuhinji.

（185）汚職があれば、徹底的にたたかった。

Kad 接続詞 je bilo 過去形 korupcije, borili smo se 過去形 protiv nje korenito.　（ブンとフン）

（186）虎斑の大きな肥った蜂が天気さえよければ、朝から暮近くまで毎日忙しそうに働いていた。（城の崎にて）

Pčela, koja ima figuru tigra, svaki dan je naporno radila 過去形 od jutra do uveče, kad god 接続詞 je bilo 過去形 lepo vreme.

（2）過去の経験

「と」

（187）そして杉子が少しでも笑うと彼は幸福を感じた。（友情）

Osetio bi 接続法 sreću kad god 接続詞 bi se Sugiko smejala 接続法 makar malo.

（188）何が欲しいと聞かれると、とたんに、何も欲しくなくなるのでした。（人間失格）

Kad 接続詞 bi me pitali 接続法 šta želim, ja bih istog časa prestajao 接続法 da želim išta.

（189）看護室の前の廊下を通ると、時々、中から彼女の笑声が聞えて来た。（草の花）

Kada 接続詞 bih prolazio 接続法 hodnikom ispred sobe medicinskih sestra, ponekad bi se čuo 接続法 njen smeh.

（190）暑い時は一日に一度は体を拭かないと、汗ばんで気持が悪かった。（花埋み）

Kad/Ako 接続詞 ne bih, kad je bilo vruće, jednom dnevno obrisao 接続法 telo, loše bih se osećao 接続法 zbog znoja.

（191）彼は女の人を見ると、結婚のことをすぐ思わないではいられない人間だった。（友情）

On je bio čovek koji nije mogao 過去形 da ne pomisli na brak čim 接続詞 ugleda 現在形 ženu.

（192）だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。（こころ）

Zbog toga bi mi se ponekad dešavalo da se moja osećanja iznenada preokrenu 現在形 kad 接続詞 se stvarno pojavim 現在形 pred ženom.

（193）夜半を過ぎると、四百円位で泊れる事もあった。（風に吹かれて）

Kad 接続詞 bi prošla 接続法 ponoć, dešavalo se 過去形 da mogu da prespavam za otprilike 400 jena.

「ば」

（194）その頃の私は、海を見れば、ああ、なんと淋しい海だろうと思い、何としても大阪に帰りたいと考えてしまう。（錦繍）

Ja bih tada, kada 接続詞 bih ugledao 接続法 more, pomislio 接続法 kakvo usamljeno more i po svaku cenu bih poželeo da se vratim u Osaku.

過去の習慣・経験を表す文とそれに対応するセルビア語の文の構造は、表 16. で表す。

表 16. 過去の習慣・経験を表す一般的な事柄の Posterior 関係・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節
日本語	「と」、「ば」	動詞の過去形及び過去の意味で使用される未来形（完成相か継続相）
セルビア語	接続詞 kad, kad god, čim+接続法、あるいは過去形	動詞の接続法あるいは過去形（完成相か継続相）

(3) 現在の習慣

「と」

(195) 流行歌手なら十年もたつと、〝歌手生活十周年記念リサイタル〟なんてのをやらかすが　(ブンとフン)

Poznat pevač, kada 接続詞 prođe 現在形 desetak godina posle njegovog prvog nastupa, održava 現在形 'Jubilarno izvođenje povodom deset godina karijere.'

(196) 先生は例月その日になると雑司ケ谷の墓地にある或仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。(こころ)

Rekla je da Učitelj ima običaj 現在形 da uvek kada 接続詞 dođe 現在形 ovaj dan u mesecu odnese cveće na jedan grob na groblju Zošigaja.

「たら」

(197) 生後二箇月ぐらいして背中に青みが差し、七八分から二寸ぐらいになったのは青子と云い、この程度になったら養魚池に放流する。(黒い雨)

Oko 2 meseca posle rođenja, oboje se plavo na leđima, i kada 接続詞 budu 現在形 oko 2 do 6 santimetara, zovu se 現在形 "aoko", a kada porastu otprilike ovoliko, stavim ih u ribnjake za rasad.

「ば」

(198) 宣教師が捕まれば処刑の前日、このように見せしめのため長崎市中を引きまわすのが奉行所の慣例である。(沈黙)

U uredu "Bugyosho" je običaj kada 接続詞 uhvate 現在形 misionara, da ga ovako vode 現在形 svuda po gradu Nagasaki kao upozorenje.

(199) 毎年、二十人から三十人の寮生が春になればこの寮に入って来る。(孤高の人)

Svake godine, kad 接続詞 dođe 現在形 proleće, u ovaj dom dođe s 現在形 od dvadeset do trideset ljudi.

過去の経験を表す文とそれに対応するセルビア語の文の構造は表 17. で表す。

表 17. 現在の習慣を表す一般的な事柄の Posterior 関係・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節
日本語	「と」、「たら」、「ば」	動詞の未来形か現在形（完成相）
セルビア語	接続詞 kad＋動詞の現在形	動詞の現在形（完成相か継続相）

（4） 現在の経験

「と」

（200）この風景を見ると、ニースやカンヌやリヴィエラのことが、しみじみ思い出されるなあ。（ブンとフン）

Kada 接続詞 pogledam 現在形 ovaj pejzaž, setim se 現在形 živo Nice, Kana i Rivijere.

（201）それにあたし、血をみるとあっさり気を失うんですもの。（聖少女）

I uz to ja, čim 接続詞 vidim 現在形 krv, odmah izgubim 現在形 svest.

（202）そう考えるといつも涙が出ます。（エディプスの恋人）

Kada 接続詞 razmišljam 現在形 tako, uvek mi poteku 現在形 suze.

（203）私は財産の事をいうときっと昂奮するんです。（こころ）

Kad 接続詞 pričam 現在形 o imovini, ja se sigurno uzbudim 現在形.

（204）もちろん今は手術後だよ、ぴんぴんしていてその頃のことはめったに思い出すこともないが、大変なことや、つらいことにぶちあたると、タオルのことを思い出すんだ。（TUGUMI）

Naravno、operacija je prošla, ja sam vrlo dobro i retko se setim onoga što se desilo tada, ali kada 接続詞 se sukobljavam 現在形 sa teškoćama ili naporima, setim se 現在形 peškira.

（205）世界の舞台に立つ政治家も、洋服をきると国民の人気がなくなるから、いつもビルマ服をきています。（ビルマの竪琴）

I političari koji izlaze na svetsku scenu, uvek oblače burmansko odelo, jer ako 接続詞 obuku 現在形 zapadnjačko, gube 現在形 popularnost.

（206）「箕輪辺りまで下りると時々見かけますが、上では蝮は一度も見たことはありませんよ」（焚火）

‘Kada 接続詞 idem 現在形 dole u Minovu i okolinu, ponekad ugledam 現在形 šarku, ali nikada je nisam videla gore.’

（207）田舎の薬局へ行くと折り合った値段で売ってくれることがある。（黒い雨）

Kada 接続詞 odem 現在形 u apoteku na selu, ponekad se desi 現在形 da to prodaju po pristojnoj ceni.

（208）「あの町を見ると、むかし耳にした話を思いだす」（沈黙）

‘Kada 接続詞 vidim 現在形 taj grad, setim se 現在形 priče koju sam čula u prošlosti.’

（209）闇の中でねっとりした暑熱と汗に浸って小さなタバコの火の明滅を眺めていると、それにつれて心も明滅する。（花終わる闇）

Kada 接続詞 gledam 現在形 u mraku, natopljen lepljivom vrućinom i znojem, kako mala vatra na cigari plamti na mahove, i moje srce plamti 現在形 sa njom.

（210）このころのことを思いかえすと、いつも、次のようなかわったことを思いだします。（ビルマの竪琴）

Kad 接続詞 se setim 現在形 tih dana, uvek se setim 現在形 ove čudne stvari.

「ば」

（211）独りで食えば、鼻の先が鋺の中の飯へとどいてしまう。（鼻）

Kad 接続詞 je jeo 過去形 sam, vrh nosa je dosezao 過去形 do jela u tanjiru.

現在の経験を表す文の中には、主に「と」が現れる。それは、この文の spontaneous character について物語っているだろう。セルビア語では、時間の接続詞 kad が使われるが、主節での動詞の現在形の使用は、この動作はいつも、そして現在も実現するということ示しているのである。

現在の経験を表す文とそれに対応するセルビア語の文の構造は表 18. で表す。

表 18. 現在の経験を表す一般的な事柄の Posterior 関係・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節
日本語	動詞の完成相＋「と」、「ば」	動詞の未来形（完成相）
セルビア語	接続詞 kad＋動詞の現在形（完成相か継続相）	動詞の現在形（完成相か継続相）

時間的な Posterior 関係を表す一般的な事柄は、規則的に行われた過去あるいは現在の習慣、及び経験を表している。例文(174)、(187)は、主節の動詞の過去形で示されているように、実際に起きた過去の出来事であり、既定の事柄である。例文(195)、(200) は、現在に続く習慣や経験を表している。主節の動作が従属節の動作の後に行われるので、Posterior 関係を表している。

一般的な事柄における「と・たら・ば」の使用率は、表 19. で表す。

表 19. 一般的な事柄の時間的 Posterior 関係における「と・たら・ば」の使用率

一般的な事柄の時間的 Posterior 関係		と	たら	ば	合計
	過去の習慣	74/ 88%		10/ 12%	84/ 100%
	過去の経験	30/ 93.7%		2/ 6.3%	32/ 100%
	現在の習慣	38/ 86.4%	4/ 9.1%	2/ 4.5%	44/ 100%
	現在の経験	70/ 85%		12/ 15%	82/ 100%
合計					240

ここで注目すべき点は、「たら」の用例が少ないことである。過去の習慣、過去の経験及び現在の経験を表す事柄には「たら」の用例が見られなかったのが特徴的である。つまり、一回限りの出来事を表す特徴を持つ「たら」は、習慣的に繰り返される動作を表すことがほとんどない。

過去や現在の習慣的な繰り返し、または規則的に行われる事柄を表す文は、iterative character が強く、主節で「いつも・よく」という副詞が使われる。セルビア語に訳すときに接続詞 kad, čim, iterative character を強調する kad god（~ たびに）を使用する。Time measurement の接続詞は対応しない。

このような文の従属節は、セルビア語で接続詞 kad, kad god, čim＋動詞の接続法か過去形で表される。主節には、接続法か現在形が用いられる。接続詞 kad god, čim は、従属節の動作が実現してすぐ後に主節の動作が実現するという immediate 関係を表して

いる。この接続詞と接続法の組み合わせは、過去において動作が習慣的に繰り返されたことのしるしである。

一般的な事柄の Posterior 関係とそのセルビア語訳の構造と対応関係は、次のようである：

表 20. Posterior 関係の一般的な事柄・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	「と・たら・ば」	動詞の過去形、現在形・未来形	習慣的な繰り返し（過去あるいは現在における規則・不規則的な習慣など）や一般的な可能性として成立する事柄の場合；主節の動作が従属節の動作の後に実現する場合
セルビア語	Posterior 接続詞 kad, pošto, kad god など＋動詞の過去形（完成相か継続相）か接続法	動詞の過去形（完成相か継続相）	主節の動作が従属節の動作の後に行われ、それが規則的か習慣的な場合（日本語とほぼ同じ使用域だが、セルビア語の場合は、時間の意味が習慣的な繰り返しの意味合いより強い）

3.5.3.2 Simultaneous 関係

「と」

（212）権五郎の腰とかなぜてると、時々思うんだ。（TUGUMI）

Kad /dok [接続詞] mazim [現在形] Kengoroa po leđima, ponekad pomislim [現在形].

一般的な事柄の場合、Simultaneous 関係は「と」にしか見られない。時間的 Simultaneous 関係は、事実的に行われていた、もしくは現在行われている事柄に特徴的なものであり、一般的な可能性として成立する、つまり仮定領域に近い事柄には見られない。セルビア語では Simultaneous 関係の接続詞 kad god, dok で訳される。この場合も Time measurement の接続詞は対応しない。

一般的な Simultaneous 関係の事柄とそのセルビア語訳の構造と対応関係は、次のようである：

表 21. **Simultaneous 関係の一般的な事柄・セルビア語の文の構造と対応関係**

	従属節	主節	使用域
日本語	動詞の継続相＋「と」	動詞の未来形	習慣的な繰り返し（過去あるいは現在における規則・不規則的な習慣など）の場合、すなわち主節の動作が従属節の動作と同時に行われる場合
セルビア語	Simultaneous 接続詞 dok, kad god＋動詞の完成相か継続相	動詞の現在形（完成相か継続相）	主節の動作が従属節の動作と同時に行われ、それが規則的か習慣的な場合（日本語とほぼ同使用域だが、セルビア語の場合は、時間の意味が習慣的な繰り返しの意味合いより強い）

3.5.3.3 General 関係

「と」

（213） 春がくると、花が咲きます。（Intensive Course in Japanese）

Kad 接続詞 dođe 現在形 proleće, cveta 現在形 cveće.

（214） これでちゃんと春になると芽が吹くんだ、夏になると花が咲くんだ。（草の花）

Iako je tako, kada 接続詞 dođe 現在形 proleće, sigurno izlaze 現在形 pupoljci, i kada dođe leto, sigurno cveta cveće.

（215） 7と#を押すと、未知の人間の伝言が次々に取り出せるのである。（都市の遺言）

Kada/ako 接続詞 pritisnute 現在形 7 i #, možete 現在形 da dobijete poruke nepoznatih ljudi jednu za drugom.

（216） 花茎からしぼった汁を煮つめると砂糖がとれます。（ビルマの竪琴）

Kad 接続詞 kuvaš 現在形 sok od cveća, dobićeš 未来形 šećer.

（217） 一方的に何かを言われると、内容が何であろうと、反発するのが私の習性なのだ。（若き数学者のアメリカ）

Moja priroda je takva da, kad 接続詞 mi neko nešto kaže 現在形, šta god bio sadržaj toga, ja se suprotstavim 現在形.

（218） 「アルコール液がしみこむと作業がやりにくくなるからな」（死者の奢り）

Kad/Ako 接続詞 prodre 現在形 alkohol, postaće 未来形 teško za rad.

（219）アルコール液がはねこむといつまでも匂うから（死者の奢り）

Kad/Ako 接続詞 prsne 現在形 alkohol, dugo smrdi 現在形.

（220）この種族はふつうの年だと夏は野外にいて秋になれば人家へもどってくる。（パニック）

Ova vrsta, kad 接続詞 je 現在形 obična godina, izađe napolje preko leta i kad dođe jesen, vrati se 現在形 u kuće ljudi.

（221）つまり、ネズミは毎年春になるとわくものなんだ。（パニック）

Dakle, miševi se kote 現在形 na proleće 時間副詞 (kad 接続詞 dođe 現在形 proleće) svake godine.“

（222）一度流産すると癖になると聞いたので、・・・。（門）

Čula sam da, kad/ako 接続詞 jednom abortiraš 現在形, to postane 現在形 navika…

（223）神戸市街の背後が山であるから、ひとたび日が山にかくれると、神戸は山の影に入る。（孤高の人）

Pošto su planine iza grada Kobe, čim 接続詞 zađe 現在形 sunce iza planine, Kobe je 現在形 u njenoj senci.

（224）美ということだけを思いつめると、人間はこの世で最も暗黒な思想にしらずしらずぶつかるのである。（金閣寺）

Kad 接続詞 puno razmišlja 現在形 samo o lepoti, čovek ni ne znajući dođe 現在形 do najmračnijih razmišljanja na svetu.

（225）生きたまま食うとね、虫のエネルギーがそのまま食った人のエネルギーになるんだな」（新橋烏森口青春篇）

Kad/Ako 接続詞 ih jedeš 現在形 žive, onda energija insekata tako postaje 現在形 energija osobe koja ih je pojela.

（226）権威をもつと、人は、愛や、やさしさや、正しいことがなにかを、忘れてしまうんです。（ブンとフン）

Kada 接続詞 ima 現在形 autoritet, čovek zaboravi 現在形 šta je ljubav, nežnost i šta je ispravno.

（227）若い者は寒いと酒ばかり飲んでいるよ。（雪国）

Kad 接続詞 je 現在形 hladno, mladi samo piju 現在形.

（228）家族と共に生活していると、何も考えずにいても楽しく過せるのだ。（二十歳の原点）

Kad/ako 接続詞 živiš 現在形 sa porodicom, možeš 現在形 da budeš bezbrižan i da ni o čemu ne razmišljaš.

「たら」

（229）だが恋してしまったら、その人にとってその女は唯一になるだろう。（友情）

Ali kad 接続詞 se zaljubi 現在形, za tu osobu ta žena postaje 現在形 jedina, zar ne?

「ば」

（230）「若いからそうだが、やがて年をとれば年配者の言うことが正しいことがわかる」（二十歳の原点）

To je zbog toga što si mlad, ali kad 接続詞 dođeš 現在形 u neke godine, shvatiš 現在形 da su tvoji bili u pravu.

（231）地図の見方がほんとうにわかるようになれば一人前の登山家になれる」（孤高の人）

Kad 接続詞 shvatiš 現在形 tačno kako da čitaš mapu, postaćeš 未来形 pravi planinar.

（232）八月の中日がすぎれば、高原はすでに秋の気配が濃い。（秋風）

Kada 接続詞 prođe 現在形 srednji dan u avgustu, već je 現在形 jak znak jeseni u visoravni.

（233）冬ともなれば、村は一層しんとする。（草の花）

Naročito kada 接続詞 dođe 現在形 zima, selo postane 現在形 još tiše.

（234）自分の世界を作りあげようとすれば、すぐに政府という怪物にぶち当る。（二十歳の原点）

Kad/ako 接続詞 pokušaš 現在形 da izgradiš svoj svet, odmah udariš 現在形 u zver koja se zove vlada.

（235）九月になれば、富士山に初雪が見られる。（Intensive Course in Japanese）

U septembru 時間副詞(kad 接続詞 dođe 現在形 septembar), na Fuđiju se može 現在形 videti prvi sneg.

（236）「悲しいことがあれば、誰だって泣くわ」（あすなろ物語）

Svi plaču 現在形 kad 接続詞 ima 現在形 nečeg tužnog.

以上のような文は、特定の時間に限定されていない、一般的な可能性あるいは常識として成立する事柄である。このような文の従属節と主節の事柄は常に共に行われている、いわゆる all-time の事柄であるため、General 時間文と呼ぶことにする。セルビア語では all-time 関係を示すことができる接続詞 kad, 時間的な副詞か条件文で使われている接続詞 ako, ukoliko（もし～ば）で訳される。Time measurement の接続詞はこの場合も対応しない。

一般的な General 事柄とそのセルビア語訳の構造と対応関係は、次のようである：

表 22. General 関係の一般的な事柄・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	「と」、「ば」	動詞の未来形、推量など	特定の時間に限定されていない、一般的な可能性あるいは常識として成立する事柄の場合
セルビア語	時間的な all-time 関係の接続詞 kad、時間的な副詞か条件文の接続詞 ako, ukoliko＋動詞の現在形	動詞の現在形か未来形	特定の時間に限定されていない、一般的な可能性あるいは常識として成立する事柄の場合

3.5.4 原因・理由の意味

「と」

（237）読み書きに疲れると よく縁の椅子に出た。（城崎にて）

Pošto 接続詞 bih se umorio 接続法 od čitanja i pisanja, izašao bih 接続法 na stolicu na verandi.

（238）ケシの果実に、未熟なうちに傷をつけると、乳状の液がにじみでてくる。（人民は弱し官吏は強し）

Kad 接続詞 isečeš 現在形 plod maka dok je mlad, mlečna tečnost će polako izaći 未来形.

「ば」

（239）食うに困れば、人間はなんでもする。（友情）

Čovek će sve da uradi 未来形 zato što /jer 接続詞 je 現在形 gladan.

これらの文は、時間的な意味とともに原因・理由も表すことができる。いずれの従属節も理由節の「ので」で置き換えられるが、「と・ば」の場合は、規則、あるいは一般的な現象の意味のニュアンスが感じ取れる。例文(239)は、仮定的な事柄としても理解できるが、従属節と主節の規則的な因果関係が強いため、仮定性の弱い文となっている。このような文は、セルビア語では原因・理由の接続詞 pošto, zato što, jer などで訳される。

このような文の構造とそのセルビア語訳の文の構造との対応関係は、次のようになっている。

表 23. 原因・理由関係の一般的な事柄・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	「と」、「ば」	動詞の現在形・未来形か過去形（完成	習慣的な繰り返し（過去あるいは現在における規則・不規則的な習慣など）や一般的な可能

		相）	性として成立する事柄の場合。すなわち従属節の動作が主節の原因・理由になっている場合
セルビア語	原因・理由の接続詞 pošto, zbog toga što, jer など＋動詞の過去形（完成相か継続相）か接続法（過去の習慣を表す場合）あるいは現在形か未来形	動詞の現在形か未来形あるいは過去形（完成相か継続相）か接続法	習慣的な繰り返し（過去あるいは現在における規則・不規則的な習慣など）や一般的な可能性として成立する事柄の場合。すなわち従属節の動作が主節の原因・理由になっている場合

3.5.5 まとめ

収集した一般的な事柄の 362 例の内、240 例は Posterior、2 例は Simultaneous, 82 例は General 関係と 38 例は原因・理由関係を表していた。

表 24. 一般的な事柄の各種類における「と・たら・ば」の使用率

	時間				理由・原因
	Anterior	**Posterior**	**Simultaneous**	**General**	
と		86.7%	100%	61%	79%
たら		2.5%		7.3%	5.3%
ば		10.8%		31.7%	15.8%

一般的な事柄の時間的な意味と原因・理由の意味を表すのに、「と」が最も多く使われていた。このことは、「と」の一般性の性格について物語っている。General の意味の場合は、「ば」もよく使用されている。

3.6「なら」が表す非条件的な事柄

「なら」は、「と・ば・たら」とは同じ条件文であっても、表す意味や用法などからいうと違う性質を持っているようである。既定の事柄を表す「なら」には、現実性はあるものの、従属節の事態が真であると仮定し、それに基づいて主節において話し手の判断・態度を表しているため、「と・ば・たら」文の「既定の事柄」とは違う性質を持っている。

3.6.1 既定の事柄

これに属するものは、相手の発言や現状を前提の材料とするものである。つまり、相手が言ったことや伝えられた情報を「前提」の材料にして、それを条件として差し出し、主節に話者の意見などを述べている場合である。あるいは、現在の状況（状態）がすでになされていることなどを「前提」の材料とし、それを条件として差し出す場合である。

3.6.1.1 原因・理由の意味

(240)そんなに急ぐなら、変更しなけりゃいいのに。私、ちょっととりこみ事を抱えてまして、現場もあるし、そう簡単に時間が作れないんです。(霧の向こう側)

Pošto[0 接続詞] toliko žurite [現在形], nije trebalo [過去形] da menjate. Ja imam obaveze, a i teren, tako da ne mogu lako da odvojim vreme.

（241）砂の壁がけわし過ぎるのなら、それをくずして、傾斜をゆるやかにしてやればいい・・・（砂の女）

“Kad/Ako/Pošto [接続詞] je [現在形] zid od peska peviše strm, onda ga treba [現在形] srušiti i smanjiti nagib…

（242）親が賛成しないなら、二人でどこへ行って、二人きりで暮らそうと言い出したのは、あたしでした。（事件）

Ja sam rekla da , kad/ako/pošto [接続詞] se roditelji ne slažu [現在形], mi ćemo negde otići [未来形] i živeti sami.

（243）「あんた私の気持ち分かる？」「分かるよ。」

「分かるなら言ってごらんなさい。」（雪国）

“Da li ti razumeš moja osećanja?” “Razumem.”

“Kad/Ako/Pošto 接続詞 razumeš 現在形, onda reci 命令形.”

（244）泣きたいなら泣けよ（二十歳の原点）

“Kad/Ako/Pošto 接続詞 ti se plače 現在形, plači 命令形.

（245）死ぬなら、この間約束してくれたダイヤのネックレス買ってからにして！（二十歳の原点）

“Kad/Ako/Pošto 接続詞 hoćeš 現在形 da umreš, onda to uradi 現在形 pošto ispuniš obećanje i kupiš mi dijamantsku ogrlicu!

（246）「あなたが、そう決めたのなら、わたしはそれでかまいませんよ」（結婚式）

“Kad/Ako/Pošto 接続詞 si ti tako odlučio 過去形, ja nemam 現在形 ništa protiv.

相手が言った「急いでいる」、「死ぬ」などという事柄を前提の材料にして、主節に自分の意見などを述べているのである。「砂の壁がけわしすぎる」という事柄は現在の状況であり、「そう決める」という事柄はすでに行われた事柄なのである。「たなら」は、テンポラルセンターが発話時であるので、テンス的意味は「過去」を表している。

これらの文はセルビア語に三種類の接続詞で訳される。それは、時間的な接続詞 kad, 条件の接続詞 ako, そして原因・理由文の接続詞 pošto, jer, zbog toga što. しかし、この場合の時間的な接続詞 kad は、本当の時間の意味ではなく、因果関係を表している。条件の接続詞 ako も、すでに実現した事柄で使われているので、本当の条件ではなく、やはり因果関係を示している。つまり、「なら」の特殊な性格のため、相手の発言や現状を前提の材料にした従属節の事柄は、主節の事柄の原因・理由、あるいはきっかけとして捉えることが多い。

このような文の日本語とセルビア語の構造は、つぎのようである：

表 25. 原因・理由関係の既定の事柄・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	動詞の現在形・未来形か過去形＋「なら」（動詞は完成相か継続相）	命令、要求、お願い、話者の意見など	相手の発言や現状を前提の材料とするもので、主節の動作が従属節の動作の原因・理由になっている場合
セルビア語	因果関係の接続詞 pošto (već)、時間的接続詞 kad (već), 条件の接続詞 ako (već) ＋動詞の過去形（完成相か継続相）	(onda)＋ 命令、要求、お願い、話者の意見など	相手の発言や現状を前提の材料とするもので、主節の動作が従属節の動作の原因・理由になっている場合

既定の事柄の「なら」文について特徴的なのは、日本語とセルビア語の使用域が同じことである。その理由は、やはり、日本語の場合もセルビア語の場合も、相手の発言や現状からもらった情報を材料にするという意味が「なら」文の基本であるからであろう。

「なら」の場合は、原因・理由関係と条件の意味はよく重なってしまい、因果関係の接続詞も条件の接続詞も使用できる例が多い。しかし、この場合の条件は本当の意味の条件ではない。やはり、話者は、相手や現状からもらった、すでに実現した事柄に関する情報を従属節の材料にして、主節には自分の意見や態度などを表すので、仮定的な意味ではない。これは、Rhetoric 条件と呼ぶことにする。

Rhetoric 条件はセルビア語の場合、接続詞 ako 、時間的な接続詞 kad već~onda で表されていて、već~onda の組み合わせには、従属節で話者が聞いた情報を確認することと、主節でその情報による結果を強調する機能がある。

3.6.1.2 まとめ

収集した既定的な事柄の 88 の用例はすべて原因・理由関係を表していた。

表 26. 既定の事柄における「なら」の使用率

	時間			原因・理由
	Anterior	Posterior	Simultaneous	
なら				100%

3.6.2 予定的な事柄

3.6.2.1 原因・理由の意味

(247) 私は、アパ XX 情報を横目で見るのにすっかりあきて、どうせ引っ越すならと雑誌をひもでしぼる作業に専念していた。(キッチン)

Dojadilo mi je da sa strane gledam informacije o Apa XX. Ako/Pošto/Kad[接続詞] ću već da se selim[未来形], krenula sam[過去形] da povezujem časopise kanapom.

(248) どうせご馳走になるのなら、ウイスキー・タンサンに願いたいね。(痴人の愛)

Ako/Pošto/Kad[接続詞] me već častite[現在形], zamolio bih[接続法] za viski.

（249）直ぐ行くと云い

Kaži da ćemo odmah da idemo.

「そう？行くなら早い方がいいかも知れませんわね」（好人物の夫婦）

A tako? Ako/Pošto/Kad 接続詞 ćemo već da idemo 未来形, možda je 現在形 bolje što pre.

（250）「夕食を外にするなら、家に電話するわ。」（ムーンライト・シャドウ）

Ako/Pošto/Kad 接続詞 ćemo da večeramo 未来形 napolju, telefoniraću 未来形 kući.

「引っ越す」、「ご馳走になる」、「行く」などという事柄は、すでにそうすることになっている、つまり「予定性」を持っている事柄である。これに属する文は、従属節に「どうせ」という副詞がよく用いられる。

予定的な事柄を差し出す文には、「たなら」の用例はない。

予定的な事柄を表す「なら」は、　因果関係の意味合いが強い。予定的な事柄を表す「なら」は、セルビア語の条件の接続詞 ako が対応するが、原因・理由文の接続詞 pošto, jer, zbog toga što などそして時間的な接続詞 kad も使用できる。つまり、予定的な未来の事柄を表す「なら」の場合は、条件に近い意味を内在させているので、時間的な接続詞よりも、条件の接続詞のほうが使用される。ただし、この場合の「なら」も、仮定的な意味がないので、本当の条件の意味もない。実は、因果関係を表している。

このような文の日本語とセルビア語の構造は、つぎのようである：

表 27. 原因・理由関係の予定的な事柄・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	動詞の未来形＋「なら」（動詞は完成相）	動詞の過去形、又は願望、意志など	一定時間後に成立が予定されている事柄で、命令、要求、決心などの意味を表す場合
セルビア語	条件の接続詞 ako(već)、因果関係の接続詞 pošto (već)、時間的な接続詞 kad (već)＋動詞の未来形	(onda) ＋動詞の過去形、又は願望、意志など	一定時間後に成立が予定されている事柄で、命令、要求、決心などの意味を表す場合

3.6.2.2 まとめ

収集した予定的な事柄の 40 の用例はすべて原因・理由関係を表していた。

表 28. 予定的な事柄における「なら」の使用率

	時間			原因・理由
	Anterior	Posterior	Simultaneous	
なら				100%

3.6.3 一般的な事柄

3.6.3.1 時間的な意味

3.6.3.1.1 General 関係

（251）夫婦というものは、病気とか不慮の災難以外は頼らない方がいい。実際に愛の片があるなら、出来得る限り頼らない方がいいと思うのだ。（娘への）

Supružnici ne treba da se oslanjaju jedni na druge osim u bolesti i nesreći. Ako/kad 接続詞 stvarno ima 現在形 parče ljubavi, mislim 現在形 da koliko je moguće ne treba da se oslanjaju jedno na drugo.

（252）夫婦関係の複雑さを見透す眼をもっているならば、どんな事件にあってもそれを大きな不幸にしなくても済むにちがいない。（結婚の生体）

Ako/kad 接続詞 umeš 現在形 da propustiš složenost bračnih odnosa, šta god da te snađe, sigurno ćeš proći 未来形 bez velike nesreće.

（253）一人で残って仕事をしている時、時々手伝ってくれるのは阿久津であった。（中略）阿久津と二人でやるのなら、いくら遅くなっても迪子はつらくない。（野わけ）

Kad bih ostajao sam i radio, ponekad bi mi pomagao Akutsu. (...) Ako/kad 接続詞 radim 現在形 zajedno sa Akutsuom, Yuko nije teško 現在形 koliko god da je kasno.

（254）ラップ人の人生観は、喜びを分かち合うと喜びは大きく膨らんでいくが、悲しみを分かち合ったなら小さくなっていくというものだった。（娘への）

Pogled na život Rapa je takav da, kad deliš radost, ona samo raste, a kad 接続詞 deliš 現在形 tugu, ona se smanjuje 現在形.

「二人でやる」、「悲しみを分かち合う」「見透す眼をもっている」などという事柄は、特定の時間に限定されていない事柄である。すなわち、一般的な可能性として成立する事柄を条件として差し出したのである。

一般的な事柄を表している「なら」には、時間的な意味として General の意味が見られた。

このような文の日本語とセルビア語の構造は、つぎのようである：

表 29. General 関係の一般的な事柄・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	動詞の現在形・未来形か過去形＋「なら」（動詞は完成相か継続相）	動詞の現在形・未来形，又は命令、要求、意見など	特定の時間に限定されていない、一般的な可能性として成立する事柄の場合
セルビア語	時間的な all-time 関係の接続詞 kad、か条件文の接続詞 ako, ukoliko＋動詞の過去形か現在形	動詞の未来形，又は命令、要求、意見など	特定の時間に限定されていない、一般的な可能性として成立する事柄の場合

3.6.3.2 原因・理由の意味

（255）結婚して夫婦という立場でスタートしたなら、時には“夫婦とは何だろうか“という疑問を提出して、お互いに納得出来るまで話し合う必要がある。（娘への）

Kad/Pošto/Ako [接続詞] ste se već venčali [過去形] i startovali sa pozicije supružnika, ponekad bi trebalo [接続法] da se zapitate šta su bračni drugovi i da o tome pričate dok se ne složite.

（256）大きな捜査機関を持ちながら、検察側が有罪を立証できなかったのなら、その責任をとるべきである、というのが、彼の考え方であった。（事件）

Njegov način razmišljanja bio je takav da, kad/pošto/ako [接続詞] tužilaštvo, koje ima veliku istražnu instituciju, nije bilo [過去形] u stanju da dokaže krivicu, treba [現在形] za to da odgovara.

一般的な事柄で、原因・理由を表す「なら」は、過去の出来事を表しているのが時間的な General 関係の「なら」との区別である。既定の事柄を表す「なら」と同じように条件と因果関係の接続詞以外に時間的な接続詞 kad (već)も対応する。

このような文の日本語とセルビア語の構造は、つぎのようである：

表 30. 原因・理由関係の一般的な事柄・セルビア語の文の構造と対応関係

	従属節	主節	使用域
日本語	動詞の過去形＋「なら」（動詞は完成相）	動詞の未来形、命令、要求、決心など	特定の時間に限定されていない、一般的な可能性として成立する事柄の場合一定時間後に成立が予定されている事柄で、命令、要求、決心どの意味を表す場合
セルビア語	因果関係の接続詞 pošto (već)、時間的な接続詞 kad (već), 条件の接続詞, ako(već)＋動詞の過去形	(onda) ＋動詞の未来形、命令、要求、決心など	特定の時間に限定されていない、一般的な可能性として成立する事柄の場合

一般的な事柄を表す「なら」は、時間的な意味とともに原因・理由の意味を表すことが出来る。多くの用例の場合、時間的な意味と原因・理由の意味が交差している。一般的な事柄の「なら」はセルビア語にはよく条件の接続詞 ako で訳されるが、この場合の ako は仮定的な事柄ではなく、事実的な関係を表しているので、条件よりも時間か原因・理由を示しているのである。

3.6.3.3 まとめ

収集した一般的な事柄の 112 例の内、64 例は時間的な General 関係と 48 例は原因・理由関係を表していた。

表 31. 一般的な事柄の各種類における「なら」の使用率

	時間				理由・原因
	Anterior	Posterior	Simultaneous	General	
なら				57%	43%

3.7 まとめ

本章では、日本語の「と・たら・なら・ば」の時間的、そして原因・理由の意味と用法を探ってきた。「なら」は、特殊な性格の故、「と・たら・ば」とは別に扱った。収集した用例の分析の結果、「と・たら・なら・ば」は、時間的な意味や原因・理由の意味を持つことが多く、「と・たら・なら・ば」の文がどの用法において、時間文、原因・理由文と交差するか、またどの用法においてセルビア語の時間文、原因・理由文に対応するかということを明らかにできたのではないかと思う。

つまり、既定の事柄、予定的な事柄、そして一般的に行われる事柄を表す「と・たら・ば」は、セルビア語の時間文か原因・理由文、または、時間的な副詞節に対応している。さらに、「と・たら・ば」の時間を表す文の中では、従属節と主節の動作の実現の関係の観点から、その意味には次のような種類が見られる。(1)主節の動作が従属節の動作の前に実現する Anterior 関係、(2)従属節の動作が実現した後、あるいは、実現し始めた後に主節の動作が実現する Posterior 関係、(3)両節の動作が同時に実現する Simultaneous 関係、(4)主節の動作と従属節の動作が規則的に一緒に行われている General 関係の四種類である。Anterior 関係は、既定の事柄を表す文にしか見られず、予定的な事柄には Posterior 関係となる。また General 関係は一般的な事柄を表す文の特徴である。予定的な事柄の場合、「と・たら・ば」には、時間的な副詞節の働きが見られる。

既定の事柄における時間的関係の種類には、「と」が最も多く対応していることが判明した。原因・理由文の場合も最も多く用いられたのは、「と」であるが、「たら」も高い割合で使われていた。

予定的な事柄においては、セルビア語の Posterior 関係に最も対応している形式は、「たら」であるが、「ば」、特に「と」の使用率との差は、既定の事柄の場合と違って、それほど大きくなかった。つまり、仮定的な意味領域に接近する事柄を表すには、「と・たら・ば」のどの条件形も高い使用率で用いられる。

一般的な事柄の場合は、セルビア語の Posterior 時間文に一番よく対応するのは「と」であるが、Simultaneous 時間文でも、「と」以外の形式は対応しないことが明らかになった。General 時間文についても、最も対応しているのは「と」であり、その次が「ば」である。原因・理由文の場合も、「と」の使用率が最も高く、「ば」がその次に多く使用されていた。

「なら」には、時間的な意味よりも原因・理由の意味を表す傾向が見られた。従属節の事態が真であると仮定し、主節において話者の判断や意見が述べられているという文のパターンがあるので、日本語とセルビア語の非条件的な意味の「なら」の使用域が主に同一であることが判明した。

では、なぜ日本語の時間，原因・理由の意味は条件形として文法化されているのだろうか？　それは、それぞれの条件形が時間、原因・理由の意味に付け加える特質（驚き、悔しさ、意外性，期待の意味合い）によると思われる。

以上で分析した内容と、セルビア語の時間文及び原因・理由文との共通点をまとめてみよう。

時間文の場合：

- 既定の事柄：「と・たら・ば」にはセルビア語の狭い意味での時間文が持つ三つの意味の種類ーAnterior , Posterior, Simultaneousーが見られる
- 予定的な事柄：「と・たら・ば」にはセルビア語の時間文の Posterior の意味が見られる。Time measurement の接続詞も対応する。
- 一般的な事柄：「と・たら・ば」にはセルビア語の時間文の Posterior の意味が見られる。

「と」には Simultaneous の意味が見られる。

「と・なら・ば」には General の意味が見られる。

原因・理由文の場合：

- 既定の事柄：「と・たら・なら」には原因・理由の意味が見られる。
- 予定的な事柄：「なら」には原因・理由の意味が見られる。
- 一般的な事柄：「と・たら・なら・ば」には原因・理由の意味が見られる。

次に、「と・たら・なら・ば」とセルビア語の時間文及び原因・理由文との異なる点をまとめてみよう。

時間文の場合：

- 既定の事柄：「なら」には時間的な意味が見られない。

「と・ば・たら」には Time measurement の接続詞は対応しない。

「ば」の Anterior 意味においては pre nego/no što, pošto, の接続詞は対応しない。

- 予定的な事柄：「なら」には時間的な意味が見られない。

  「と・たら・ば」は Anterior と Simultaneous 関係は表せない。

- 一般的な事柄：「と・たら・なら・ば」は Anterior 関係は表せない。

  「たら・なら・ば」には Simultaneous の意味はない。

- すべての事柄：セルビア語の時間文はただ従属節と主節の先行関係を表しているのに対して、日本語の既定・予定・一般的な事柄で使われている条件形はそれ以上の意味を持っている（発見、驚き、悔しさなど）。このような意味をセルビア語で表すために、ほかの、副詞のような言語的手段を使用しなければならない。

  日本語の「と・ば・たら」が表す時間的な意味のスケールは、セルビア語より狭いと判明したが、以上述べたように、時間以外の特別の意味を内在させている。

原因・理由文の場合：

- 既定の事柄：「ば」には原因・理由の意味が見られない。
- 予定的な事柄：「と・たら・ば」は原因・理由の意味が表せない。
- 既定・一般的な事柄：日本語のこのような事柄で使われている「と・たら・ば」は Immediate 関係、そして最低限の条件の意味の含みがあるのに対して、セルビア語の原因・理由文は、ただ従属節と主節の原因・理由関係を表しているだけである。Immediate 関係、また最低限の条件の意味を表すには、ほかの言語的な手段も加えなければならない。

時間、そして原因・理由の意味を表す「と・たら・なら・ば」の条件観点からの扱う従来の捉え方が、セルビア語を母語とする日本語学習者の「と・たら・なら・ば」の意味と用法の理解と習得を妨げていると思われる。これまでの分析から、既定の事柄、非仮定の予定的な事柄、そして一般的な事柄を表す「と・たら・なら・ば」は、時間文、あるいは、原因・理由文の観点から分析し、導入したほうが日本語の習得に効果的ではないかと思われる。

第4章
「と・たら・なら・ば」の仮定的な意味と用法
—セルビア語のレアルな条件、ポテンシャルな条件と非レアルな条件との対照を通じて

4.1 はじめに

本章では、「と・たら・なら・ば」が表すさまざまな仮定的な意味の分析を行う。セルビア語のレアルな条件、ポテンシャルな条件、非レアルな条件と対照し、「と・たら・なら・ば」はどのような条件の種類を表すことができるのかを調べる。さらに、各条件の種類において「と・たら・なら・ば」の用法を従属節のモダリティ、主節のモダリティ及び従属節と主節の事柄的な関係という三つの観点から分析し、四形式の使用傾向と特徴を調べる。

なお、本章の「条件」は、仮定的な意味を持つ文に限るということを改めて述べておく。

4.2 先行研究

仮定的な条件は、まだ現実に成立しておらず、成立するかどうかも明らかでない事柄を表すため、これに属する文は、複雑なモーダルな性格を持っている。つまり、話し手が従属節の内容を仮定として差し出し、その条件の成立に対して取りたい行動や、期待や意志などを差し出して、自分の態度を示している。

高橋ほか（2005）は仮定的な事柄の二つの種類を挙げている。それは、「仮定的な条件」と「反現実の仮定的な条件」である。「仮定的な条件」は、「成立するかどうかまだわからないのだが、成立するかもしれないし、成立しないかもしれない条件」としている。一方、「反現実の仮定的な条件」は、「現実にはないのに、かりに、あることとして差し出す条件」と説明している。

本研究でも、高橋ほか(2005)の説明と同様の理由から、「反現実の仮定的な条件」をほかの条件の種類と区別し、非レアルな条件として扱うことにする。

一方、ここで注目したい点は、高橋ほか(2005)の分類で条件の現実及び実現性との関係からいっても、この二つしかない条件の種類（「仮定条件」及び「反現実の仮定的な条件」）が分別されたことである。「反現実の仮定的な条件」の現実・実現性との関係は、明らかであるが、「仮定条件」と現実・実現性との関係は明らかでないことに理由があると考えられる。つまり、「仮定条件」の中に、成立する可能性の高い条件、成立する可能性の低い条件、また成立する可能性が半分半分である条件などが見られる。セルビア語の場合は、仮定的な事柄と現実・実現性との関係は条件を分析する際に重要な基準になっている。しかし、日本語については、この「仮定条件」と現実・実現性とのさまざまな関係を分析し、「と・たら・なら・ば」の使用と関連付ける研究はあまり多く見られない。

先行研究で以上述べたような問題を扱っている研究は定延（2006）の条件と環境とのインタラクションについての考察と和佐（2006）の日本とのスペイン語の対照分析が挙げられる。

定延（2006）によると、環境とのインタラクションという観点は、本研究の序章ですでに考察してきた Realis/Irrealis 領域と関連がある。この観点は、二つの考えから構成されているという。一つ目は、客観的にすでに現実となっている状況を話し手がそれを承知していないから条件節として表現される。「昨日そっちで雪が降ったのなら」という認識的条件文の例を挙げている。「環境とのインタラクション」という概念を構成する二つ目の考えは、「話し手は、環境の中に身体を置き、環境に働きかけ、また環境から働きかけられている。この環境とのインタラクション（総合作用）の中で、話し手の認識は環境に誘導される。環境の誘導からかけ離れたところを話し手の認識が暴走することは一般的ではない」と定延（2006）が言う。つまり、「話し手の認識を重視しながらと同時に「過去や現在はふつう、確定した現実である。未来はふつう、『不確定』で『非現実』で『仮定』される」という考えを維持できるという。

定延(2006)はこのように条件の現実とのインタラクションについて論じているのだが、「仮定された未来」の実現性、つまり条件の仮定の度合いについて言及していない。

和佐（2006）の日本語とスペイン語の対照分析で、スペイン語には過去や現在の事実に反する反事実条件文がある一方で、未来の「事実」（話し手が「未来は必ずこうなる」と確信しているもの）に反する反事実条件文はないことが指摘されている。ス

ペイン語に存在する三種類の *si* 条件文の前件命題は、いずれも Irrealis の領域に属し、話し手の「仮定性（hipoteticidad）」を表すという点では共通しており、話し手が前件命題の実現可能性をどのように捉えるかということが叙法と時制によって区別されているという。

セルビア語についても同じようなことが言える。Stanojčić, Popović, Micić (1989)によると、条件文で使われている接続詞、叙法と時制によって、条件の実現性が表されている。条件文の主節にはよく叙法の接続法か第二未来形が使用される。しかし、定延(2006)と違って、仮定されるのは、未来だけではなく、現在も過去も仮定されることが出来る。

接続法（条件法とも呼ばれている）は、話者のまだ成立していない事柄に対する態度を示している。その態度というのは、話者のその事柄の実現に対する判断を表している。つまり、

- 接続法で表されている事柄は、実現の可能性があるという判断
- 接続法で表されている事柄の実現への用意か願望があるという判断
- 接続法で表されている事柄の実現への意志があるという判断
- 接続法で表されている事柄の実現に関する条件があるという判断である。

セルビア語では、叙法は時制に、また時制は叙法に変えられる場合が多い。つまり、時制は叙法の意味で用いられることもあるし、叙法も時制の意味で用いられることもある。たとえば、接続法は、過去に行われた動作を表す役割を担うことがある。この場合の接続法は、発話時点より前に行われた、もしくは習慣として繰り返されていた動作を示しているので、narrative character, または qualificative character を持つ。たとえば、

(257) Budio bih [接続法] se rano i odmah prionuo [接続法] na prevođenje.
朝早く起きてすぐに翻訳に挑んだものだ。

これと同じように、現在形も接続法の役割と意味を持つことがある。

(258) Ako [接続詞] ga ostavimo [現在形] ovako, sigurno će opet počiniti [未来形] prestup.
このまま放っておけば、又犯罪を犯すに違いない。

次の文も用例 292 と同じ意味を持っている。

(259) Ako [接続詞] bismo ga ovako ostavili [接続法], sigurno bi opet počinio [接続法] prestup.
このまま放っておけば、又犯罪を犯すに違いない。

第二未来形は、まだ実現されていない事柄を示し、その事柄は未来に、つまり発話時点より後の時点で、実現されるであろうと話者が判断する事柄のことである。

第二未来形は次のようなことを表すことが出来る。

- 第二未来形で示されている事柄は、別の事柄の実現に対する条件になっている事柄である
- 第二未来形で示されている事柄は、ただ possible（可能）な事柄だけである。

第二未来形には叙法の意味以外に時制の意味も含まれている。このことは、条件文の接続詞のほかに時間的な接続詞 kad, čim, dok も使用できることによって示されている。

たとえば、

（260）Kad[接続詞] budem imao[第二未来形] vremena, ići ću[未来形] u bioskop.

時間が出来たら、映画館に行く。

つまり、セルビア語の場合は、話者や従属節の動作の主体の実現性に対する態度は、接続法と第二未来形の使用によって、さまざまな意味を持つことが出来る。確信、話者の信じていること、判断、予想、疑問などのような意味が見られる。

従属節と主節の事柄的な関係も、多様である。因果関係を表す文もあれば、条件の実現に対する方法、評価などの意味もある。

本章では、集めた用例をレアルな(未来と現在)条件、ポテンシャルな条件と非レアルな（現在と過去）条件に分けて、その中で「と・たら・なら・ば」はどのような言語的環境で使われているかを調べていきたいと思う。尚、日本語ではテンスが明確でないことが多いため、ある用例は、たとえばレアルな条件としても、ポテンシャルな条件としても解釈できるが、その場合は同じ用例を違う条件として使うことがある。それと同時に、従属節のモダリティに集中するとき、また主節のモダリティに集中するとき、あるいは従属節と主節の事柄的な関係に集中する時に同じ用例を繰り返して使う場合がある。

4.3 分析

収集した 1719 の日本語用例の内、1218 はレアルな条件（その内 777 はレアルな未来の条件、441 はレアルな現在の条件）、276 はポテンシャルな条件と 225 は非レアルな

条件（その内 57 は非レアルな現在の条件、168 は非レアルな過去の条件）を表していた。

まずは、各条件と「と・たら・なら・ば」の関係を従属節のモダリティの観点から見ていきたいと思う。

4. 3.1 条件構文の従属節のモダリティ

2. 4.1 で説明したように、従属節のモーダルな性格から条件文を次の四つのタイプに分けることにした。

(1) 話者か主体の意志・決意が表されている場合

話者か主体が取りたい行動や、意志性、つまり決意 が見られる事柄が条件として差し出されている場合である。したがって、従属節の述語は意志動作である。

(2) 話者か主体の期待・願望が表されている場合

話者か主体が条件の成立すること、あるいはしないことを望んで、それを条件として差し出している場合である。したがって、可能動詞、「~してくれる」が従属節の述語としてよく用いられる。

(3) 話者か主体の聞き手に対する働きかけが表されている場合

これに属する文は、話者か主体の願い事が成立するために必要な行動を取るように聞き手に求めている。

(4) 話者か主体の条件の成立可能性に対する判断が表されている場合

これに属する文は、条件が成立する可能性についての判断、話者か主体なりに予測した上でそれを条件として差し出している場合である。

各条件の種類ごとに従属節で表されているモーダルな意味とその条件形の使用に関する傾向を調べたいと思う。

4.3.1.1 レアルな未来の条件

（1）話者か主体の意志・決意が表されている場合

「と」

（261）しかし、作偽の必然性を追及していくと、その目的も分かりますよ。（点と線）

Ali, ako 接続詞 budeš istraživao 第二未来形 nameru, shvatićeš 未来形 i svrhu.

（262）一時は不愉快でも思い切って出して了わないと又同じ事が繰り替えされるよ。（流行感冒）

'Iako je tebi trenutno neprijatno, ako 接続詞 ne ispričaš 現在形 smelo, opet će se desiti 未来形 ista stvar.'

「たら」

（263）そう話したら、承知するだろうじゃないか」と勢いよく云って退けた。（手紙）

Ako 接続詞 ispričaš 現在形, mislim da će se složiti 未来形», rekao je čilo i povukao se.

（264）大丈夫よ、水をやったら又直ぐ生きッ返るから、（中略）」（痴人の愛）

U redu je, ako 接続詞 dam 現在形 vodu, odmah će oživeti 未来形 ponovo, (...)

（265）そんなことをしたら、一生後悔してしまう。（哀しい予感）

Ako 接続詞 uradiš 現在形 nešto tako, kajaćeš se 未来形 celog života.

（266）この上ダンスの衣装を買ってやったりしたらにっちもさっちも行かなくなります。（痴人の愛）

Sem toga, ako 接続詞 joj budem kupio 第二未来形 nošnju za ples, biće 未来形 gotovo.

「なら」

（267）無断で呼び出すなら、できないことではなかった。しかし、それでは岸本の云う解決にはならなかった。（冬の往来）

Ako 接続詞 ćemo da ga pozovemo 未来形 bez najave, nije da nije moglo 過去形. Ali, to nije donelo rešenje kakvo je hteo Kishimoto.

「ば」

（268）長崎まで行けば、フェレイラ師を知っていた信者も探し出せるかもしれない。（沈黙）

Ako 接続詞 budeš otišao 第二未来形 do Nagasakija, možda češ moći 未来形 da nađeš nekoga ko je poznavao sveštenika Fereiru.

（269）この通りのコースを行き、宿を訪ねれば、必ず会える。（哀しい予感）

Ako 接続詞 ideš 現在形 ovim putem, i posetiš prenoćište, sigurno ćete moći 未来形 da se vidite.

（270）その辺のところは、川添さんに確かめればはっきりするでしょう。（都市の遺言）

Ako 接続詞 to proveriš 現在形 sa Kavazoeom, verovatno će se razjasniti 未来形.

（271）「とにかく、お金を振り込まねば、品物の動きがぱったりです」（黒い雨）

"U svakom slučaju, ako 接続詞 ne budete uplatili 第二未来形 novac, roba nimalo neće biti 未来形 u opticaju".

（272）こんなことをいえば、相手の気持ちを傷付けるから・・・（娘への）

Ako 接続詞 budem rekla 第二未来形 nešto ovako, povrediću 未来形 njegova osećanja...

（273）然し手紙では若し自分の思っていることをどんどん書けば先方を尚恐がらすだけだと思うのだ。（佐々木の場合）

Međutim, što se pisma tiče, mislim da ćeš samo uplašiti 未来形 primaoca ako 接続詞 nastaviš 現在形 da pišeš ono što misliš.

（2）話者か主体の期待・願望が表されている場合

「たら」

（274）無事に帰りつけたら、この体験は、ぜひとも記録しておく価値がある。（砂の女）

Ako 接続詞 se budem vratio 第二未来形 bezbedno, biće 未来形 stvarno vredno da zabeležim ovo iskustvo.

（275）そうして、もし万一にも国に帰れる日があったら、一人ももれなく日本へかえって、共に再建のために働こう。（ビルマの竪琴）

A onda, ako 接続詞 bi došao 第二未来形 dan kada bismo mogli da se vratimo u domovinu, vratimo se svi do jednog i radimo 命令形 zajedno na obnovi zemlje.

「なら」

（276）もちろんぼくは役人ですから自分の地位を高めるためなら他人をだしぬいてでも点数稼ぎをやりたいと思います。（パニック）

Naravno, pošto sam ja državni službenik, želeo bih 接続法 da zaradim poene makar i na prevaru, samo da 接続詞 dobijem 現在形 viši položaj.

「ば」

（277）このまま健康さえ上手くいけば、けっこう沢山小説が書けそうです。（哀しい予感）

Ako 接続詞 me samo zdravlje posluži 現在形, čini mi se da ću moći 未来形 da napišem prilično mnogo romana.

（278）「お前さん達から進めて貰えれば、これに越したことはねい。・・・」（秋風）

"Ako 接続詞 vi budete to unapredili 第二未来形, to bi bilo 接続法 najbolje...."

（3）話者か主体の聞き手に対する働きかけが表されている場合

「と」

（279）「お前はKの所で待っているのだ。なるべく落ちついていないと見っともないよ」（痴情）

"Ti čekaj kod K-a. Ako 接続詞 se što više ne smiriš 現在形, biće 未来形 sramota".

「たら」

（280）「たき火なんてしたら怒られるわよ」（TUGUMI）

"Ako 接続詞 budeš zapalio 第二未来形 vatru, bićeš 未来形 izgrđen."

（281）「だってお前、今この金を出しちまったら、直ぐに晦日に差支えるのが分かっていそうなもんじゃないか」（痴人の愛）

"Jer, ako 接続詞 sada budeš uzela 第二未来形 ovaj novac, očigledno će biti 未来形 nezgodno na poslednji dan ove godine".

（282）「だめだめ、一とまわりしたら、またすぐモッコがやってくるんですから・・・」（砂の女）

"Ne možeš, ako 接続詞 obiđeš 現在形, opet će doći 未来形 Mokko odmah..."

「なら」

（283）武士は百姓たちを一箇所に集めて、もしすべてを白状しないならば人質をとると通達しました。（沈黙）

Ratnik je okupio seljake na jednom mestu i preneo da će uzeti 未来形 nekoga za taoca ako 接続詞 ne ispovede 現在形 sve.

「ば」

（284）「こんなことをすれば、身の破滅となる」（少年死刑囚）

"Ako 接続詞 budeš uradio 第二未来形 nešto ovako, upropastićeš 未来形 svoj život".

(4) 話者か主体の条件の成立可能性に対する判断が表されている場合

「と」

(285) 「これでペンションが経営不振でさ、一家四人が白骨になったりすると かなしいけどな。」 (TUGUMI)

Biće 未来形 tužno ako 接続詞 zbog loših prilika sa pansionom, četvoročlana porodica propadne 現在形.

「たら」

(286) もしも其志子がそうなられたら、この家庭に託した私のあらゆる希望はたちまち滑稽な空想になってしまう。(結婚の生態)

Ako 接続詞 tako bude 現在形 sa Toshiko, sve moje nade koje sam polagao u ovaj dom će postati 未来形 samo komična iluzija.

「なら」

(287) 「だけどおふくろがね、殺人犯として行夫ちゃんがカンゴクへ入れられるんなら、私は行夫ちゃんを殺してそれから死にます、なんて警察の人の前で喚いたもんだから、今はずっと見張りがついてる」(太郎物語)

"Ali majka je viknula, ako 接続詞 bace 現在形 Yukia u zatvor kao ubicu, da će ga ubiti 未来形 i potom izvršiti samoubistvo, zato su sada stražari stalno oko nje."

「ば」

(288) ガルペがもし首をふれば、あの三人の信徒たちはこの入江に石のように放りこまれる。(沈黙)

Ako 接続詞 Garpe bude vrteo 第二未来形 glavom, ta tri vernika će biti bačena 未来形 u ovu uvalu kao kamen.

(289) しかし若し世の中へ助けだされれば、私はまたもや悪事を重ねずにはいられないであろう。(少年死刑囚)

Ali ako 接続詞 me budu pomogli 第二未来形 u svetu, verovatno neću moći 未来形 a da ne ponovim zločin.

4.3.1.2 レアルな現在の条件

（1）話者か主体の意志・決意が表されている場合

「と」

（290）その時俺は此奴は生かして置くとその内にきっと他に行ってこの調子でしゃべるなと云う気がしたのだ。（赤西蠣太）

Tada sam osetio da, da 接続詞 ga ostavim 現在形 u životu , uskoro bi u ovakvom stanju otišao 接続法 negde i ispričao.

「なら」

（291）「それで、せっかく運動をやるなら、オリンピックぐらいになんとか出られないの」（太郎物語）

“Onda, kad 接続詞 se već bavi 現在形 sportom, zar ne bi mogao 接続法 nekako da učestvuješ na Olimpijadi?”

「ば」

（292）「その辺のところは、川添さんに確かめればはっきりするでしょう。」（都市の遺言）

Ako 接続詞 to proveriš 現在形 sa Kavazoeom, verovatno će se razjasniti 未来形.

（2）話者か主体の期待・願望が表されている場合

「たら」

（293）フン先生をそんなにたすけたかったら、身代りにあなたが牢屋にはいればよろしい。（ブンとフン）

Ako 接続詞 toliko želiš 現在形 da spaseš gospodina Fun-a, možeš 現在形 ti da ideš u zatvor umesto njega.

「なら」

（294）知ってるなら尚いい。（好人物の夫婦）

Ako 接続詞 znaš 現在形, tim je 現在形 bolje.

「ば」

（295）彼等が幸福であればそれでいいのだ。（草の花）

Ako 接続詞 su 現在形 oni srećni, tako je 現在形 dobro.

(3) 話者か主体の聞き手に対する働きかけが表されている場合

「と」

(296) みなさんのなかに、刑務所のくさい飯をくった経験のあるひとがいると、はなしは楽なのだが、(下略)。(ブンとフン)

Ako 接続詞 među vama ima 現在形 nekoga ko je jeo smrdljivu zatvorsku hranu, lako mi je 現在形 da pričam.

「たら」

(297) ・・・非常時中の超非常時ですから、取り敢えず宇部炭鉱へ誰か派遣されたらいかがです。今、すぐに派遣されたら、夕方までには炭鉱へ着かれるでしょう。(黒い雨)

Pošto je ovo vanredna situacija nad vanrednim situacijama, kako bi bilo da odmah nekoga pošaljete u rudnik? Ako 接続詞 ga sad odmah pošaljete 現在形, verovatno će stići 未来形 tamo do večeri.

「なら」

(298)「分るなら言ってごらんなさい」(雪国)

"Ako 接続詞 znaš 現在形, reci 命令形."

「ば」

(299) 「だって、君が来ればいっぺんですむんだからさ。」(満月)

"Ali, ako 接続詞 ti dođeš 現在形, završićemo 未来形 odjednom."

(4) 話者か主体の条件の成立可能性に対する判断が表されている場合

「と」

(300) せっかく呼ばれたのに都合が悪いと申し訳ないので、ピンチヒッターでよければ私の代わりにさしむけるわ。(都市の遺言)

Nema smisla ako 接続詞 mi ne odgovara 現在形 kad sam već pozvana, pa ću poslati 未来形 pinch hittera ako je to u redu.

「たら」

(301) これが世間に知れたら、重松夫妻は原爆病の養女が重体になったのに、まだ放ったらして置いたと曲解されるだろう。(黒い雨)

Ako 接続詞 se ovo pročuje 現在形 u javnosti, pogrešno će biti predstavljeno 未来形 kako bračni par Shigematsu i dalje ignoriše da im je pastorka u teškom stanju zbog atomske bolesti.

「なら」

(302)「お袋のことで気にさわったんなら、謝るよ、な。」(結婚式)

"Ako 接続詞 se ljutiš 現在形 na moju majku, ja se izvinjavam 現在形. "

(303) もし熊谷と関係があるなら、無論夏から始まったことではない。(痴人の愛)

Ako 接続詞 je 現在形 to vezano sa Kumagayom, naravno to nije počelo 過去形 od leta.

(304) 君のうちに財産があるなら、今のうちに能く始末をつけてもらって置かないと不快と思うがね。(こころ)

Ako 接続詞 vi imate 現在形 imovinu, mislim 現在形 da će biti loše ako to ne raščistite.

「ば」

(305) 神を信じていようといまいと、愛してさえいれば問題にならないのじゃありませんかしら？(草の花)

Verovao u Boga ili ne, zar ne bi trebalo da se ne stvara 現在形 problem samo ako 接続詞 se volite 現在形?

4.3.1.3 ポテンシャルな条件

(1) 話者か主体の意志・決意が表されている場合

「と」

(306) しかし、作為の必然性を追求していくと、その目的もわかりますよ。(点と線)

Ali, ako 接続詞 bi istraživala 接続法 nameru, shvatila bi 接続法 i svrhu.

「たら」

(307) 兵隊たちのもっていた楽器をあつめたら、面白い博物館ができると思いますね。(ビルマの竪琴)

Kad 接続詞 bismo sakupili 接続法 instrumente koje su imali vojnici, mislim da bi nastao 接続法 zanimljiv muzej.

「なら」

(308) 会って話を聞くつもりなら、これからつれて行ってあげようか。(エディプスの恋人)

Ako 接続詞 imaš 現在形 nameru da se vidiš i da čuješ šta ima da kaže, hoćeš 現在形 da je povedem sada?

「ば」

（309）0354 に根気よく、‘張込み’をつづけていれば、パートナーを捕捉できるのではないか。（都市の遺言）

Kad 接続詞 bismo nastavili 接続法 strpljivo da motrimo u 0354, uspeli bismo 接続法 da uhvatimo saučesnika.

（2）話者か主体の期待・願望が表されている場合

「と」

（310）どうでしょう、もっと正直に話して戴けると助かるのですが。（冬の旅）

Kad 接続詞 bi pričala 接続法 iskrenije, pomoglo bi 接続法 mi.

「たら」

（311）もし君が来てくれたら嬉しい。（草の花）

Kad 接続詞 bi ti došla 接続法, bio bih 接続法 srećan.

「なら」

（312）あの原稿さえ戻して貰えるならば私は慎んでいかなる刑にも服そう。（結婚の生態）

Kad 接続詞 bi mi samo vratili 接続法 onaj tekst, ja bih se povinovao 接続法 svakoj kazni.

「ば」

（313）自分というものに満足し、愛していることに満足している人たちが、沢山いればいいのだ。（草の花）

Bilo bi 接続法 lepo da 接続詞 ima 現在形 mnogo ljudi koji su zadovoljni sobom, koji su zadovoljni onim što vole.

（3）話者か主体の聞き手に対する働きかけが表されている場合

「と」

（314）お役所からの委任状を出して頂けませんでしょうか。そうしますと、今すぐにも宇部へ行って交渉して参ります。（黒い雨）

Da li biste mi izdali ovlašćenje? Ako 接続詞 biste mi izdali 接続法, odmah bih išao 接続法 u Ube da pregovaram.

「たら」

（315）「そんなことをしたら、また仕事が殖えるでしょうが」（黒い雨）

“Ako 接続詞 bi uradio 接続法 tako nešto, verovatno bi ti se opet uvećao 接続法 posao. “

「なら」

(316) 「日記を見せてくれるなら、寄ってもいいね。」（雪国）

"Ako 接続詞 bi mi pokazala 接続法 dnevnik, mogao bih 接続法 da svratim. "

(4) 話者か主体の条件の成立可能性に対する判断が表されている場合

「と」

(317) 彼女はワープロの手紙で、口実を設けては父親に送金を頼んでいたようだ。とやかく訊かれると都合が悪いので、めったに電話はかけなかった。（女子大生が消えた）

Ona je izgleda pismom koje je otkucala na word procesoru izmislila izgovor i tražila od oca da joj pošalje novac. Pošto bi bilo nezgodno ako 接続詞 bi je o tome pitao 接続法, skoro nikada nije telefonirala 過去形.

「たら」

(318)「お父さんの部屋つきの事務員に、僕がどうかしたら、お父さんがみっともなくて、もの笑いじゃありませんか」(山の音)

"Kad 接続詞 bih uradio 接続法 nešto službenici mog oca koja ima svoju sobu, mog oca bi bilo 接続法 sramota i ispao bi 接続法 smešan."

「なら」

(319)「熱はあがったけれどぼくは先生はなんともないと思うなあ。ああして寝ていらしても、もし悪いなら苦しむはずだがなあ」ともっぱら否定する。(父)

"Mislim da je učitelj dobro iako je imao temperaturu. Spava, ali, kad 接続詞 mu ne bi bilo 接続法 dobro, trebalo bi 接続法 da se muči" rekao je i negirao isključivo.

(320) もしそれが詐りでなかったならば(実際それは詐りとは思えなかったが)、今までの奥さんの訴えは感傷をもてあそぶためにとくに私を相手に拵えた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかった。（こころ）

Kad 接続詞 to ne bi bilo 接続法 neistina (stvarno nisam mogao da mislim da je to neistina), ne bi bilo 接続法 nemoguće da shvatim da su žalbe koje je žena upućivala do sada bile nepristojna ženska igra baš protiv mene.

「ば」

(321) わたくしのような平凡な女が、もしあの方と一緒になれば、お互いに不幸になるだけだと一途(いちず)に考えておりました。（草の花）

Mislila sam, kad 接続詞 bi obična žena kao ja bila 接続法 sa njim, samo bismo 接続法 postali nesrećni.

4.3.1.4 非レアルな現在の条件

(1) 話者か主体の意志・決意が表されている場合

「たら」

(322) もし彼らが大勢でやってきたら、つぐみの計画はだいなしになっただろう。(TUGUMI)

Da 接続詞 je došlo 過去形 njih puno, plan Tsugumi bi propao 接続法.

「なら」

(323) お君さんのように何もかも捨てる情熱があったならば、こんなに一人で苦しみはしないと思う。(放浪記)

Da 接続詞 sam imala 過去形 strast kao ti da sve odbacim, mislim da se ne bih ovako mučila 接続法.

(2) 話者か主体の期待・願望が表されている場合

「たら」

(324) そうして、本当に忘れてしまってすっきりできたら最高なのにと思った。(哀しい予感)

Mislila sam da bi bilo 接続法 odlično kad 接続詞 bih stvarno zaboravila 接続法 i kad bih mogla 接続法 da osetim osveženje.

「なら」

(325) これがお前の学資になるなら、今すぐにでも遣るが剥げた屏風一枚で大学を卒業するわけにも行かずな。(門)

Da 接続詞 je 現在形 ovo dovoljno tvoju školarinu, odmah bih ti poslao 接続法. Ali, mislim da od jednog poderanog paravana ne može da se završi fakultet.

「ば」

(326) 「貴方がそんな事をしないとはっきり云って下されば少し位淋しくてもこの間から旅行はしたがっていらしたんだから我慢してお留守しているんですけど」(好人物の夫婦)

Da 接続詞 kažete 現在形 da to nećete da radite, on bi istrpeo 接続法 van kuće iako je usamljen, pošto je ionako želeo da ide na putovanje.

（4）話者か主体の条件の成立可能性に対する判断が表されている場合

「たら」

（327）「わたし、男だったら殴っちゃうんだけど」（あすなろ物語）

Da[接続詞] sam[現在形] ja muško, udario bih[接続法] ga.

「なら」

（328）「金で解決ができるなら出来るだけの責任はとるけど、（下略）」　（雪国）

“Da[接続詞] mogu[現在形] da rešim novcem, preuzeo bih[接続法] odgovornost koliko je moguće,…”

（329）もし亡者に気分がありうるならば、―この時の余のそれとあまり懸け隔たってはいなかったろう。（思い出すことなど）

Da[接続詞] mrtvaci imaju[現在形] raspoloženje, ne bi bilo[接続法] mnogo daleko od mog u ovom trenutku.

「ば」

（330）生きていれば、可能性があったのに、いまはどんなに金を積んでも会えない。（都市の遺言）

Da[接続詞] je[現在形] živ, imalo bi[接続法] mogućnosti, ali sada, koliko god novca da skupim, ne mogu da ga vidim.

4.3.1.5 非レアルな過去の条件

（1）話者か主体の意志・決意が表されている場合

「たら」

（331）それさえわかったら、自分は、人間をこんなに恐怖し、また、必死のサーヴィスなどしなくて、すんだのでしょう。（人間失格）

Da[接続詞] sam to znao[過去形], ja se ne bih ovako bojao[接続法] ljudi i verovatno ne bih ovoliko bio[接続法] uslužan.

「なら」

（332）もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向って、研究的に働らき掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまったろう。（こころ）

Da[接続詞] je moja radoznalost i malo bila uperena u dušu Učitelja i da sam pokušao[過去形] da ga proučavam, nit saosećanja koja je povezivala dvoje ljudi bi verovatno tog trenutka neminovno pukla.[接続法]

「ば」

（333）もし帰ってきていればたちまち村中の話題になり、自分の耳にも入っていた筈だと思って彼はそう断言したのだが、それはおそらくその通りなのであろう。（エディプスの恋人）

Odbio je misleći da bi, da 接続詞 se vratio 過去形, odmah postao 接続法 tema širom sela i da bi to došlo do njegovih ušiju, i verovatno je tako.

（2）話者か主体の期待・願望が表されている場合

「たら」

（334）あれが無事に発表されていたら、今日までの私のどの作品にもまさる傑作であったかもしれない。（結婚の生態）

Da 接続詞 je to bez problema objavljeno 現在形, to bi možda bilo 接続法 remek delo koje bi nadmašilo sva moja dela do danas.

「なら」

（335）「どうもねえ、おれみたいな落第生が君に教えるなんて恥ずかしいじゃないか。合格したのならば、大きな顔をして教えてやれるんだがね。」（青春の）

Zar nije sramota da te podučavam ja koji sam propao na univezitetu? Da 接続詞 sam prošao 過去形, mogao sam 過去形 da te podučavam sav važan.

「ば」

（336）もう少し余裕があれば、自分はあの信徒たちにせめてみじかい祝福だけでも与えてやれた筈である。（沈黙）

Da 接続詞 sam imao 過去形 prostora, mogao sam 過去形 makar kratko da blagoslovim te vernike.

（4）話者か主体の条件の成立可能性に対する判断が表されている場合

「たら」

（337）フェータルなものだと若し聞いたら自分はどうだったろう。（城之崎にて）

Da 接続詞 sam čuo 過去形 da je fatalno, kako bih se osećao 接続法?

「なら」

（338）もし自分に本当の事をいう習慣がついていたなら、悪びれず、彼等の犯罪を父や母に訴える事ができたのかも知れませんが、（人間失格）

Da 接続詞 imam 現在形 običaj da kažem istinu, možda sam mogao 過去形 mirno da ih tužim zbog zločina ocu i majci.

（339）彼女は自分の五百円の金をもって入院すれば、命を全うすることが出来たかもしれないのにその金を使わなかった。（厚物咲）

Da 接続詞 je ostala 過去形 u bolnici ponevši svojih petsto jena, možda bi uspela 接続法 da spase život, ali taj novac nije iskoristila.

4.3.1.6 まとめ

条件構文の従属節のモダリティと「と・たら・なら・ば」の使用率を次の表 32. で表す。

表 32. 「と・たら・なら・ば」形式ごとの従属節のモダリティの使用率

		決意	願望	働きかけ	判断	合計
レアルな未来の条件	と	34/ 34.3%		42/ 42.4%	23/ 23.2%	99/ 100%
	たら	21/ 11.1%	17/ 9%	83/ 44%	69/ 36.5%	189/ 100%
	なら	41/ 32.5%	6/ 4.8%	19/ 15.1%	60/ 47.6%	126/ 100%
	ば	107/ 29.5%	64/ 17.7%	77/ 21.2%	115/ 31.7%	363/ 100%
レアルな現在の条件	と	4/ 33.3%		3/ 25%	5/ 41.7%	12/ 100%
	たら	7/ 8.2%	15/ 17.6%	16/ 18.8%	47/ 55.3%	85/ 100%
	なら	12/ 4.8%	29/ 11.7%	22/ 8.8%	185/ 74.6%	248/ 100%
	ば	17/ 14.7%	23/ 19.8%	27/ 23.3%	49/ 42.2%	116/ 100%
ポテンシャルな条件	と	2/ 11.1%	6/ 33.3%	5/ 27.8%	5/ 27. 8%	18/ 100%
	たら	18/ 16.8%	25/ 23.4%	14/ 13.1%	50/ 46.7%	107/ 100%
	な	4/	16/	4/	18/	42/

	なら	4/ 9.5%	16/ 38.1%	4/ 9.5%	18/ 42. 9%	42/ 100%
	ば	39/ 36.4%	39/ 36.4%		29/ 27.1%	107/ 100%
非レアルな現在の条件	と					
	たら	3/ 20.0%	3/ 20.0%		9/ 60.0%	15/ 100%
	なら	3/ 10.0%	11/ 36.7%		16/ 53.3%	30/ 100%
	ば		4/ 33.3%		8/ 66.7%	12/ 100%
非レアルな過去の条件	と					
	たら	11/ 15.9%	15/ 21.7%		43/ 62.3%	69/ 100%
	なら	11/ 30.6%	11/ 30.6%		14/ 38.9%	36/ 100%
	ば	7/ 11.1%	7/ 11.1%		49/ 77.8%	63/ 100%

次は、各条件の種類においてどのような従属節が最も使用されていたかを表 33. で示す。

表 33. 従属節のモダリティごとの「と・たら・なら・ば」の使用率

		決意	願望	働きかけ	判断
レアルな未来の条件	と	34/ 16.7%		42/ 19.0%	23/ 8.6%
	たら	21/ 10.3%	17/ 19.8%	83/ 37.6%	69/ 25.8%
	なら	41/ 20.2%	6/ 7.0%	19/ 8.6%	60/ 22.5%
	ば	107/ 52.7%	64/ 74.4%	77/ 34.8%	115/ 43.1%

合計		203/	86/	221/	267/
777/		100%	100%	100%	100%
100%		203/	86/	221/	267/
		26.1%	11.1%	28.4%	34.4%
レアルな	と	4/		3/	5/
現在の条		10.0%		4.4%	1.7%
件	たら	7/	15/	16/	47/
		17.5%	22.4%	23.5%	30.6%
	なら	12/	29/	22/	185/
		30.0%	43.3%	32.4%	64.7%
	ば	17/	23/	27/	49/
		42.5%	34.3%	39. 7%	17.1%
合計		40/	67/	68/	286/
		100%	100%	100%	100%
461/		40/	67/	68/	286/
100%		8.7%	14.5%	14.8%	62.0%
ポテンシ	と	2/	6/	5/	5/
ャルな条		3.2%	7.0%	21.7%	4.9%
件	たら	18/	25/	14/	50/
		28.6%	29.1%	60.9%	49.0%
	なら	4/	16/	4/	18/
		6.3%	18.6%	17.4%	17.6%
	ば	39/	39/		29/
		61.9%	45.3%		28.4%
合計		63/	86/	23/	102/
		100%	100%	100%	100%
274/		63/	86/	23/	102/
100%		23.0%	31.4%	8.4%	37.2%
非レアル	と				
な現在の	たら	3/	3/		9/
条件		50.0%	16.7%		26.5%
	な	3/	11/		16/

	ら	50. 0%	61.1%		47.1%
	ば		4/ 22.2%		8/ 23.5%
合計 57/ 100%		6/ 100%	18/ 100%		34/ 100%
		6/ 10.5%	18/ 31.6%		34/ 59.6%
非レアルな過去の条件	と				
	たら	11/ 39.3%	15/ 45.5%		43/ 40.6%
	なら	11/ 39.3%	11/ 33.3%		14/ 13.2%
	ば	7/ 25.0%	7/ 21.2%		49/ 46.2%
合計 168/ 100%		28/ 100%	33/ 100%		106/ 100%
		28/ 16.7%	33/ 19.6%		106/ 63.1%

4.3.2 条件構文の主節のモダリティ

2.4.2. で説明したように、本研究では、文を

(1) 平叙文

(2) 判断文

(3) 決意文

(4) 依頼文

(5) 命令文

(6) 願望文

(7) 誘い掛け文

(8) 問いかけ文

(9) 疑念文

に整理し、主節のモダリティを分析することによって、各条件の種類における使用と「と・たら・なら・ば」との関連を調べていきたいと思う。

4.3.2.1 レアルな未来の条件

(1) 平叙文

「と」

(340) それが続くと、あの電信柱の電灯が雪の中になってしまうわ。(雪国)

Ako 接続詞 se nastavi 現在形 ovo, lampa će se naći 未来形 u snegu.

(341) その雑誌は有名な雑誌で、その雑誌に小説を出すと、小説家としての存在を世間に知られることになるのだ。(友情)

To je poznat časopis, ako 接続詞 u njemu objaviš 現在形 roman, postaćeš 未来形 poznat u javnosti kao pisac.

(342) 「おっと、あんまり大声でうたうと、 となりで寝てるおばあちゃんがおきちゃう。」(キッチン)

Hej, ako 接続詞 pevaš 現在形 previše glasno, probudićeš 未来形 baku koja spava u susednoj sobi.

(343) 疑問のままにしておくと落ち着かない。(人民は弱し官吏は強し)

Ako 接続詞 to ostaviš 現在形 kao nerešeno pitanje, nećeš se smiriti 未来形.

(344) このまま家へ帰ると、かれこれ女どもに説明する必要がある。(黒い雨)

Ako 接続詞 se ovako vratim 現在形 kući, biće potrebno 未来形 da puno objašnjavam ženama.

(345) きてもらわないと、ほんとにこまるのだ。(二十四の瞳)

Ako 接続詞 ne dođeš 現在形, zaista ću biti 未来形 u neprilici.

「たら」

(346) 「大丈夫よ、水をやったら又直ぐ生きッ返るから、(下略)」(痴人の愛)

"U redu je, ako 接続詞 dam 現在形 vodu, odmah će oživeti 未来形 ponovo, ..."

(347) 「だめだめ、一とまわりしたら、またすぐモッコがやってくるんですから・・・」(砂の女)

"Ne možeš, ako 接続詞 obiđeš 現在形, opet će doći 未来形 Mokko odmah..."

(348) あの箱に一つでも敵の弾丸があたったら、もうおしまいです。(ビルマの竪琴)

Ako 接続詞 makar jedan neprijateljski metak pogodi 現在形 onu kutiju, tu će biti 未来形 kraj.

（349）先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆んど価値のないものになります。（こころ）

Pošto je tu filozofiju izrodila Učiteljeva prošlost, ja je naglašavam. Ako 接続詞 razdvojimo 現在形 te dve stvari, one će za mene postati 未来形 skoro bezvredne.

（350）この上ダンスの衣装を買ってやったりしたらにっちもさっちも行かなくなります。（痴人の愛）

Sem toga, ako 接続詞 joj budem kupio 第二未来形 nošnju za ples, biće gotovo 未来形.

（351）母は来なかった。夏の海をたずねたりしたら、なつかしくて淋しくて泣いてしまうからいやだわと電話で言った。（ TUGUMI）

Majka nije došla. Rekla je, ako 接続詞 ode 現在形 na more leti, oseća se 現在形 nostalgično i usamljeno i da bi plače 接続法.

「なら」

（352）お父さんはお前たちのお母さんと結婚したなら、幸せになるだろうという予感があった。（娘への）

Tata je imao predosećaj, ako 接続詞 se oženi 現在形 vašom majkom, da će biti 未来形 srećan.

「ば」

（353）「雨が降れば娘が迎えに来てくれます。」（雪国）

Ako 接続詞 bude padala 第二未来形 kiša, devojka će doći 未来形 po nas.

（354）「とにかく、お金を振り込まねば、品物の動きがぱったりです」（黒い雨）

“U svakom slučaju, ako 接続詞 ne budete uplatili 第二未来形 novac, roba nimalo neće biti 未来形 u opticaju” .

（355）北へ北へと歩いていけば日本海へ出るのだ。（孤高の人）

Ako 接続詞 ideš 現在形 na sever, na sever, izaći ćeš 未来形 na Japansko more.

（356）「こんなことをすれば、身の破滅となる」（少年死刑囚）

“Ako 接続詞 budeš uradio 第二未来形 nešto ovako, upropastićeš 未来形 svoj život”.

（357）然し手紙では若し自分の思っていることをどんどん書けば先方を尚恐がらすだけだと思うのだ。（佐々木の場合）

Međutim, što se pisma tiče, mislim da ćeš samo uplašiti 未来形 primaoca ako 接続詞 nastaviš 現在形 da pišeš ono što misliš.

（358）「理屈を云えば、此方にも云い分はあるが、云い出せば、とどの詰りは裁判沙汰になるばかりだから、（下略）」（門）

“Ako kažem po logici, imam šta da kažem, ali ako 接続詞 budem počeo 第二未来形 da pričam, na kraju će doći 未来形 do suđenja, …”

（359）ガルペがもし首をふれば、あの三人の信徒たちはこの入江に石のように放りこまれる。（沈黙）

Ako 接続詞 Garpe bude vrteo 第二未来形 glavom, ta tri vernika će biti bačena 未来形 u ovu uvalu kao kamen.

（2）判断文

「と」

（360）「あそこのところを清書して出すと、先方で誤解するんじゃないでしょうか。」（黒い雨）

“Ako 接続詞 lepo prepišete 現在形 taj deo i izdate 現在形, mislim da će oni to pogrešno razumeti 未来形.”

（361）「そんなことを刑事さんに話すと、 美香に迷惑をかけるかもしれないとおもって、そのときは黙っていたのです。」 （都市の遺言）

“Ćutao sam tada jer sam mislio da ću napraviti 未来形 problem Miki ako 接続詞 to ispričam 現在形 policajcu.”

（362）「一方的なんだなあ。最初からぼくがきみに張りついていると声をかけないかもしれないから、少し離れて知らん顔をしていよう」 （都市の遺言）

“Jednostran, zar ne? Možda neće da proba 未来形 da priča s tobom ako 接続詞 ja budem 現在形 stalno uz tebe, pa ću zato biti malo dalje i praviću se da te ne primećujem.”

「たら」

（363）彼はその写真を机の前に飾っておいたら、きっといい脚本がかきたくなるだろうと思った。（友情）

On je mislio, ako 接続詞 ostavi 現在形 kao ukras tu ispred stola, da će sigurno poželeti 未来形 da napiše dobar scenario.

「なら」

（364）目に見える姿に、遺伝子がこのように明らかになるのなら、見えない気質、性質にも遺伝子は脈々と伝わっているはずである。（ふつうがえらい）

Ako 接続詞 će gen postati 未来形 jasan u obliku koji može da se vidi očima, trebalo bi 接続法 da se prenosi i u ćudi i osobinama koje ne mogu da se vide.

（365）「熱はあがったけれどぼくは先生はなんともないと思うなあ。ああして寝ていらしても、もし悪いなら苦しむはずだがなあ」ともっぱら否定する。（父）

“Mislim da je učitelj dobro, iako je imao temperaturu. Spava, ali, ako 接続詞 nije 現在形 dobro, trebalo bi 接続法 da se muči“ rekao je i negirao isključivo.

「ば」

（366）わたしも会いたいし、彼女の方でも、もしわたしが智広をつれて行けば喜ぶことでしょう。（エディプスの恋人）

Želim i ja da je vidim, a i ona će se obradovati 未来形 ako 接続詞 budem odveo 第二未来形 Tomohira.

（367）尤も賄（まかない）でも安くなければ、誰もこんな部屋に満足するものは無かろう。（破戒）

Ako 接続詞 ne bude 第二未来形 jeftino ni uz najveći popust, verovatno niko ne bi bio 第二未来形 zadovoljan ovakvom sobom.

（368）東京へでも行って誰方（どなた）か、よいお医者さまにでもつけば、あるいは治るのではないでしょうか。（花埋み）

Ako 接続詞 odeš u Tokio i nađeš 現在形 nekog dobrog lekara, mislim da ćeš se izlečiti 未来形.

（369）もっと前へ進めば、私の予期するあるものが、何時か眼の前に満足に現われて来るだろうと思った.（こころ）

Ako 接続詞 budem dalje napredovao 第二未来形, mislio sam da će se ono što očekujem nekad zadovoljno pojaviti 未来形 pred mojim očima.

（370）しかし若し世の中へ助けだされれば、私はまたもや悪事を重ねずにはいられないであろう。（少年死刑囚）

Ali ako 接続詞 me budu pomogli 第二未来形 u svetu, verovatno neću moći 未来形 a da ne ponovim zločin.

（371）だが、彼は、これらの人の感情的な反撥（はんぱつ）も、西欧の援助を具体的に示せば消えると信じていた。（コンスタンティノープルの陥落）

Ali, on je verovao da će nestati 未来形 protivljenje ovih ljudi ako 接続詞 konkretno pokaže 現在形 pomoć iz Zapadne Evrope.

（3）決意文

「と」

（372）やめぬと、刑務所に叩きこむぞ！（ブンとフン）

Ako 接続詞 ne prekineš 現在形, strpaću te 未来形 u zatvor.

（373）何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。（羅生門）

Šta si radila? Kaži! Ako 接続詞 ne kažeš 現在形、dobićeš 未来形 ovo!

「たら」

（374）「じゃあ、俺は大学受かったら家を出るよ」(哀しい予感)

"Pa, ako 接続詞 položim 現在形 prijemni ispit na fakultetu, otićiću 未来形 od kuće."

（375）それを、もし僕が死んだら君にあげる。（草の花）

To ću ti dati 未来形 ako 接続詞 ću umreti 未来形.

（376）もしあさっての朝までに、お前がそうしなかったら、もうすぐ、つかみ殺すぞ。(銀河鉄道の夜)

Ako 接続詞 do prekosutra ujutro ne uradiš 現在形 tako, još malo pa ću te uhvatiti i ubiti 未来形.

（377）一軒でも来なかったという家があったら、もう貴様もその時がおしまいだぞ。(銀河鉄道の夜)

Ako 接続詞 bude 現在形 makar jedna kuća koja nije došla, tada će i tebi biti 未来形 kraj.

「なら」

（378）親が賛成しないなら、二人でどこかへ行って、二人きりで暮らそうと言い出したのは、あたしでした。（事件）

Ja sam rekla da ćemo nas dvoje ići 未来形 negde da živimo sami ukoliko 接続詞 se roditelji ne slažu 現在形 sa nama.

（379）武士は百姓たちを一箇所に集めて、もしすべてを白状しないならば人質をとると通達しました。（沈黙）

Ratnik je okupio seljane na jednom mestu i preneo da će uzeti 未来形 nekoga za taoca ako 接続詞 ne ispovede 現在形 sve.

（400）「だけどおふくろがね、殺人犯として行夫ちゃんがカンゴクへ入れられるんなら、私は行夫ちゃんを殺してそれから死にます、なんて警察の人の前で喚いたもんだから、今はずっと見張りがついてる」(太郎物語)

"Ali majka je viknula, ako 接続詞 bace 現在形 Yukia u zatvor kao ubicu, da će ga ubiti 未来形 i potom izvršiti samoubistvo, zato su sada stražari stalno oko nje."

（401）彼女が土下座しろと云うなら、僕は喜んで土下座します。大地に額を擦りつけろと云うなら、大地に額を擦りつけます。（痴人の愛）

Ako 接続詞 ona kaže 現在形 da sednem i klanjam se na tlu, rado ću da se klanjam 未来形. Ako 接続詞 kaže 現在形 da trljam čelo o tle, trljaću 未来形 čelo o tle.

（402）もし柳井がそのことを口にするようなら、絶対に頑張ってやろう。（草の花）

Ako 接続詞 kaže 現在形 Yanai nešto o tome, trudiću 未来形 se apsolutno.

（403）世間の人たちが、生活と行動で悪を味わうなら、私は内界の悪に、できるだけ深く沈んでやろう。（金閣寺）

Ako 接続詞 ljudi na ovom svetu shvataju 現在形 zlo kroz život i postupke, tonuću 未来形 u unutrašnjem zlu što je dublje moguće.

「ば」

（404）「わしのために悪魔を呼びだしてくれれば、営業停止にはしない。どうだな？」（ブンとフン）

“Ako 接続詞 zbog mene pozoveš 現在形 đavola, neću stopirati 未来形 rad. Šta kažeš? “

(4) 依頼文

「たら」

（405）もし誰かが、「お宅は潰れたんじゃないのか」と訊いて来たら、とんでもない、と答えて下さい。（二十歳の原点）

Ako 接続詞 neko pita 現在形 da li je vaša prodavnica bankrotirala, odgovarajte 命令形 nikako.

「なら」

（406）何か仰ることがあるなら、ずんずん仰って下さい」（破戒）

Ako 接続詞 imate 現在形 nešto da kažete, recite 命令形 aktivno.

「ば」

（407）それでなければこの問題をここで切り上げてください。（こころ）

Ako 接続詞 nije 現在形 tako, onda ovde prekinite 命令形 sa tim pitanjem.

(5) 命令文

「たら」

(408)おかしいと感じたら、そこをよくさがせ。（人民は弱し官吏は強し）

Ako 接続詞 ti se učini 現在形 čudim, tu dobro pretraži 現在形.

（409）「自信を回復したかったら、腕を見るのよ。（中略）あさ眼がさめたときに何も見ないで、きれいな眼で、腕をこうのばしてためつすがめつ眺めるの。私はそれで十数年、亡命生活をしのいできたな。」（花終わる闇）

“Ako 接続詞 želiš 現在形 da opet imaš samopouzdanje, pogledaj 命令形 ruke. Kad ustaneš ujutru, nemoj ništa da gledaš, samo istegni ruke i samo ih pogledaj čistim očima. Tako sam preživela svoj život kao izbeglica 15, 16 godina.”

「なら」

（410）本を買うなら　本屋へお行き　（ブンとフン）

Ako 接続詞 ćeš kupovati 未来形 knjigu, idi 命令形 u knjižaru.

（411）髪(かみ)を刈(か)るなら　床屋(とこや)へお行き　（ブンとフン）

Ako 接続詞 ćeš da skratiš 未来形 kosu, idi 命令形 kod berberina.

「ば」

(412)ここから出たければブンを呼んで降服するよう説得なさい。（ブンとフン）

Ako 接続詞 želiš 現在形 odavde da izađeš, pozovi 命令形 Buna i ubedi ga da se preda.

(6) 願望文

「なら」

（413）もちろんぼくは役人ですから自分の地位を高めるためなら他人をだしぬいてでも点数稼(かせ)ぎをやりたいと思います。(パニック)

Naravno, pošto sam ja državni službenik, želeo bih 接続法 da zaradim poene makar i na prevaru, samo ako 接続詞 ću da dobijem 未来形 viši položaj.

(7) 誘い掛け文

「たら」

（414）そうして、もし万一にも国に帰れる日があったら、一人ももれなく日本へかえって、共に再建のために働こう。（ビルマの竪琴）

I, ako 接続詞 bude uprkos svemu došao 第二未来形 dan kada bismo mogli da se vratimo u domovinu, vratimo se svi do jednog i radimo 命令形 zajedno na obnovi zemlje.

(8) 問いかけ文

「たら」

（415）「病院から出してもらえなかったら、どうするの」（娘への）

Šta ćeš da radiš 未来形 ako 接続詞 te ne puste 現在形 iz bolnice?

(9) 疑念文

「たら」

（416）（しかし、おれが喋ったことを頼央が知ったら気を悪くするのじゃ）（エディプスの恋人）

Ako 接続詞 Yorio bude saznao 第二未来形 da sam pričao, da li će biti 未来形 neraspoložen?

「なら」

（417）ああこんな人にでもすがってみたならば、何とか、どうにか、自分の行く道が開けはしないかしら。（放浪記）

Ako 接続詞 se oslonim 現在形 na takvu osobu, možda će mi se nekako otvoriti 未来形 put kojim treba da idem.

「ば」

（418）もし、この冒険に成功すれば今の不安な不定な弱々しい自分を救う事が出来はしまいかと、はかない望を抱いたのである。（門）

Gajio sam uzaludnu nadu da ću možda uspeti 未来形 da spasem sebe ovako nesigurnog i slabog, ako 接続詞 mi ta avantura uspe 現在形.

4.3.2.2 レアルな現在の条件

(1) 平叙文

「と」

(419)ほとんどの生徒が下校してからでないと校庭では練習させてもらえない。

（エディプスの恋人）

Neće nam dozvoliti 未来形 da vežbamo u dvorištu ako 接続詞 svi đaci ne odu 現在形.

（420）焚火はKさんの言うように竈の焚口で燃えていた。S さんは、「きっと居ますよ。もしいなければ、消して置かないと悪いから、上がりましょうか」(焚火)

Vatra je gorela u ognjištu, kao što je rekao K. S (je rekao): “(On) je verovatno tu. Ako nije, uđimo jer neće biti 未来形 dobro ako 接続詞 ne ugasimo 現在形 vatru. “

「たら」

（421）「・・・砂ってやつは、そんなに生易しいものじゃないんだ！こんなことで、砂にさからえると思ったら、大間違いさ。」（砂の女）

“ ...pesak nije nešto tako prosto! Ako 接続詞 misliš 現在形 da možes da mu se protiviš, to je 現在形 velika greška“.

（422）フン先生をそんなにたすけたかったら、身代りにあなたが牢屋にはいればよろしい。（ブンとフン）

Ako 接続詞 toliko želiš 現在形 da spaseš gospodina Fun-a, možeš 現在形 ti da ideš u zatvor umesto njega.

「なら」

（423）砂の壁がけわしすぎるのなら、それをくずして、傾斜をゆるやかにしてやればいい。（砂の女）

Ako 接続詞 je 現在形 zid od peska previše strm, bilo bi 接続法 dobro da ga srušiš i napraviš tup nagib.

（424）大きな捜査機関を持ちながら、検察側が有罪を立証できなかったのなら、その責任を取るべきである。（事件）

Njegov način razmišljanja bio je takav da, ako 接続詞 tužilaštvo, koje ima veliku istražnu instituciju, nije 現在形 u stanju da dokaže krivicu, treba 現在形 za to da odgovara.

（425）結婚をすると同時に多くの女は良人と家庭以外のものに興味をうしない、自分を育てるための勉強にはまるで心が動かなくなるものである。其志子がもしそうなって行ったならば私の勢いこんだ結婚はあまりに平凡になってしまう。（結婚の生態）

Kad se udaju, većinu žena interesuju samo muž i porodica, i one će izgubiti želju da gaje sebe. Ako 接続詞 Toshiko postaje 現在形 takva, svadba koju baš želim biće 未来形 veoma obična.

（426）もし彼女が、私の椅子に生命を感じてくれたなら、ただの物質ではなく、一つの生き物として愛着を覚えてくれたなら、それだけでも、私は充分満足のでございます。（痴人の愛）

Ako 接続詞 se oseća 現在形 život u mojoj stolici, ako 接続詞 se oseća 現在形 raspoloženje, ne kao jedne materije nego kao jednog živog stvora, samo s tim ja sam 現在形 dovoljno zadovoljan.

（427）しかし、君が、童貞同志附合うつもりで附合うなら、まちがってるぜ。（金閣寺）

Međutim, ako 接続詞 misliš da smo 現在形 u društvu čednih momaka, to je 現在形 pogrešno.

（428）彼があの部屋に住んでいるのなら、女性と一緒に暮らしていることになる。（一瞬の夏）

Ako 接続詞 on stanuje 現在形 u toj sobi, to znači 現在形 da živi sa nekom ženom.

（429）もし彼が本当にトレーニングを再開したのなら、夕方の今頃というのはジムに行っていてもおかしくない時刻だったからだ。（一瞬の夏）

Ako 接続詞 je ponovo počeo 過去形 da trenira, onda ne bi bilo 接続法 čudno da je u ovo vreme uveče u teretani.

（430）もし熊谷と関係があるなら、無論夏から始まったことではない。（痴人の愛）

Ako 接続詞 je 現在形 to vezano sa Kumagayom, naravno to nije počelo 過去形 od leta.

（431）彼があくまでも完全否認を通したなら、捜査側はそれを突き崩す武器をもっていない。（都市の遺言）

Ako 接続詞 nastavlja 現在形 da poriče apsolutno do kraja, istražna strana nema 現在形 oružje da to razbije.

（432）美がたしかにそこに存在しているならば、私という存在は、美から疎外されたものなのだ。（金閣寺）

Ako 接続詞 lepota sigurno postoji 現在形 tu, moje postojanje je otuđeno 現在形 od lepote.

（433）これを殺人刀と呼ぶなら、趙州のそれは活人剣である。（金閣寺）

Ako 接続詞 ovo zoveš 現在形 mačem za ubijanje, Eishuov mač je 現在形 mač za oživljavanje.

「ば」

(434) ポケットがなければ金を入れるところもなくなる。（ブンとフン）

Ako 接続詞 nemaš 現在形 džep, nemaš 現在形 ni gde da staviš novac.

（435）溢れるほどに人が来るなんて思っていれば見当違いだ。（父）

Ako 接続詞 si mislila 過去形 da će ovde sve biti preplavljeno ljudima, pogrešno si procenila 過去形.

（436）「お前さん達から進めて貰えれば、これに越したことはねい。・・・」(秋風)

“Ako 接続詞 vi to unapređujete 現在形, to je 現在形 najbolje....”

（437）今、五時三十五分だからな、これから行けばちょうどいい(点と線)

Pošto je sada 5 i 35, biće 未来形 taman ako 接続詞 krenemo 現在形 sada.

（438）もしその事件が事実であれば「彼」自身が超能力者(エスパー)でないことは確定したも同様である。（エディプスの恋人）

Ako 接続詞 je 現在形 taj slučaj istinit, skoro da je time utvrđeno 現在形 da ‘on’ sam nije čovek sa natprirodnom moći.

(2) 判断文

「なら」

（439）しかし、新聞の報道の通り、内藤がやり直すという強い意志を持っているなら、かけてくる可能性もないではないだろう。（一瞬の夏）

Ali ako 接続詞 Naito ima 現在形 jaku želju, kao što pišu novine, da krene iz početka, neće biti 未来形 da nema mogućnosti da me pozove.

「ば」

（440）「線路づたいに行けば帰れないこともないだろう。」（黒い雨）

Ako 接続詞 pratiš 現在形 prugu, neće se dogoditi 未来形 da ne znaš da se vratiš.

(3) 決意文

「たら」

（441）言い過ぎだったら御免よ。（草の花）

Izvini 命令形 ako 接続詞 sam rekao 過去形 previse.

「なら」

（442）「お袋のことで気にさわったんなら、謝るよ。」（結婚式）

“Ako 接続詞 se ljutiš 現在形 na moju majku, ja se izvinjavam 現在形.’

（443）そんなハツ子でも、なるべく近くに住んでいてくれる方がいい。とにかく一本立ちで食っていけるなら、結構なことだと思うことにした。（事件）

Hacuko je takva, ali bilo bi bolje da živi što bliže kod nas. Odlučio sam da mislim da je 現在形 dovoljno ako 接続詞 može 現在形 sama da vodi život.

「ば」

（444）もし詳しい話が聞きたければ、幸い自分の知り合いによく鎌倉へ行く男があるから紹介してやろうと云った。（門）

Ako 接続詞 želiš 現在形 da čuješ detalje, srećom imam poznanika koji često ide u Kamakuru pa ću te upoznati 未来形, rekao je.

(4) 依頼文

「たら」

(445)そんな元気があるんだったら、私を歓ばせてよ。（二十歳の原点）

Ako 接続詞 imaš 現在形 toliko energije, razveseli me 命令形.

「なら」

（446）「嘘だと思うなら来て御覧」（変な音）

Ako 接続詞 misliš 現在形 da lažem, dođi 命令形.

（447）「つぐみちゃんも時間があるなら、ここにすわって海を見ておいで」（TUGUMI）

Tsugumi, ako 接続詞 imaš 現在形 vremena, sedi ovde i posmatraj 命令形 more.

(5) 命令文

「たら」

（448）つまらなかったら焼き捨ててくれたまえ。（草の花）

Ako 接続詞 ti je 現在形 dosadno, spali 命令形 to i baci.

「なら」

（449）分かるなら言ってごらんなさい。（雪国）

'Ako 接続詞 razumeš 現在形, reci 命令形.'

（450）若しそんあうまい事を前に云っておきながら行ったなら、出して了え。（流行感冒）

Ako 接続詞 je otišao 過去形 i rekao takve dobre stvari, ubaci 命令形 njega.

「ば」

（451）ここから出たければブンを呼んで降服するよう説得なさい。（ブンとフン）

Ako 接続詞 želiš 現在形 da izađeš odavde, pozovi 命令形 Buna i nagovori ga na kapitulaciju.

(6) 願望文

「なら」

（452）死ぬならば内地に帰って死にたい。（テニヤンの末日）

Želim 現在形 da se vratim u svoju zemlju da umrem, ako 接続詞 već umirem 現在形.

（453）もし僕より先に連絡がとれたなら、本人が教えるなと言っても、僕に知らせてほしいんだ。（哀しい予感）

Ako 接続詞 uspeš 現在形 da se javiš njoj pre mene, hoću 現在形 da me obavestiš iako ti ona kaže da mi ne pričaš.

(7) 誘い掛け文

「なら」

（454）会って話を聞くつもりなら、これからつれて行ってあげようか。（エディプスの恋人）

Ako 接続詞 imaš 現在形 nameru da se vidiš i da čuješ šta ima da kaže, hoćeš 現在形 da je povedem sada?

(8) 問いかけ文

「たら」

（455）そういうふうだったら僕が信仰を喪わなかったとでも言うのかい？　（草の花）

Ako 接続詞 je 現在形 tako, da li hoćeš da kažeš 未来形 da nisam izgubio veru?

「なら」

（456）蠅は腐敗を好むなら、まり子には腐敗がはじまっているのか？　（金閣寺）

Ako 接続詞 muve vole 現在形 trulež, da li je Mariko počela 過去形 da truli?

（457）法則が、こんな無謀な現われ方をするのなら、一体、何を信ずればいいと言うのか？（砂の女）

Ako 接続詞 se zakon javlja 現在形 ovako nerazumno, u šta uopšte mogu 現在形 da verujem?

「ば」

（458）「その代わり、ちゃんと産んだらご褒美に何を買ってくれる？」（結婚の生態）

Umesto toga, ako 接続詞 rodim 現在形, šta ćeš mi kupiti 未来形 za nagradu?

(9) 疑念文

「と」

（459）そうなると、もう一歩踏み込んで、美佳の腹の子は果たして城之内の胤かどうか。（死なれては困る）

Ako 接続詞 je 現在形 tako, onda, za korak dalje, da li je 現在形 dete u Mikinom stomaku uopšte Yonouchijevo?

「たら」

(460) 手ちがいが事務室にあるのだったら、アルバイトの報酬はやはり、はらってくれるのだろうか。（死者の奢り）

Ako 接続詞 ima 現在形 greške u kancelariji, hoće li mi uopšte platiti 未来形 za rad?

「なら」

（461）民間で手の出しようのない状態の問題ならば、政府がその試験所で研究をなすべきではないのか。（人民は弱し官吏は強し）

Ako 接続詞 obični građani ne mogu 現在形 da rade na tom pitanju, zar ne bi trebalo 接続法 vlada da vrši istraživanja u toj laboratoriji?

「ば」

（462）彼女がその超常現象を見ていればそれは彼女のお喋りのために「世にも不思議な出来ごと」として学校内にもっと噂が拡がっていていいのではなかろうか。（エディプスの恋人）

Ako 接続詞 je ona videla 過去形 tu natprirodnu pojavu, zar se to ne bi više proširilo 接続法 po školi kao "čudni događaji u svetu"?

4.3.2.3 ポテンシャルな条件

（1）平叙文

「と」

（463）どうでしょう、もっと正直に話して戴けると助かるのですが。（冬の旅）

Kad 接続詞 bi pričala 接続法 iskrenije, pomoglo bi 接続法 mi.

（464）その時俺は此奴は生かして置くとその内きっと他に行ってこの調子でしゃべるなと云う気がしたのだ（赤西蠣太）

Tada sam osetio da, da 接続詞 ga pustim 現在形 da živi, uskoro bi u ovakvom stanju otišao 接続法 negde i ispričao.

「たら」

（465）もし、このあいだの連中のように殺されたりしたら、わたしが疑われるわ。（エディプスの恋人）

Kad 接続詞 bi bio ubijen 接続法 kao oni ljudi prošlog puta, sumnjali bi 接続法 u mene.

（466）「今、もし、向こうの山に虹が出たら、奇跡が起こる。」（黒い雨）

"Kad 接続詞 bi se sada pojavila 接続法 duga na toj planini, desilo bi se 接続法 čudo."

「なら」

（467）彼が役人たちの誘惑に従うならば、それはガルベの生涯の挫折を意味した。（沈黙）

Kad 接続詞 bi Garbe pristao 接続法 da ga činovnici namame, to bi značilo 接続法 neuspeh u njegovom životu.

「ば」

（468）他人はみんな証人だ。それなのに、他人がいなければ、恥というものは生れて来ない。（金閣寺）

Drugi su svi svedoci. Uprkos tome, kad 接続詞 ne bi bilo 悦続報 drugih, ne bi se rodila 接続法 ni sramota.

（469）日本だって今よりせめて倍も米が高くなれば黙っていたって皆、過激派になる。（友情）

I kad 接続詞 bi u Japanu pirinač duplo poskupeo 接続法 svi bi postali 接続法 radikalni iako bi ćutali.

（470）私は川原に今行けば、本当に等がさっきの夢のように立っている気さえした。（ムーンライト）

Činilo mi se da kad 接続詞 bih otišla 接続法 sada na rečnu obalu, tamo bi zaista stajao 接続法 Hitoshi kao u snu koju sam malo pre sanjala.

（471）先生は私を離れれば不幸になるだけです。（こころ）

Kad 接続詞 bi me napustio 接続法, Učitelj bi samo bio 接続法 nesrećan.

（2）判断文

「と」

（472）近くに寄ると、その口の中へ吸いこまれてしまいそうな気がしたのだ。（ブンとフン）

Činilo mi se da bi me ta usta usisala 接続法 kad 接続詞 bih se približio 接続法.

「たら」

（473）とき子は何かの形で、貰った金の償いをしたげである。身体をもとめられたら、すすんで身をまかせそうだ。（高野詣）

Izgleda da Tokiko nekako kompenzuje za novac koji je uzela. Ako 接続詞 bi joj tražio 接続法 njeno telo, izgleda da bi se ona prepustila 接続法 dobrovoljno.

（474）そういうことがもしあったら、明日はもう君の顔を見るのもいやになるかも知れません。（雪国）

Kad 接続詞 bi se desilo 接続法 nešto tako, sutra možda više ne bih želeo 接続法 da vidim tvoje lice.

（475）今、そんな話をしたら第一当人がおどろくだろう。（友情）

Ako 接続詞 bi ispričala 接続法 takvu priču sada, prvo bi baš on bio 接続法 iznenadjen.

（476）証人さえいなかったら、地上から恥は根絶されるであろう。（金閣寺）

Kad 接続詞 samo ne bi bilo 接続法 očevidaca, sram bi bio istrebljen 接続法 sa zemlje.

（477）今の機を逸したら、永遠に人生は私を訪れぬだろう。（金閣寺）

Kad 接続詞 bih izgubio 接続法 ovu priliku, život me nikad ne bi posetio 接続法.

（478）カミソリで指を切ったら生々しい赤い血が流れるんだろう（二十歳の原点）

Kad 接続詞 bih posekao 接続法 prst brijačem, verovatno bi potekla 接続法 sveža, crvena krv.

（479）ここで降ろされでもしたら、早いところ他の車にでも拾われない限り、誰でも死んでしまうだろう。（若き数学者のアメリカ）

Ako 接続詞 bi bio izbačen 接続法 ovde, umro bi 接続法 svako, ukoliko ga neki drugi auto ne pokupi.

「なら」

（480）直ぐ一緒に出て他所で御馳走するなら、まだやれるかも知れないが。（小僧の神様）

Kad 接続詞 bi izašao sa mnom i častio 接続法 na drugim mestima, možda bih mogao 接続法 da nastavim dalje.

「ば」

（481）慈海の妻になれば、まず喰うに困るということはないだろう。（雁の寺）

Ako 接続詞 bih bila 接続法 Jikaijeva zena, ne bih imala 接続法 problema da jedem.

（482）この水嵩では、落ちたりすればたちまち流されてしまうだろう。（エディプスの恋人）

Na onolikoj vodi, kad 接続詞 bi pao 接続法, odmah bi ga odnela voda 接続法.

（483）それももし藤木が部をやめるようなことがあれば、僕と彼との間を繋ぐ糸はぷつんと切れてしまうだろう。（草の花）

Štavise, kad 接続詞 bi Fudjiki prekinuo 接続法 vannastavne aktivnosti, odjednom bi se prekinuo 接続法 konac koji nas vezuje.

（484）そりゃ安さんの計画が、口でいう通り旨く行けば、訳はないんでしょうが、段々考えると、なんだか少し当にならにような気がし出してね。（門）

Kada 接続詞 bi uspeo 接続法 Yasuov plan kako on priča, naravno ne bi imalo 接続法 problema, ali kada razmišljam dalje, osećam da taj plan nekako nije siguran.

(3) 決意文

「なら」

(485) もし怒って縁を切られたなら、これはもう仕方ないことだと覚悟していた。(満月)

Bio sam spreman da bih morao 接続法 da prihvatim kad 接続詞 bi se rastala 接続法 od mene.

(486) 本統を云ってよければ何時でも云う。嘘を云うのは嫌なんだ。お前がそれに堪えられるなら何時でも本統を云ってやる。(痴情)

Kad bih mogao da kažem istinu, rekao bih 接続法 kad god. Ne želim da kažem laž. Ako 接続詞 bi mogla 接続法 to da podneseš rekao bih 接続法 istinu kad god ti hoćeš.

「ば」

(487) ただほんとにその時だけ片棒担いでくれれば、あとは皆姉さんがするから。(こんなこと)

Ali kad 接続詞 bi stvarno samo tada pomogao 接続法, ostalo bi sve uradila 接続法 sestra.

(6) 願望文

「たら」

(488) せめて往来ででも会えたら会いたいと思い、「下略」(晩秋)

Želeo bih 接続法 da se vidimo i ako 接続詞 bismo se videli 接続法 makar na ulici (...)

「なら」

(489) もし、彼の日常生活の中で、次に述べるような状態が起こったなら、注意してほしい。(娘への)

Ako 接続詞 bi se u njegovom svakodnevnom životu dogodilo 接続法 ovakvo stanje, hoću 現在形 da paziš.

(7) 誘い掛け文

「なら」

(490) 会って話を聞くつもりなら、これからつれて行ってあげようか。(エディプスの恋人)

Ako 接続詞 bi hteo 接続法 da se vidiš i da čuješ šta ima da kaže, hoćeš 現在形 da je povedem sada?

(8) 問いかけ文

「なら」

(491) そんな僕が、一体どうしたならば、真に生きることが出来るだろうか。(草の花)

Šta bi trebalo 接続法 ja, ovakav, da radim da 接続詞 bih mogao 接続法 zaista da živim?

「ば」

(492) いるはずがない、という条件が消えれば、いたかもしれぬという条件が起こるのか?(点と線)

Ako 接続詞 bi nestao 接続法 uslov da sigurno nije tu, da li bi se rodio 接続法 uslov da je možda bio tu.

(9) 疑念文

「と」

(493) 喋ったことが頼央に知れると、恨まれるのでは。「エディプスの恋人」

Ako 接続詞 bi Yorihisa saznao 接続法 za to što si pričala, možda bi te mrzeo 接続法.

「たら」

(494) 私が自分の醜さを無に化するようなこういう考え方を、鶴川から教わったと云ったら、彼はどんな顔をするだろうか? (金閣寺)

Kako bi izgledao kada 接続詞 bih mu rekla 接続法 da sam od Curukava učila da prihvatim svoju ružnocu kao ništa 接続法?

(495) その位先生に忠実なあなたが急に居なくなったら、先生はどうなるんでしょう。(こころ)

Kad 接続詞 bi nestalo 接続法 tebe, koji si tako odan Učitelju, šta bi se s njim dogodilo 接続法?

(496) お父さんの部屋つきの事務員に、僕がどうかしたら、お父さんがみっともなくて、もの笑いじゃありませんか(山の音)

Kad 接続詞 bih uradio 接続法 nešto prema službenici mog oca koja ima svoju sobu, mog oca bi bilo sramota 接続法 i on bi bio smešan.

「なら」

(497) 大森へ行ってナオミの持ち物を捜索したなら、手紙か何か出て来はしないかと思ったからです。(痴人の愛)

To je zato što sam mislio da ako 接続詞 bih otišao u Omori i pretražio 接続法 Naomine stvari, možda bi se pojavilo 接続法 pismo ili nešto slično.

「ば」

(498) もし、この冒険に成功すれば今の不安な不定な弱々しい自分を救う事が出来はしまいかと、はかない望を抱いたのである。(門)

Gajio sam uzaludnu nadu da bih možda uspeo 接続法 da spasem sebe ovako nesigurnog i slabog, ako 接続詞 bi mi ta avantura uspela 接続法.

4.3.2.4 非レアルな現在の条件

(1) 平叙文

「たら」

(499) そうでなかったら、毎日がはなはだ不安なものになってしまう。(人民は弱し官吏は強し)

Da 接続詞 nije 現在形 tako, svaki dan bi mi bio ispunjen 接続法 brigom.

「なら」

(500) 妻(さい)が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない。(こころ)

Da 接続詞 sam ja 現在形 čovek kakvim me moja supruga zamišlja, ne bih se sam ovoliko mučio 接続法.

(501) 財産家ならもっと大きな家(うち)でも造るさ。(こころ)

Da 接続詞 sam 現在形 bogataš, napravio bih 接続法 makar veću kuću.

(502) もしも人に、もともとの魂が美しいということがあるなら、人としての品格が高いということがあるなら、それは哲夫だね、と。(哀しい予感)

Da 接続詞 je 現在形 ljudska duša prirodno lepa, da 接続詞 je 現在形 ljudsko dostojanstvo veliko, to bi bio 接続法 Tetsuo.

「ば」

(503) 知りさえすれば、沈黙を守ってもいいですよ。(路上の奇禍)

Da 接続詞 samo znam 現在形, mogao bih 接続法 da ćutim.'

(2) 判断文

「たら」

(504) 自分の死ぬのが分っていたら、どんなにか厭だろうね。(草の花)

Da 接続詞 znamo 現在形 da ćemo uskoro umreti, kako bi bilo 接続法 ružno.

「なら」

（505）だって、人間がほんとうに歴史からなにかを学んでいるなら、一度やった失敗は二度と繰り返さないはずよ。（ブンとフン）

Zato što, da 接続詞 su ljudi stvarno naučili 過去形 nešto iz istorije, ne bi ponavljali 接続法 greške koje su već počinili.

（506）実際ここに貴方という一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。（こころ）

Da 接続詞 ne postojiš 現在形 ti, moja prošlost bi ostala samo moja i ne bih je, ni posredno, poverio 接続法 nekom drugom.

（507）勝呂はこの暗い部屋の臭気は、もし人間の死に臭いがあるならばこれなのだろうなあ、と、ぼんやり考えた。（海と毒薬）

Kacuhiro je nekako mislio da、ako 接続詞 ljudska smrt ima 現在形 miris , to je 現在形 ovo.

（508）もし実際に動物電気と云うものがあるなら、ナオミの眼にはきっと多量にそれが含まれているのだろうと、私はいつもそう感じました。（痴人の愛）

Da 接続詞 stvarno postoji 現在形 životinjska struja, toga bi bilo 接続法 puno u Naominim očima; tako sam uvek osećao.

（509）熊のように堅く、厚い毛皮ならば、人間の感応はよほど違ったものであったにちがいない。（雪国）

Da 接続詞 ljudi imaju 現在形 tako čvrsto i debelo krzno kao medvedi, onda bi i njihova čula drugačije reagovala 接続法.

「ば」

（510）先生の頭さえあれば、こういう態度は坐って世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。（こころ）

Da 接続詞 imam 現在形 Učiteljevu pamet, da li bi mi ovakav stav da samo sedim i posmatram svet oko sebe izgledao 接続法 prirodno?

（3）決意文

「たら」

（511）「わたし、男だったら殴っちゃうんだけど」（あすなろ物語）

Da 接続詞 sam 現在形 ja muško, udario bih 接続法 ga.

4.3.2.5 非レアルな過去の条件

(1) 平叙文

「たら」

(512) 「わたし、肋骨(ろっこつ)さえ折らなかったら何かで日本で一番になったわよ、きっと！」(あすなろ物語)

Samo da 接続詞 nisam slomila 過去形 kost, ja bih u nečemu bila 接続法 prva u Japanu, sigurno!

「なら」

(513) 今の僕なら少しは姉の力にもなれたと思うがね」(友情)

Da 接続詞 sam to bio 過去形 sadašnji ja, mislim da sam malo mogao 過去形 da pomognem starijoj sestri.

(514) もし会いたいのならば、堂々と彼女の家を訪ねればよかったのだ。(草の花)

Ako 接続詞 sam želeo 過去形 da je vidim, trebalo je 過去形 da je posetim kod kuće.

「ば」

(515) もし見たのであれば沖を追って入口まで走ってこなければならなかったわけだが。(ブンとフン)

Da 接続詞 je gledala 過去形, trebalo bi 接続法 da je pratila Okija i da je potrčala do ulaza.

(2) 判断文

「たら」

(516) 七段が負けたのであったら、何か言っただろう。(名人)

Da 接続詞 je izgubio 過去形 Nanadan, rekao bi 接続法 nešto.

(517) もし、スピーカーが、日本軍の攻撃がいかに正当であり、勇敢でかつ美しいものであったかを繰り返し説明したら、やはりそれに反発したであろう。(若き数学者のアメリカ)

Da 接続詞 je spiker iznova objašnjavao 過去形 koliko su napadi japanske vojske bili pravedni, hrabri i lepi, ja bih se verovatno ipak usprotivio 接続法.

(518) 五センチ顔が右へ寄るか左へ寄るかしていたら死んでいたはずだ。(花終る闇)

Da 接続詞 ti se lice pomerilo 過去形 pet sentimetara desno ili levo, bio bi 接続法 mrtav.

（519）もしも自然にまかせていたら、地位も、五十歳という年齢も忘れて、ローマの街に歓喜の叫びとともにとび出していたかもしれない。（コンスタンティノープルの陥落）

Da[接続詞] je samo slušao[過去形] prirodu, možda bi zaboravio svojih 50 godina i izašao[接続法] u Rim s uzvikom ushićenja.

（520）疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいた事であろ。（羅生門）

Da[接続詞] nije umro[過去形] od bolesti, čak i sad bi živeo[接続法] prodajući.

（521）それさえわかったら、自分は、人間をこんなに恐怖し、また、必死のサーヴィスなどしなくて、すんだのでしょう。(人間失格)

Da[接続詞] sam to znao[過去形], ja se ne bih ovako bojao[接続法] ljudi i verovatno ne bih ovoliko bio[接続法] uslužan.

（522）もう一日か半日か後れていたら、間違いなく圧原で無常の風に誘われていたことだろう。（黒い雨）

Da[接続詞] smo kasnili[過去形] jos jedan dan ili pola dana, sigurno bi nas mamio[接続法] promenljiv vetar u Acuhari.

（523）もしあのときもっと抵抗していたらそれを叩いた方はいまとなると完全に立場がなくなってしまいます。（パニック）

Da[接続詞] su se tada snažnije suprotstavljali[過去形], oni koji su napadali bi potpuno izgubili[接続法] svoju poziciju.

（524）フェータルなものだと若し聞いたら自分はどうだったろう。(城の崎にて)

Da[節即し] sam čuo[過去形] da je to fatalno, kako bih se osećao[接続法]?

（525）「二人ともその港町にいたら、今頃は一緒になってたかもしれないね。」（雪国）

Da[接続詞] su oboje bili[過去形] u tom lučkom gradu, sada bi sigurno bili[接続法] zajedno.

（526）もし自分も司祭でなく一人の信徒だったら、このまま逃げだしたかもしれません。（沈黙）

Da[接続詞] sam i ja bio[過去形] jedan od vernika a ne pop, ostavio bih sve i pobegao[接続法].

（527）もし彼の実の母が生きていたら、或は彼と実家との関係に、こうまで隔りが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです。（こころ）

Da[接続詞] je njegova prava majka bila[過去形] živa, mislim da između njega i njegove porodice ne bi došlo[接続法] do ovakvog jaza.

（528）あれが無事に発表されていたら、今日までの私のどの作品にもまさる傑作であったかもしれない。（結婚の生態）

Da[接続詞] je to bez problema objavljeno[現在形], to bi možda bilo[接続法] remek delo koje bi nadmašilo sva moja dela do danas.

「なら」

（529）もし自分に本当の事をいう習慣がついていたなら、悪びれず、彼等の犯罪を父や母に訴える事ができたのかも知れませんが、（人間失格）

Da[接続詞] sam imao[過去形] običaj da kažem istinu, možda sam mogao[過去形] mirno da ih tužim zbog zločina ocu i majci.

（530）もしその男が私の生活の行路を横切らなかったならば、恐らくこういう長いものを貴方に書き残す必要も起らなかったでしょう。（こころ）

Da[接続詞] taj čovek nije prešao[過去形] raskrsnicu mog života, možda ne bi ni bilo[接続法] potrebe da tebi pišem ovako dugu ispovest.

（531）もし彼等が、あの血なまぐさい革命を終局に予定しているのでなかったならば、きっともっとはっきりした意志を示し得ただろう。（草の花）

Da[接続詞] nisu planirali[過去形] tu krvavu revoluciju na kraju, verovatno sam mogao[過去形] da pokažem svoju volju još jasnije.

（532）この悲しみがなかったなら、私は或は、まだ今頃はあの汚らわしい淫婦のことが忘れられず、失恋の痛手に悩んでいたでしょう。（痴人の愛）

Da[接続詞] nije bilo[過去形] ove tuge, možda ne bih mogao da zaboravim tu prljavu razuzdanu ženu, i mučio bih[接続法] se sa bolom neuzvraćene ljubavi.

（533）もし、あの時にそんなことばを吐いていたなら、おれはまったくの偽善者となり、今ごろはもっと深い自己嫌悪に襲われているだろうということだった。（娘への）

Rekli su da, da[接続詞] sam tada rekao[過去形] takve stvari, bio bih potpuni licemer i sada bih mrzeo[接続法] sebe jos više.

「ば」

（534）あなたさえ、あのような事件を起こさなければ、離婚などというこはなかった筈だ。（錦繍）

Da[接続詞] samo nisi izazvao[過去形] onakav incident, sigurno ne bi bilo[接続法] ni razvoda.

（535）もう少し余裕があれば、自分はあの信徒たちにせめてみじかい祝福だけでも与えてやれた筈である。（沈黙）

Da 接続詞 sam imao 過去形 prostora, mogao sam 過去形 makar kratko da blagoslovim te vernike.

（536）そんな装いで家を出れば、道半ばで咎められて、引返さざるをえなかったろう。（金閣寺）

Da 接続詞 si izašao 過去形 s takvom odećom, policajac bi okrivio tebe i morao bi 接続法 da se vratiš.

（537）もし見たのであれば沖を追って入口まで走ってこなければならなかったわけだが、（ブンとフン）

Da 接続詞 je gledala 過去形, trebalo bi 接続法 da je pratila Okija i da je potrčala do ulaza.

（538）もし彼の記憶心像に沖の顔があらわれなければ、なんのことを言っているのか七瀬にはわからなかっただろう。（ブンとフン）

Da 接続詞 se nije pojavilo 過去形 Okijevo lice u njegovoj slici za pamćenje, Nanase ne bi uspela 接続法 da shvati o čemu govori.

（539）警察が先まわりしていれば、必ずなんらかの反応を示したはずである.（都市の遺言）

Da 接続詞 su ga policajci pretekli 過去形, sigurno bi pokazao 接続法 neku reakciju.

（540）私が入院しなければ、八月中に箱根で済んでいた。（名人）

Da 接続詞 nisam morao 過去形 u bolnicu, ovo bi bilo 接続法 gotovo još u Hakoneu.

(3) 決意文

「たら」

（541）月面にコカコーラの自動販売機があると知っていたら、コインを持ってくるんだったよ。（ブンとフン）

Da 接続詞 sam znao 過去形 da ima aparat u kome se prodaje koka-kola na Mesecu, doneo bih 接続法 sitan novac.

「なら」

（542）自分で人を殺したなら自分で責任をもつ、しかし他人が殺した責任をもたされてはたまらない。（友情）

Da 接続詞 sam ja ubio 過去形 čoveka, ja bih snosio 接続法 odgovornost, ali ne mogu da podnesem da snosim odgovornost zato što ga je ubio neko drugi.

(8) 問いかけ文

「たら」

(543) 現状維持の精神が少しでもあったら、第一ここまで到達できなかったはずではないか。(人民は弱し官 吏は強し)

Da 接続詞 je imalo postojao 過去形 duh da se očuva sadašnje stanje, zar ne misliš da se kao prvo ne bi ni stiglo 接続法 dovde?

(9) 疑念文

「たら」

(544) そして私がもしも気づかなかったら、おばは一生、こうして私と 2 人きりになることはなかったのだろうか。(哀しい予感)

I da 接続詞 ja to nisam primetila 過去形, tetka možda ne bi čitav život ostala 接続法 samo sa mnom.

「なら」

(545) あの頃もし家でじっとしていたとしたら、本当に気が狂ってしまったのではないかと思います。(エディプスの恋人)

Mislim da bih stvarno poludeo 接続法 da 接続詞 sam tada sedeo 過去形 mirno kod kuće.

(546) わがはいが、ほんとうの小説家なら、あのとき、あのおばさんを、はりたおすべきではなかっただろうか。(ブンとフン)

Da 接続詞 sam ja bio 過去形 pravi pisac, zar ne bi trebalo 接続法 da sam tu ženu oborio udarcem?

4.3.2.6 まとめ

主節のモダリティとと「と・たら・なら・ば」の使用率は表 34. によって表されている。

表 34. 「と・たら・なら・ば」各形式ごとの主節のモダリティの使用率

		平叙文	判断文	決意文	依頼文	命令文	願望文	誘い掛け文	問いかけ文	疑念文	合計
レアルな	と	89/ 89.9%	6/ 6.1%	4/ 4.0							99/ 100%
	たら	99/ 52.4%	36/ 19.1%	9/ 4.8%	3/ 1.6%	24/ 12.7%		1/ 0.5%	5/ 2.6%	12/ 6.4%	189/ 100%

未来の条件	なら	68/54.0%	17/13.5%	17/13.5%	2/1.6%	18/14.2%	3/2.4%			1/0.8%	126/100%
	ば	255/70.2%	64/17.7%	6/1.7%	3/0.8%	20/5.5%				15/4.1%	363/100%
レアルな現在の条件	と	6/50.0%	3/25.0%							3/25.0%	12/100%
	たら	30/35.3%	13/15.3%		9/10.6%	15/17.7%			6/7.1%	12/14.1%	85/100%
	なら	101/40.7%	45/18.1%	21/8.5%	6/2.4%	24/9.7%	9/3.6%	3/1.2%	27/10.9%	12/4.8%	248/100%
	ば	62/53.4%	19/16.4%	7/6.0%		7/6.0%			7/6.0%	14/12.1%	116/100%
ポテンシャルな条件	と	16/88.9%	1/5.6%							1/5.6%	18/100%
	たら	44/41.1%	30/28.1%				9/8.4%		12/11.2%	12/11.2%	107/100%
	なら	12/28.6%	16/38.1%	3/7.1%			4/9.5%	1/2.4%	3/7.1%	3/7.1%	42/100%
	ば	46/43.0%	52/48.6%	3/2.8%					3/2.8%	3/2.8%	107/100%
非レアルな現在の条件	と										
	たら	12/80.0%	3/20.0%								15/100%
	なら	23/76.7%	7/23.3%								30/100%
	ば	8/66.7%	4/33.3%								12/100%

非レアルな過去の条件	と										
	たら	19/ 27.5%	42/ 60.9%	2/ 2.9%					3/ 4.3%	3/ 4.3%	69/ 100%
	なら	9/ 25%	21/ 58.3%	3/ 8.3%						3/ 8.3%	36/ 100%
	ば	39/ 61.9%	24/ 38.1%								63/ 100%

次は、各条件の種類においてどのような主節が最も使用されていたかを表 35. で示す。

表 35. 主節のモダリティごとの「と・たら・なら・ば」形式の使用率

		平叙文	判断文	決意文	依頼文	命令文	願望文	誘い掛け文	問いかけ文	疑念文
レアルな未来の条件	と	89/ 17.4%	6/ 4.9%	4/ 11.1 %						
	たら	99/ 19.4%	36/ 29.3%	9/ 25.0%	3/ 37.5%	24/ 38.7%		1/ 100 %	5/ 100%	12/ 42.9%
	なら	68/ 13.3%	17/ 13.8%	17/ 47.2%	2/ 25.0%	18/ 29.0%	3/ 100%			1/ 3.6 %
	ば	255/ 49.9%	64/ 52.0%	6/ 16.7%	3/ 37.5%	20/ 32.3%				15/ 53.6%
合計		511/ 100%	123/ 100%	36/ 100%	8/ 100%	62/ 100%	3/ 100%	1/ 100%	5/ 100%	28/ 100%
	777/ 100%	511/ 65.8%	123/ 15.8%	36/ 4.6%	8/ 1.0%	62/ 8.0%	3/ 0.4%	1/ 0.1%	5/ 0.6%	28/ 3.6%
レ	と	6/	3/							3/

アルな現在の条件		3.0%	3.8%							7.9%
	たら	30/ 15.1%	13/ 16.3%		9/ 60.0%	15/ 32.6%			6/ 15.0%	12/ 31.6%
	なら	101/ 50.6%	45/ 56.3%	21/ 75.0%	6/ 40.0%	24/ 52.2%	9/ 100%	3/ 100%	27/ 67.5%	12/ 31.6%
	ば	62/ 31.2%	19/ 23.8%	7/ 25.0%		7/ 15.2%			7/ 17.5%	14/ 36.8%
		199/ 100%	80/ 100%	28/ 100%	15/ 100%	46/ 100%	9/ 100%	3/ 100%	40/ 100%	38/ 100%
合計	461/ 100%	199/ 43.2%	80/ 17.4%	28/ 6.1%	15/ 3.3%	46/ 10.0%	9/ 2.0%	3/ 0.7%	40/ 8.7%	38/ 8.2%
ポテンシャルな条件	と	16/ 13.6%	1/ 1.0%							1/ 5.3%
	たら	44/ 37.3%	30/ 30.3%				9/ 69.2%		12/ 66.7%	12/ 63.2%
	なら	12/ 10.2%	16/ 16.2%	3/ 50.0%			4/ 30.8%	1/ 100%	3/ 16.7%	3/ 15.8%
	ば	46/ 39.0%	52/ 52.5%	3/ 50.0%					3/ 16.7%	3/ 15.8%
合計		118/ 100%	99/ 100%	6/ 100%			13/ 100%	1/ 100%	18/ 100%	19/ 100%
	274/ 100%	118/ 43.1%	99/ 21.5%	6/ 2.2%			13/ 4.7%	1/ 0.4%	18/ 6.6%	19/ 6.9%
非レアルな現在	と									
	たら	12/ 27.9%	3/ 21.4%							
	なら	23/ 53.5%	7/ 50.0%							
	ば	8/	4/							

の条件		18.6%	28.6%							
合計		43/100%	14/100%							
	57/100%	43/75.4%	14/24.6%							
非レアルな過去の条件	と									
	たら	19/26.9%	42/48.3%	2/40%					3/100%	3/50%
	なら	9/13.4%	21/24.1%	3/60%						3/50%
	ば	39/58.2%	24/27.6%							
合計		67/100%	87/100%	5/100%					3/100%	6/100%
	168/100%	67/39.9%	87/51.8%	5/3.0%					3/1.8%	6/3.6%

4.3.3 従属節と主節の事柄的な関係

2.4.3. で説明したように、日本語の条件構文の従属節と主節との事柄的な関係において次の6種類を分けることができた。

(1) 従属節の条件の実現が主節の事柄の前提になる場合

(2) 従属節の条件が主節の事柄の原因・理由になる場合

(3) 従属節の事柄の実現、又は主節の事柄の実現の方法が表されている場合

(4) 主節で従属節の条件の実現に関する評価が表されている場合

(5) 主節で従属節の条件に関する結論が表されている場合

(6) 主節で従属節の条件が実現した場合の反応が表されている場合である。

4.3.3.1 レアルな未来の条件

(1) 従属節の条件の実現が主節の事柄の前提になる場合

「と」

(547) このまま家に帰ると、かれこれ女どもに説明する必要がある。(黒い雨)

Ako 接続詞 se ovako vratim 現在形 kući, biće potrebno 未来形 sve da objašnjavam ženama.

「たら」

(548) 無事に帰りつけたら、この体験は、ぜひとも記録しておく価値がある。(砂の女)

Ako 接続詞 se bezbedno vratiš 現在形, ovo iskustvo je svakako vredno 現在形 da se zabeleži.

(549) おかしいと感じたら、そこをよくさがせ。(人民は弱し官 吏は強し)

Ako 接続詞 ti se učini 現在形 čudim, tu dobro pretraži 命令形.

「ば」

(550) それでなければこの問題をここで切り上げてください。(こころ)

Ako 接続詞 ne bude 現在形 tako, onda ovde prekinite 命令形 sa tim pitanjem.

(2) 従属節の条件が主節の事柄の原因・理由になる場合

「と」

(551) 「あそこのところを清書して出すと、先方で誤解するんじゃないでしょうか。」(黒い雨)

"Ako 接続詞 lepo prepišete 現在形 taj deo i izdate 現在形, mislim da će oni to pogrešno razumeti 未来形."

「たら」

(552) あの箱に一つでも敵の弾丸があたったら、もうおしまいです。(ビルマの竪琴)

Ako 接続詞 makar jedan neprijateljski metak pogodi 現在形 onu kutiju, tu će biti 未来形 kraj.

「なら」

(553) 熱はあがったけれどぼくは先生はなんともないと思うなあ。ああして寝ていらしても、もし悪いなら苦しむはずだがなあ」ともっぱら否定する。(父)

Mislim da je učitelj dobro iako je imao temperaturu. Spava, ali, ako 接続詞 mu ne bi bilo 接続法 dobro, trebalo bi 接続法 da se muči' rekao je i negirao isključivo.

「ば」

(554)「雨が降れば娘が迎えに来てくれます。」（雪国）

Ako 接続詞 bude padala 第二未来形 kiša, devojka će doći 未来形 po nas.

(3) 従属節の事柄の実現、又は主節の事柄の実現の方法が表されている場合

「たら」

(555) 彼はその写真を机の前に飾っておいたら、きっといい脚本がかきたくなるだろうと思った。(友情)

On je mislio, ako 接続詞 ostavi 現在形 kao ukras tu ispred stola, da će sigurno poželeti 未来形 da napiše dobar scenario.

「なら」

(556) もちろんぼくは役人ですから自分の地位を高めるためなら他人をだしぬいてでも点数稼ぎをやりたいと思います。(パニック)

Naravno, pošto sam ja državni službenik, želeo bih 接続法 da zaradim poene makar i na prevaru, samo ako 接続詞 ću da dobijem 未来形 viši položaj.

「ば」

(557) ここから出たければブンを呼んで降服するよう説得なさい。（ブンとフン）

Ako 接続詞 hoćeš odavde da izađeš 未来形, pozovi Buna i ubedi ga 命令形 da se preda.

(4) 主節で従属節の条件の実現に関する評価が表されている場合

「と」

(558) 焚火は K さんのいうように竈の焚口で燃えていた。S さんは、「きっと居ますよ。若し居なければ、消して置かないと悪いから、上がりましょうか。（焚火）

Vatra je gorela u ognjištu, kao što je rekao K. S (je rekao): "(On) je verovatno tu. Ako nije, uđimo jer neće biti 未来形 dobro ako 接続詞 ne ugasimo 現在形 vatru. "

「ば」

(559)「お前さん達から進めて貰えれば、これに越したことはねい。・・・」（秋風）

"Ako 接続詞 vi budete to unapredili 第二未来形, to bi bilo 接続法 najbolje...."

(5) 主節で従属節の条件に関する結論が表されている場合

「たら」

(560) 逆らって怒らせたら、それこそ取り返しのつかないことになりますよ　(女社長に乾杯)

Ako 接続詞 se budeš protivio i naljutio 第二未来形 je, neće više moći 未来形 da se ispravi.

「ば」

(261) 自分の世界を作りあげようとすれば、すぐに政府という怪物にぶち当る。(二十歳の原点)

Ako 接続詞 pokušaš 現在形 da izgradiš svoj svet, odmah ćeš udariti 現在形 u zver koja se zove vlada.

4.3.3.2 レアルな現在の条件

(1) 従属節の条件の実現が主節の事柄の前提になる場合

「と」

(562) ほとんどの生徒が下校してからでないと校庭では練習させてもらえない。(エディプスの恋人)

Neće nam dozvoliti 未来形 da vežbamo u dvorištu ako 接続詞 svi đaci nisu otišli 過去形.

「たら」

(563) 「そんな元気があるんだったら、私を歓ばせてよ」(二十歳の原点)

Ako 接続詞 imaš 現在形 toliko energije, razveseli 命令形 me.

「なら」

(564) 「それで、せっかく運動をやるなら、オリンピックぐらいになんとか出られないの」(太郎物語)

"Onda, ako 接続詞 se već　baviš 現在形 sportom, zar ne bi mogao 接続法 nekako da učestvuješ na Olimpijadi?"

「ば」

(565) 番地は確かめていないが、谷間のような所にかたまった集落だから、実際にそんな家があれば、すぐわかるのである。(点と線)

Nisam proverio adresu, ali je to selo na mestu kao u dolini, i ako 接続詞 stvarno ima 現在形 takva kuća, odmah češ je prepoznati 未来形.

(2) 従属節の条件が主節の事柄の原因・理由になる場合

「と」

(566) 「もう、よろしい。雪の中にいつまでも立っていると本当に病気になる」(痴情)

Dosta je. Ako 接続詞 u nedogled stojiš 現在形 u snegu, zaista ćeš se razboleti 未来形.

「たら」

(567) 手ちがいが事務室にあるのだったら、アルバイトの報酬はやはり、はらってくれるのだろうか。(死者の奢り)

Ako 接続詞 ima 現在形 greške u kancelariji, da li će mi uopšte platiti 未来形 za rad?

「なら」

(568) 汐見があんなになった原因が藤木にあるのなら、藤木に部をやめてもらうなんて言ってね。(草の花)

Ako 接続詞 je 現在形 razlog što je Shiomi postao onakav u Fujikiju, onda reci 命令形 Fujikiju da će otići iz ovog odeljenja.

「ば」

(569) ポケットがなければ金を入れるところもなくなる。(ブンとフン)

Ako 接続詞 nemaš 現在形 džep, nemaš 現在形 ni gde da staviš novac.

(4) 主節で従属節の条件の実現に関する評価が表されている場合

「と」

(570) 「お前は K の所で待っているのだ。なるべく落ちついていないと見っともないよ」(痴情)

"Ti čekaj kod K-a. Ako 接続詞 nisi što više smiren 現在形, biće 未来形 sramota".

「なら」

(571) そうお前の腹が極まってるなら、それでいい。(手紙)

Ako 接続詞 si ti došao 過去形 do te tačke, dobro je 現在形 tako.

「ば」

(572) 溢れるほどに人が来るなんて思っていれば見当違いだ。(父)

Ako 接続詞 si mislila 過去形 da će ovde sve biti preplavljeno ljudima, pogrešno si procenila 過去形.

(5) 主節で従属節の条件に関する結論が表されている場合

「たら」

(573) 「だめだめ、一とまわりしたら、またすぐモッコがやってくるんですから・・・」(砂の女)

"Ne možeš, ako 接続詞 obiđeš 現在形, opet će doći 未来形 Mokko odmah..."

「なら」

(574) ブンがほんとうに四次元の人間なら、われわれ三次元の人間にはとうてい太刀打(たちう)ちはできません。(ブンとフン)

Ako 接続詞 je 現在形 Bun stvarno čovek četvrte dimenzije, onda mi ljudi treće dimenzije ne možemo 現在形 da mu pariramo.

「ば」

(275) しかし若し世の中へ助けだされれば、私はまたもや悪事をかさねずにはいられないであろう。(少年死刑囚)

Ali ako 接続詞 me pomognu 現在形 u svetu, verovatno neću moći 未来形 a da ne ponovim zločin.

(6) 主節で従属節の条件が実現した場合の反応が表されている場合である。

「なら」

(576)大人たちは苛立ち、僕らは書記が黒人兵を連れて行くために来たのなら、崖の下に倒れたまま見つけられず、餓死してくれたらよかったのにと思うのだった。(飼育)

Odrasli su se iznervirali i mislili da, ako 接続詞 smo došli 過去形 da bi činovnik odveo vojnika Crnca, ona bolje da ga nisu našli kako leži ispod stene i bolje da je umro 過去形 od gladi.

4.3.3.3 ポテンシャルな条件

(1) 従属節の条件の実現が主節の事柄の前提になる場合

「たら」

(577)「うんと貰えたら、一番良い部屋に入院するといいね。」(死者の奢り)

Ako 接続詞 bi ti odobrili 接続法, bilo bi 接続法 lepo da dobiješ najbolju sobu u bolnici.

「なら」

(278) 会って話を聞くつもりなら、これからつれて行ってあげようか。（エディプスの恋人）

Ako 接続詞 bi hteo 接続法 da se vidiš i da čuješ šta ima da kaže, hoćeš 現在形 da je povedem sada?

「ば」

(579) 慈海の妻になれば、まず喰うに困るということはないだろう。（雁の寺）

Ako 接続詞 bih bila 接続法 Jikaijeva zena, ne bih imala 接続法 problema da jedem.

(2) 従属節の条件が主節の事柄の原因・理由になる場合

「と」

(580) どうでしょう、もっと正直に話して戴けると助かるのですが。（冬の旅）

Ako 接続詞 bi mi ispričala 接続法 iskrenije, pomogla bi 接続法 mi.

「たら」

(581) ここで降ろされでもしたら、早いところ他の車にでも拾われない限り、誰でも死んでしまうだろう。（若き数学者のアメリカ）

Ako 接続詞 bi bio izbačen 接続法 ovde, umro bi 接続法 bilo ko, ukoliko ga neki drugi auto ne pokupi.

「なら」

(582) 熱はあがったけれどぼくは先生はなんともないと思うなあ。ああして寝ていらしても、もし悪いなら苦しむ筈だがなあ。」ともっぱら否定する。（父）

Mislim da je učitelj dobro iako je imao temperaturu. Spava, ali, kad 接続詞 ne bi bio 接続法 dobro, trebalo bi 接続法 da se muči' rekao je i negirao isključivo.

「ば」

(583) 他人はみんな証人だ。それなのに、他人がいなければ、恥というものは生れて来ない。（金閣寺）

Drugi su svi svedoci. Uprkos tome, kad 接続詞 ne bi bilo 接続法 drugih, ne bi se rodila 接続法 ni sramota.

(3) 従属節の事柄の実現、又は主節の事柄の実現の方法が表されている場合

「たら」

(584) 「自信を回復したかったら腕を見るのよ。」（花終わる闇）

"Ako 接続詞 bi želeo 接続法 da povratiš samopouzdanje, pogledaj 命令形 ruke."

(4) 主節で従属節の条件の実現に関する評価が表されている場合

「たら」

(585) 時折、日曜、祭日と休みの続く時など、小学校時代を過した郷里の部落の土を踏むことが出来たらどんなに素晴らしいだろうと思った。（あすなろ物語）

Mislila sam kako bi bilo 接続法 divno kad 接続詞 bih povremeno, nedeljom, praznikom i kad ne radim mogla 接続法 da kročim zemljom svog sela u kome sam provela školske dane.

「ば」

(586) 「その辺のところは、川添さんに確かめればはっきりするでしょう。」（都市の遺言）

Kad 接続詞 bi to proverila 接続法 sa Kavazoeom, verovatno bi se razjasnilo 接続法.

4.3.3.4 非レアルな現在の条件

(1) 従属節の条件の実現が主節の事柄の前提になる場合

「たら」

(587)「わたし、男だったら殴っちゃうんだけど」（あすなろ物語）

Da 接続詞 sam 現在形 ja muško, udarila bih 接続法 ga.

「なら」

(588) ふだんならきっといい景色なんでしょうね。（エディプスの恋人）

Da 接続詞 je 現在形 kao obično, sigurno je 現在形 lep pejzaž.

(2) 従属節の条件が主節の事柄の原因・理由になる場合

「たら」

(589) そうでなかったら、毎日がはなはだ不安なものになってしまう。（人民は弱し官吏は強し）

Da 接続詞 nije 現在形 tako , svaki dan bi mi bio 接続法 ispunjen brigom.

「なら」

(590) 「第一元右衛門のかみさんが風邪をひいているなら其処に居るのだっていけない。」（流行感冒）

Kao prvo, da 接続詞 je Motoemonova žena prehlađena 現在形, ne bi smela 接続法 tu da bude.

「ば」

(591) 壁がなく、考え悩むことがなければ、人生はどんなに味気ない平凡なものとなるだろう。（人民は弱し官使は強し）

Da nema zidova i da 接続詞 nema 現在形 nečeg oko čega lupaš glavu, kako bi život bio 接続法 isprazan i dosadan.

4.3.3.5 非レアルな過去の条件

(1) 従属節の条件の実現が主節の事柄の前提になる場合

「たら」

(592) あれが無事に発表されていたら、今日までの私のどの作品にもまさる傑作であったかもしれない。（結婚の生態）

Da 接続詞 je to bez problema bilo objavljeno 過去形 to bi možda bilo 接続法 remek delo koje bi nadmašilo sva moja dela do danas.

「なら」

(593) もし自分に本当の事をいう習慣がついていたなら、悪びれず、彼等の犯罪を父や母に訴えることができたのかも知れませんが。（人間失格）

Da 接続詞 sam imao 過去形 običaj da kažem istinu, možda sam mogao 過去形 mirno da ih tužim zbog zločina ocu i majci.

「ば」

(594) 加恵自身は風邪(かぜ)もひいた覚えがないほど丈夫だったから、家の中に病人がでたときでなければ医者の顔を見ることがない。（華岡青洲の妻）

Kae je bila toliko jaka da se nije sećala kad je zadnji put bila prehlađena, i ne bi videla 接続法 lekara osim da 接続詞 se u kući neko razboleo 過去形.

(2) 従属節の条件が主節の事柄の原因・理由になる場合

「たら」

(595) わたしだって、それを聞いていたら殴りたくなるわよ。（あすなろ物語）

Čak i ja bih, da 接続詞 sam to čula 過去形, poželela 接続法 da ga udarim.

「ば」

(596) 一つ間違えば、今頃は青山の土の下に仰向けになって寝ているところだったなど思う。（城の崎にて）

Da 接続詞 sam samo malo pogrešio 過去形, sad bih ležao 接続法 pod zemljom na Aojami.

(5) 主節で従属節の条件に関する結論が表されている場合

「なら」

(597) 子供たちが育ってきたならば私は半白のにこやかな父になって若若しい娘や息子たちを相手にテニスをやる。(結婚の生態)

Da 接続詞 sam odgajio 過去形 decu, ja bih postao veseli otac i igrao bih 接続法 tenis sa svojim mlađanim kćerkama i sinovima.

「ば」

(598) 最後に先生の居る席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合せなかったから。(こころ)

Da 接続詞 to nije bilo 過去形 zajedno sa Učiteljem, ja se ne bih sreo 接続法 sa njegovom suprugom.

(6) 主節で従属節の条件が実現した場合の反応が表されている場合である。

「たら」

(599) もし、スピーカーが、日本軍の攻撃がいかに正当であり、勇敢でかつ美しいものであったかを繰り返し説明したら、やはりそれに反発したであろう。(若き数学者のアメリカ)

Da 接続詞 je spiker iznova objašnjavao 過去形 koliko su napadi japanske vojske bili pravedni, hrabri i lepi, ja bih se verovatno ipak usprotivio 接続法.

「ば」

(600) 警察が先まわりしていれば、必ずなんらかの反応を示したはずである。(都市の遺言)

Da 接続詞 su ga policajci pretekli 過去形, sigurno bi pokazao 接続法 neku reakciju.

4.3.3.6 まとめ

従属節と主節の事柄的な関係と「と・たら・なら・ば」の使用率は次の表 36. で表すことができる。

表 36.「と・たら・なら・ば」各形式ごとの従属節と主節の事柄的な関係の使用率

		前提	原因・理由	方法	評価	結論	反応	合計
レアルな未来の条件	と	6 / 6.1%	90/ 90.5%		3/ 3.0%			99/ 100%
	たら	54 / 28.6%	108/ 57.1%	6/ 3.2%	12/ 6.4%	9/ 4.8%		189/ 100%
	なら	87/ 69.1%	30/ 23.9%	9/ 7.1%				126/ 100%
	ば	63/ 17.3%	234/ 64.4%	27/ 7.4%	24/ 6.6%	15/ 4.1%		363/ 100%
レアルな現在の条件	と	3/ 25.0%	6/ 50.0%		3/ 25.0%			12/ 100%
	たら	44/ 51.8%	26/ 30.6%			15/ 17.7%		85/ 100%
	なら	124/ 50.0%	53/ 21.4%		9/ 3.6%	54/ 21.8%	8/ 3.2%	248/ 100%
	ば	49/ 42.2%	52/ 44.8%		3/ 2.6%	12/ 10.4%		116/ 100%
ポテンシャルな条件	と		18/ 100.0%					18/ 100%
	たら	23/ 21.1%	74/ 67.9%	3/ 2.8%	9/ 8.3%			109/ 100%
	なら	21/ 50.0%	21/ 50.0%					42/ 100%
	ば	30/ 28.0%	62/ 57.9%	6/ 5.6%	9/ 8.4%			107/ 100%
非レ	と							

アルな現在の条件	たら	6/ 40.0%	9/ 60.0%					15/ 100%
	なら	21/ 70.0%	9/ 30.0%					30/ 100%
	ば	3/ 25.0%	9/ 75.0%					12/ 100%
非レアルな過去の条件	と							
	たら	9/ 13.0%	57/ 82.6%				3/ 4.3%	69/ 100%
	なら		18/ 50.0%			3/ 8.3%		36/ 100%
	ば	6/ 9.5%	51/ 80.9%			3/ 4.8%	3/ 4.8%	63/ 100%

次は、各条件の種類と従属節と主節の事柄的な関係の種類の関連を表 37. で示す。

表 37. 従属節と主節の事柄的な関係ごとの「と・たら・なら・ば」各形式の使用率

		前提	原因・理由	方法	評価	結論	反応
レアルな未来の条件	と	6 / 2.9%	90/ 19.5%		3/ 7.7%		
	たら	54 / 25.7%	108/ 23.4%	6/ 14.3%	12/ 30.8%	9/ 37.5%	
	なら	87/ 41.4%	30/ 6.5%	9/ 21.4%			
	ば	63/ 30%	234/ 50.6%	27/ 64.3%	24/ 61.5%	15/ 62.5%	

合計		210/100%	462/100%	42/100%	39/100%	24/100%	
777/100%		210/27%	462/59.5%	42/5.4%	39/5%	24/3.1%	
レアルな現在の条件	と	3/1.4%	6/4.4%		3/20%		
	たら	44/20%	26/19%			15/18.5%	
	なら	124/56.4%	53/38.7%		9/60%	54/66.7%	8/100%
	ば	49/22.3%	52/38%		3/20%	12/14.8%	
合計		220/100%	137/100%		15/100%	81/100%	8/100%
461/100%		220/47.7%	137/29.7%		15/3.3%	81/17.6%	8/1.7%
ポテンシャルな条件	と		18/10.3%				
	たら	23/31.1%	74/42.3%	3/33.3%	9/50%		
	なら	21/28.4%	21/12%				
	ば	30/40.5%	62/35.4%	6/66.7%	9/50%		
合計		74/100%	175/100%	9/100%	18/100%		
274/100%		74/27%	175/63.9%	9/3.3%	18/6.6%		
非レアルな現在の	と						
	たら	6/20%	9/33.3%				

条件	なら	21/ 70%	9/ 33.3%				
	ば	3/ 10%	9/ 33.3%				
合計		30/ 100%	27/ 100%				
57/ 100%		30/ 52.6%	27/ 47.4%				
非レアルな過去の条件	と						
	たら	9/ 30%	57/ 45.2%				3/ 50%
	なら	15/ 50.0%	18/ 14.3%			3/ 50.0%	
	ば	6/ 20%	51/ 40.5%			3/ 50%	3/ 50%
合計		30/ 100%	126/ 100%			6/ 100%	6/ 100%
168/ 100%		30/ 17.9%	126/ 75%			6/ 3.6%	6/ 3.6%

4.4 まとめ

本章では、日本語の条件形「と・たら・なら・ば」の仮定条件としての意味と用法を探ってみた。セルビア語に存在する条件の種類は日本語でどのような文法的な手段で表されているかを見てきた。その際に、パラメータは、従属節のモダリティ、主節のモダリティ及び従属節と主節との事柄的な関係にした。

このようなパラメータに基づいて、各条件の種類及び各条件形がどのような従属節と主節との関係を最もよく表しているのか、どのような文が従属節と主節に最もよく現れているのかを分析してきた。そして各条件形がどんな条件の種類を最も表しているのかを見てきた。

表 38. では、各条件の種類における「と・たら・なら・ば」の使用率を示す。

表 38. 各条件の種類における「と・たら・なら・ば」の使用率

	と	たら	なら	ば	合計
レアルな未来の条件	99→ 12.7% ↓ 76.7%	189→ 24.3% ↓ 40. 7%	126→ 16.2% ↓ 26.2%	363→ 46.7% ↓ 54.9%	777
レアルな現在の条件	12→ 2.6% ↓ 9.3%	85→ 18.4% ↓ 18.3%	248→ 53.8% ↓ 51.5%	116→ 25.2% ↓ 17.5%	461
ポテンシャルな（未来）の条件	18→ 6.6% ↓ 14. 0%	107→ 39.1% ↓ 23.0%	42→ 15.3% ↓ 8.7%	107→ 39.1% ↓ 16.2%	274
非レアルな現在の条件	0→ 0.00% ↓ 0.00%	15→ 26.3% ↓ 3.2%	30→ 52.6% ↓ 6.2%	12→ 21.1% ↓ 1.8%	57
非レアルな過去の条件	0→ 0.00% ↓ 0.00%	69→ 41.1% ↓ 14.8%	36→ 21.4% ↓ 7.5%	63→ 37.5% ↓ 9.5%	168
合計	129	465	482	661	

(1)条件の種類と従属節のモダリティの関係を調べた結果、次のようなことが分かった：

- すべての条件の種類に最もよく現れる従属節は判断を表す文である （レアルな未来の条件の 34.4%、レアルな現在の条件の 62.0%、ポテンシャルな条件の 37.2% 、非レアルな現在の条件の 59.6%、非レアルな過去の条件の 63.1%）。

それぞれの条件の種類における判断文で最も使用される条件形は、次のようである：

- レアルな未来の条件：「ば」 (43.1%)
- レアルな現在の条件：「なら」 (64.7)
- ポテンシャルな条件：「たら」 (49.0%)
- 非レアルな現在の条件：「なら」 (47.1%)
- 非レアルな過去の条件：「ば」 (46.2%)

(2)条件の種類と主節のモダリティとの関係を調べた結果、次のようなことが分かった：

- 非レアルな過去の条件を除くすべての条件の種類に最も多く使われた主節は平叙文である（レアルな未来の条件の 65.8%、レアルな現在の条件の 43.2%、ポテンシャルな条件の 43.1%、非レアルな現在の条件の 75.4%）。
- 非レアルな過去の条件の場合は、最も多かった主節は判断文であった（51.8%）。その次は、平叙文であった（39.9%）。

それぞれの条件の種類における平叙文で最も使用された条件形は、次のようである：

- レアルな未来の条件：「ば」（49.9%）
- レアルな現在の条件：「なら」（50.6%）
- ポテンシャルな条件：「ば」（39.0%）、「たら」（37.3%）
- 非レアルな現在の条件：「なら」（53.5%）

非レアルな過去の条件において最も多く使用された条件形は：

- 判断文の場合：「ば」（58.2%）
- 平叙文の場合：「ば」（61.9%）。

(3)各条件の種類においての従属節と主節の事柄的な関係の分析によって、次のことが明らかになった：

- レアルな未来の条件、ポテンシャルな条件と非レアルな過去の条件の場合は、最も多く見られた事柄的な関係は「原因・理由」関係であった　（レアルな未来の条件の 59.5%、ポテンシャルな条件の 63.9%、非レアルな過去の条件の 75.0%）。
- レアルな現在の条件と非レアルな現在の条件の場合は、最も多く見られた関係は「前提」であった　（レアルな現在の条件の 47.7%、非レアルな現在の条件の 52.6%）。非レアルな現在の条件の場合は、この次に「原因・理由」関係が最も多く見られた（47.4%）。注目すべきなのは、この中で「たら・なら・ば」が平等に使われていたことである（33.3%）。

それぞれの条件の種類における「原因・理由」関係の意味で最も使用された条件形は、次のようである：

- レアルな未来の条件：「ば」（50.6%）
- ポテンシャルな条件：「たら」（42.3%）、「ば」（35.4%）
- 非レアルな過去の条件：「たら」（45.2%）、「ば」（40.5%）

それぞれの条件の種類において「前提」の意味で最も使用された条件形は、次のようである：

- レアルな現在の条件：「なら」（56.4%）
- 非レアルな現在の条件：「なら」（70.0%）

用例の分析の結果、「たら・なら・ば」は、すべての条件の種類を表すことができ、仮定性の広い範囲にわたって使用できる、柔軟な条件形であるのが判明した。「と」の場合は、非レアルな現在の条件と非レアルな過去の条件の用例は見つからなかった。「と」は、条件節と主節が自然な因果関係にあることを示すため、現実に起きなかったこと、あるいは起きることのない事態を想像する非レアルな条件には使えないと言えるだろう。さらに、時間、原因・理由などの事実的な関係をよく表す「と」が非レアルな条件として使用されない理由は、この条件の仮定性格の弱さにあるのではないかと思われる。

レアルな未来の条件には「ば」が最も多く使われていた（46.7%）。レアルな現在の条件には「なら」が最も多く使用されていた（53.8%）。ポテンシャルな条件には、「たら」が最も多く使われ（39.1%）、非レアルな現在の条件には「なら」が最も多く使われていた（52.6%）。非レアルな過去の条件には、「たら」が最も多く使用されていた（41.1%）。

以上のことから、次のことが明らかになった。

「と」は仮定性の弱いレアルな未来の条件を最も多く表している；レアルな現在の条件とポテンシャルな条件としての例は少ない；仮定性の最も強い非レアルな条件には使われていない。

「たら」はレアルな未来の条件とより仮定性の強いポテンシャルな条件に最も多く使われている。

「なら」はレアルな現在の条件を表す傾向がある。

「ば」はレアルな未来の条件、レアルな現在の条件、そして仮定性の最も強い非レアルな過去の条件に最も多く使われていた。

以上のことから「たら」と「ば」の仮定性が最も強いと言えるだろう。「ば」は一番広く用いられたため、普遍的な条件形とも言えるだろう。「と」の仮定条件としての使用は非レアルな条件以外のものに制限されているのが分かった。

第5章
考察

5.1 はじめに

本研究では、日本語とセルビア語の条件表現の対照分析において三つの研究課題を設定し、本章ではその研究成果をまとめる。ここでは各条件形の用法においての特徴を今まで考察してきた観点から及びその他分析する際に気づいたことを取り上げて整理しておく。特に、各条件の種類における用法に関する傾向について整理しておくことにする。

まず、研究課題について再度確認しておく。

研究課題は次の通り：

1. Comrie（1986）が定めた条件のパラメータは、セルビア語と日本語の条件構文においてどのような役割をはたしているのか。日本語の条件構文を考察するにあたって、このようなパラメータは十分であるのか。
2. 「と・たら・なら・ば」は、どの場合にどのような非条件的な意味を表しているのか。時間文、原因・理由文との関係はどうなっているのか。
3. 「と・たら・なら・ば」はどのような仮定的な意味を表すことができるのか。仮定的な用法における四形式の使用傾向と特徴を探る。

5.2 日本語とセルビア語の条件表現の類型論観点からの対照

類型論の観点から日本語とセルビア語の条件表現を対照して判明したのは、Comrie（1986）が定めたパラメータはセルビア語の条件文に当てはまることが出来るが、日本語の条件文にはあてはまらない部分が多い。つまり、セルビア語の条件の種類を見分けるために最も重要なパラメータである仮定の度合い、基準時、条件のマーカーは、日本語では必ずしも文法化されているわけではないのが分かった。このことを理由に、日本語の条件形の使用を分析する際に、三つの新しいパラメータとして（1）従属節のモダリティ、（2）条件形の使用によく制限を与える条件構文の主節のモダリティと（3）従属節と主節の事柄的な関係を導入し、分析を行った。導入したそれぞれの新しいパラメータに基づいて各条件の特徴について述べたいと思う。

5.2.1 従属節のモダリティの観点から

研究の結果、日本語の仮定条件の従属節は主に話者か主体の条件の成立可能性に対する判断が表されている文であった。その中で最も使用される条件形は「ば」と「たら」である。このような判断文はセルビア語でも同じ判断文に対応し、条件文の接続詞 ako＋現在形、接続法か第二未来形，kad+接続法、da+現在形が対応している。

判断文は、やはり、仮定された事柄について事実としてではなく、不確実な出来事や事態として述べているので、仮定条件に最も多く現れたのも当然のことである。

その中で「ば」と「たら」が最も高い割合で使用されたのは、この二つの条件形にほかの条件形よりも仮定性が多く含まれていることを示しているのではないかと思われる。

5.2.2 主節のモダリティの観点から

日本語の殆どすべての条件文で最も多く見られた主節の種類は、平叙文であった。ただし、非レアルな過去の条件において最も多かったのは、判断文であった。使用率の一番高かった条件形は「ば」と「なら」であった。

ここで注目すべき点がある。それはレアルな現在の条件の場合と非レアルな現在の条件の場合は「なら」が一番よく使用されていたことである。その理由としては、レアルな現在の条件も非レアルな現在の条件も動作よりも状況を表しがちであるのが挙げられる。つまり、従属節には、ある動作が終わって、その結果として成り立った状態が続いていることを示す現在形か過去形が使われているが、それは、日本語の場合、条件表現の中で特殊な性格を持つ「なら」に対応していることが明らかになった。言い換えてみると、「なら」は相手や現実から貰った情報に基づいて仮定の事柄を差し出しているので、それはセルビア語の従属節の現在形か過去形が表す状態に対応していることが分かった。

「ば」は、仮定条件における使用の頻度が最も高くて、典型的な条件形であるといえるだろう。

「と・たら・ば」の使用特徴についてまとめてみると、次のようなことが言える。

- 「と」は条件文の主節において、願望文、誘い掛け文、依頼文、命令文に用いられない。このような文のモーダルな性格から「と」の使用制限が生じるからである。
- 「ば」は、従来の研究では、従属節の述語が動作性だと文末が制限され、決意文、誘い掛け文、依頼文などに使用できないが、状態性だと文末が制限されないとされてきた。本研究の結果として「ば」が条件文に用いられる場合は、それほど制約が見られない。決意文の場合は、従属節と主節の主体が異なる文に動作性述語が多く使われており、誘い掛け文や依頼文、命令文などの場合は、動作性述語が使われている「たら」の用例を「ば」に置き換えられるケースが多い。したがって、従属節の述語が動作性である場合は、「ば」の使用が不可能ではないが、傾向として「たら」の使用のほうが多い。
- 「なら」では、平叙文と判断文においての使用がほかの文と比べて圧倒的に多い。このことは、「なら」の性質について物語っているといえる。つまり、「なら」はある情報を材料にし、仮定を立てているので、ある経験や知識に基づく推測を述べる平叙文、またはその経験や知識に基づいた推測に対する判断を述べる判断文の中に最も使われやすいのである。

5.2.3 従属節と主節の事柄的な観点から

従属節と主節の事柄的な関係を分析した結果、レアルな未来の条件、ポテンシャルな条件と非レアルな過去の条件において最も多く見られた関係は「原因・理由」であった。ここで最も使用率の高かった条件形は「たら」と「ば」であった。

このことは、「たら」と「ば」の条件においての普遍的な性格を裏付けていると主張できる。つまり、条件文と原因・理由文の関連が従来の研究でも認められており、日本語研究者の中には仮定的な因果関係は条件文で、事実的な因果関係は原因・理由文であるという主張を共有する者もいる（1. 1.2 を参点）。しかし、ここでこれらの条件形のもう一つの特徴に注目したい。「たら」は既定の事柄、そして一般的な事柄でも原因・理由を表すことが出来る。一方、「ば」は既定の事柄における原因・理由としての使用は見られないが、一般的な事柄には、原因・理由を表すことが出来る。つまり、これらの条件形は、Realis 領域の因果関係も、Irrealis 領域の因果関係も表すことが出来るので、因果関係の意味合いが強いとも言える。

レアルな現在の条件と非レアルな現在の条件の場合は、従属節と主節との事柄的な関係は主に「前提」であった。この場合最も多く使われた条件形は「なら」であった。これもやはり「なら」の性質をよく表している。相手や現実から貰った情報は、条件として差し出され、主節の事態の前提になっているのが「なら」文の特徴である。

5.2.4. 日本語とセルビア語の共通点と相違点

ここで以上分析してきた条件文におけるセルビア語と日本語との共通点をまとめてみよう：

- 節の順番：条件節が主節に先行する
- 「と」にはセルビア語のレアルな条件(未来・現在を含む)とポテンシャルな条件としての意味と用法が見られる
- 「たら・なら・ば」にはセルビア語の条件のすべての種類としての意味と用法が見られる

異なる点もまとめてみよう：

- 節の順番：セルビア語の場合は、主節が条件節の前に来ることも可能である
- 条件のマーカー：セルビア語では条件のマーカーは接続詞と主節のテンスである。日本語の場合は、「と・たら・なら・ば」は条件のマーカーだけではなく、非条件的な事柄のマーカーとしての機能も見られる。どの場合に条件のマーカーで、どの場合に非条件的な事柄を表しているかは整理されていない。条件のマーカーとして「もし」、非レアルな過去の条件の主節の過去形、主節においての判断文の「だろう・はず」などが挙げられる。
- 仮定の度合い：セルビア語の場合は仮定の度合いは明確に文法化されているし、条件の接続詞およびテンスの選択に関する重要なパラメータである。日本語の場合は仮定の度合いが明確に文法化されていない。
- 基準時：セルビア語の場合は、基準時は条件節にも主節に条件ごとに定められている。日本語の場合は、基準時は主節によって表されているし、未来形と現在形の区別がつかない場合が多い。
- 従属節のモダリティ：セルビア語の場合は、条件の接続詞の使用に関するパラメータになっていない。日本語の場合は、「と・たら・なら・ば」の使用に影響を与え

るパラメータである。

- 主節のモダリティ：セルビア語の場合は、条件の接続詞の使用に関するパラメータになっていない。日本語の場合は、「と・たら・なら・ば」の使用制限にかかわってくるので、重要なパラメータになっている。
- 条件節と主節との事柄的な関係：セルビア語の場合は、条件の接続詞の使用に関するパラメータになっていない。日本語の場合は、条件節と主節との事柄的な関係は「と・たら・なら・ば」の使用に影響を与える重要なパラメータである。
- 条件の種類：セルビア語の場合はレアルな未来の条件、レアルな現在の条件、ポテンシャルな条件、非レアルな現在の条件と非レアルな過去の条件が文法化されている。日本語では、主節のテンスによって明確に文法化されているのはレアルな未来の条件と非レアルな過去の条件のみである。

以上のような分析によって、研究課題1が解明できたのではないかと考える。

5.3 仮定性の観点からの対照分析

仮定性を基準にし、日本語の「と・ば・たら・なら」が持つ非条件的な意味と用法の問題を取り上げ、研究課題2についての分析を行った。

5.3.1 非条件的な意味

研究の結果として判明したことをまとめておく。

「と・たら・なら・ば」が表す既定の事柄、予定的な事柄と一般的な事柄は、従来の研究では主に「条件」として扱われてきた。本研究では、このような事柄を「と・たら・なら・ば」の非条件的な意味・用法として整理した。

「と」は主に既定の事柄と一般的な事柄によく用いられている。予定的な事柄に用いられる場合は、主節のモダリティとの関係からの制約がある。

「ば」は既定の事柄としての例は比較的少ない。「見る、思う、考える」のような限られた動詞の場合にしか殆ど用いられないということである。予定的な事柄と一般的な事柄に用いられる場合は、制約がある。

「たら」は、「と・ば」に比べて予定的な事柄にはよく用いられる。

「なら」は、全般的に原因・理由の意味で用いられるが、過去形の「たなら」は、予定的な事柄には用いられない。

5.3.1.1 時間を表す文の性質から

既定の事柄における Anterior , Simultaneous, Posterior 時間的関係の種類には、「と」が最も多く対応していた。

予定的な事柄においては、セルビア語の Posterior 関係に最も対応している形式は、「たら」であるが、「ば」、特に「と」も高い割合で使用されていた。つまり、仮定的な意味領域に接近する事柄を表すには、「と・たら・ば」のどの条件形も高い使用率で用いられる。

一般的な事柄の場合は、セルビア語の Posterior 時間文に最もよく対応するのは「と」であるが、Simultaneous 時間文でも、「と」以外の形式は対応しないことが明らかになった。General 時間文についても、最も対応しているのは「と」であり、その次が「ば」である。

「なら」には、時間的な意味よりも原因・理由の意味を表す傾向が見られた。「なら」の唯一の時間的な用法は、一般的な General 関係であった。つまり、規則的に行われる、因果関係に最も近い時間文においての使用である。

以上のべたことから、「と」は時間性が最も強い条件形であることが判明した。その次は、「たら」にも時間性の面が目立っていることが分かった。「なら」は時間性が欠けていることが特徴的である。

5.3.1.2 原因・理由を表す文の性質から

既定の事柄の原因・理由文の場合も最も多く用いられたのは、「と」であるが、「たら」も高い割合で使われていた。

一般的な事柄の原因・理由文の場合も、「と」の使用率が最も高く、「ば」がその次に多く使用されていたが、二つの条件形の間の差は大きい。

「なら」は、従属節の事態が真であると仮定し、主節において話者の判断や意見が述べられているという文のパターンが特徴的であるので、既定の事柄、予定的な事柄、一般的な事柄においても主に原因・理由の意味で使われていた。

5.4 仮定的な意味と用法の対照分析

研究課題 3 を解明するためには、「と・たら・なら・ば」はどのような仮定的な意味を表すことができるのか、仮定的な用法における四形式の使用傾向と特徴を探ってみた。

次のことが判明した。

「と」は仮定的な事柄に用いられる場合、主に主節のモダリティとの関係からの制約がある。反現実の条件には用いられない。

「ば」は仮定的な事柄に用いられる場合は、主節のモダリティ関係からの制約がある。

「たら」は、「と・ば」に比べて仮定的な事柄によく用いられている。

「なら」は、レアルな現在の条件と非レアルな現在の条件に最も多く用いられている。

5.4.1 レアルな条件と日本語の条件形の使用傾向

レアルな未来の条件の例は、777 あった中で最も多く使用された条件形は「ば」であった（46.7%）。その次は、「たら」であった（24.3%）。「ば」が最も使用されたのは、この条件形の仮定的性格の証拠でもある。

セルビア語のレアルな未来の条件とレアルな現在の条件の違いは主節のテンスで表されている。しかし、日本語では、未来形は明確に表されていないため主節で使用されている時制形式か時間副詞、あるいは文脈によって条件の種類が区別できる。

レアルな現在の条件の例は、471 ある中で最も多く使用された条件形は、「なら」であった（53.8%）。

つまり、セルビア語のレアルな条件を日本語で表す時はいずれの条件形「と・たら・なら・ば」も使用できる。傾向として、レアルな未来の条件には「ば・たら」、レアルな現在の条件には「なら」が使用される。

5.4.2 ポテンシャルな条件と日本語の条件形の使用方法

ポテンシャルな条件はセルビア語では文法化されているが、レアルな未来の条件との差はそれほど大きくはない。レアルな未来の条件もポテンシャルな条件も未来の仮

定を表しているが、ポテンシャルな条件の特徴は、従属節と主節で接続法が使用されることである。

日本語の場合は、未来を指す条件はすべて同じ言語的手段で表されている。つまり、未来形と接続法の違いがないので、レアルな条件とポテンシャルな条件の仮定の度合いの差もはっきり出てこない。このことから、多くの用例はレアルな条件としてもポテンシャルな条件としても捉えることが出来る。

ポテンシャルな条件の例は、274 あった。その中で最も多く使用された条件形は、「たら」と「ば」であった（39.1%ずつ）。レアルな未来の条件とほぼ同じ結果であるが、ポテンシャルな条件の場合は「たら」の使用がレアルな未来の条件よりも目立っている。

5.4.3 非レアルな条件と日本語の条件形の使用傾向

非レアルな条件において特徴的なのは、「と」が使用できないことである。「と」に、仮定的性格の最も強い非レアルな条件としての使用が見られないことは、この条件形の仮定性に制限があることを意味している。「と」は時間性が最も強いと同時に、仮定性が最も弱い条件形になっている。

非レアルな現在の条件の例は 57 見つかった。その内最も多く用いられた条件形は、「なら」であった（52.6%）。

非レアルな過去の条件の例は 168 あったが、その内最も多く使用されたのは、「たら」（41.1%）で、その次は「ば」（37.5%）であった。　非レアルな過去の条件のマーカーは主節の述語の過去形である。

非レアルな条件に属する文の内、過去の仮定を表すときに、従属節の述語として「していれば」、「していたら」の形、つまり継続相が用いられる傾向があるが、この「していれば」、「していたら」のアスペクト的な意味は、完成相に相当するアスペクト的な意味を持っているのである。つまり、本来の継続相のアスペクト的な意味を表すために用いられているのではなく、過去の意味をはっきり表すために用いられているのである。したがって、非レアルな過去の条件の場合、従属句節に用いられる「していれば」、「していたら」は、「すれば」、「したら」と同様、完成相のアスペクト的な意味を持つテンス形式としてみるべきである。

ここでの動詞の継続相の役目はそのアスペクト的な意味を表すことよりも、過去の意味を強調するために用いられているのである。アスペクト的な意味は主節の述語が表すのである。

ここでもう一つ、「たなら」のテンポラリテイーについて触れておく。

「たなら」は、テンポラルセンターが発話時である場合と未来に有る場合とがある。テンポラルセンターが発話時である場合は、テンス的意味は過去を表しており、これに当たるものとしては、実現性のある事柄を前提にしている事柄を表すことのあるレアルな現在の条件、過去になかった事柄を表す非レアルな過去の条件が挙げられる。つまり、過去の未知の事柄が条件としてさしだされている中で、話し手の期待や話し手の成立可能性に対する判断が反映している。

また、テンポラルセンターが未来にある場合は、テンス的意味は過去ではなく、主節より前、という相対的テンスの意味を持っており、これに当たるものとしては、レアルな未来の条件、ポテンシャルな条件、その中で特に話し手の期待や話し手の成立可能性に対する判断が反映しているものがある。

5.5 まとめ

以上、すべての研究課題の考察の結果として、従属節のモダリティ、主節のモダリティと従属節と主節の事柄的な関係の要素を考慮し、各条件の種類における「と・たら・なら・ば」の使用傾向を提示したいと思う。

表 39. 各条件の種類における「と・たら・なら・ば」の使用傾向

条件の種類	従属節のモダリティ	主節のモダリティ	従属節と主節の事柄的な関係	条件形
レアルな未来の条件	1. 判断文 2. 働きかけ文 3. 決意文 4. 願望文	1. 平叙文 2. 判断文 3. 命令文 4. 決意文 5. 依頼文 6. 疑念文 7. 問いかけ文 8. 願望文	1. 原因・理由 2. 前提 3. 方法 4. 評価 5. 結論	1. ば 2. たら 3. なら 4. と

		9. 誘いかけ文		
レアルな現在の条件	1. 判断文 2. 働きかけ文 3. 願望文 4. 決意文	1. 平叙文 2. 判断文 3. 命令文 4. 問いかけ文 5. 疑念文 6. 決意文 7. 依頼文 8. 願望文 9. 誘いかけ文	1. 原因・理由 2. 前提 3. 評価 4. 結論	1. なら 2. ば 3. たら 4. と
ポテンシャルな条件	1. 判断文 2. 願望文 3. 決意文 4. 働きかけ文	1. 平叙文 2. 判断文 3. 疑念文 4. 問いかけ文 5. 願望文 6. 決意文 7. 誘いかけ文	1. 原因・理由 2. 前提 3. 評価 4. 方法	1. たら・ば[6] 2. なら 3. と
非レアルな現在の条件	1. 判断文 2. 願望文 3. 決意文	1. 平叙文 2. 判断文	1. 前提 2. 原因・理由	1. なら 2. たら 3. ば
非レアルな過去の条件	1. 判断文 2. 願望文 3. 決意文	1. 判断文 2. 平叙文 3. 疑念文 4. 決意文 5. 問いかけ文	1. 原因・理由 2. 前提 3. 結論・反応[7]	1. たら 2. ば 3. なら

[6] 同じ割合で使用されていたことの意味

[7] 同じ割合で使用されていたことの意味

第6章
結論

6.1 本研究のまとめ

本研究では、日本語の条件表現が持つさまざまな意味をセルビア語の条件構文との対照を通じて分析してきた。大きく、非条件的な意味と仮定的な意味に分類し、それぞれのカテゴリーにおける「と・たら・なら・ば」の使用傾向と特徴を見てきた。本研究から得られた知見を以下の三つの研究課題に沿って述べる。

研究課題 1：Comrie（1986）が定めた条件のパラメータは、セルビア語と日本語の条件構文においてどのような役割をはたしているのか。日本語の条件構文を考察するにあたって、このようなパラメータは十分であるのか。

本研究にとって、仮定の度合いを中心的なパラメータとして採用した。つまり、仮定性のない文を条件文としてではなく、非条件的な意味を表す時間文や原因・理由文として扱った。

Comrie（1986）が定めたパラメータの中にある仮定の度合い、基準時、条件のマーカーは、日本語では必ずしも文法化されているわけではないことが判明した。このことを理由に、日本語の条件形の使用を分析する際に、三つの新しいパラメータを付け加えた。それは、（1）従属節のモダリティ、（2）条件形の使用によく制限を与える条件構文の主節のモダリティと（3）従属節と主節の事柄的な関係である。こうすることによって、日本語の条件構文を総括的に考察することが出来、「と・たら・なら・ば」の意味と用法を文末のモダリティあるいは条件の事柄からのみならず、「構文」レベルから分析することが出来た。

研究課題 2：「と・たら・なら・ば」は、どの場合にどのような非条件的な意味を表しているのか。時間文、原因・理由文との関係はどうなっているのか。

研究の結果、既定の事柄、予定的な事柄、そして一般的に行われる事柄を表す「と・たら・ば」は、セルビア語の時間文か原因・理由文、または、時間的な副詞節に対応していることが分かった。さらに、「と・たら・ば」の時間を表す文の中では、従属節と主節の事柄が実現される時制の観点から、その意味には次のような種類が見られる。(1)主節の動作が従属節の動作の前に実現する Anterior 関係、(2)従属節の動

作が実現した後、あるいは、実現し始めた後に主節の動作が実現する Posterior 関係、(3) 両節の動作が同時に実現する Simultaneous 関係、(4) 主節の動作と従属節の動作が規則的に一緒に行われている General 関係の四種類である。Anterior 関係は、既定の事柄を表す文にしか見られず、予定的な事柄には Posterior 関係となる。また General 関係は一般的な事柄を表す文の特徴である。予定的な事柄の場合、「と・たら・ば」には、時間的な副詞節の働きが見られる。

既定の事柄における時間的関係の種類には、「と」が最も多く対応していることが判明した。原因・理由文の場合も最も多く用いられたのは、「と」であるが、「たら」も高い割合で使われていた。

予定的な事柄においては、セルビア語の Posterior 関係に最も対応している形式は、「たら」であるが、「ば」も「と」もよく使用されていた。つまり、仮定的な意味領域に接近する事柄を表すには、「と・たら・ば」どの条件形も高い使用率で用いられる。

一般的な事柄の場合は、セルビア語の Posterior 時間文に最もよく対応するのは「と」であるが、Simultaneous 時間文でも、「と」以外の形式は対応しないことが明らかになった。General 時間文についても、最も対応しているのは「と」であり、その次が「ば」である。原因・理由文の場合も、「と」の使用率が最も高く、「ば」がその次に多く使用されていた。

「なら」には、時間的な意味よりも原因・理由の意味を表す傾向が見られた。

研究課題 3：「と・たら・なら・ば」はどのような仮定的な意味を表すことができるのか。仮定的な用法における四形式の使用傾向と特徴を探ってみる。

仮定的な意味としての条件表現は、セルビア語のレアルな条件、ポテンシャルな条件と非レアルな条件と対照してきた。パラメータとして、従属節のモダリティ、主節のモダリティと従属節と主節の事柄的な観点から考察してきた。

レアルな未来の条件の場合は、最も多く使用された条件形は「ば」であった（46.7%）。その次は、「たら」であった（24.3%）。

レアルな現在の条件の場合は、最も多く使用された条件形は、「なら」であった（53.8%）。

つまり、セルビア語のレアルな現在の条件を日本語で表す時はいずれの条件形「と・たら・なら・ば」も使用できる。傾向として、レアルな未来の条件には「ば・たら」、レアルな現在の条件には「なら」が使用される。

ポテンシャルな条件の場合は、最も多く使用された条件形は、「たら」と「ば」であった（39.1%ずつ）。レアルな未来の条件とほぼ同じ結果であるが、ポテンシャルな条件の場合はレアルな未来の条件よりも「たら」の使用が目立っている。

非レアルな条件において特徴的なのは、「と」が使用できないことである。

非レアルな現在の条件として最も多く用いられた条件形は、「なら」であった（52.6%）。

非レアルな過去の条件として最も多く使用されたのは、「たら」（41.1%）で、その次は「ば」（37.5%）であった。　非レアルな過去の条件のマーカーは主節の述語の過去形である。

つまり、日本語の「と・たら・なら・ば」は現実との関係から、また条件の実現性の観点からは、いずれの条件の種類にも使用することが出来る。このような対照分析によって、「と・たら・なら・ば」の使用上、明確な規則に整理することが出来なくても、各条件の種類においての使用傾向を明らかにすることができた。

6.2 研究史的意義

本研究の研究史的意義として3つの意義が挙げられる。

1．日本語の条件表現の研究はたくさんあるが、セルビア語母語学習者の立場を考えてその意味と用法を分析したのは始めてである。スラブ語族に属するセルビア語との対照を通じて、仮定性は日本語の条件表現においてどんな役割を果たしているのかが新たな角度から明らかになった。その上、学習者を最も悩ませている「と・たら・なら・ば」の非条件的な意味と仮定的な意味との区別が時間文及び原因・理由文観点からの分析の結果、より明らかになったのではないかと考える。

2．本研究では、「と・たら・なら・ば」の非条件的な意味と仮定的な意味をセルビア語との対照を通じて分析した。このような分析によって日本語の代表的な四つの条件形の使用を、仮定性ゼロの事柄から仮定性マキシマムの事柄まで、多角的に明らかにすることが出来た。さらに、それぞれの条件形が時間性、因果性、仮定性という要素をどれだけ含んでいるかに焦点を当て、その性格と特徴をより明らかにすることが出来た。

3．本研究によって得られた知見は、日本語の条件表現の教育法に生かされることが期待される。明らかにされた日本語とセルビア語の共通点と相違点を日本語の条件表

現の教授法や教育において活用できると考えられる。日本語の教師は、このような対照研究に基づいて日本語とセルビア語の条件表現の共通点と相違点についてより具体的に、そしてより正確に説明する必要がある。その際、非条件的な意味においても、仮定的な意味においても日本語とセルビア語を対照させながら日本語の条件表現をより明確に、分かりやすく教えることが出来る。日本語学習者が日本語を習得する際、本研究で明らかになったような日本語とセルビア語の間に見られる違いを指摘することが日本語の条件表現の習得を促進する上で重要ではないかと思われる。

6.3 今後の課題

本研究では、日本語と条件表現の「と・たら・なら・ば」とセルビア語の時間文、原因理由文、そして条件文と対象し、その共通点と相違点を明らかにした。今後残された課題としていくつかの問題が挙げられる。

まずは、日本語の条件のマーカーの整理、使用頻度、そして各条件形相互の関連を分析することである。このような研究も日本語の条件構文の学習プロセスにとって重要であると考えている。

そのほかに、セルビア語以外のスラブ語系のさまざまな言語と日本語との対照を行うことである。そうすることによって、非条件的な意味と条件的な意味のより幅広い対照研究が出来、スラブ語族言語話者の学習者にとって日本語習得の重要な手がかりが見出されることになろう。日本語はセルビアだけではなく、バルカン半島、そして南東ヨーロッパの国々で人気が増しているので、より密な対照研究を行うことの必要性も存在しているだけではなく、日本語の条件表現の研究の上でも新たな視点を提供できるだろう。

巻末資料

セルビア語動詞の変化

セルビア語の動詞は、人称、時制と叙法によって変化する。

さらに、数（単数・複数）と性（男性、女性、中性）の二つのカテゴリーによって語尾が変化する。

動詞の形は、不定形語幹と現在形語幹によって違う。この二つの語幹に語尾を付けることによって、さまざまな形態ができる。その中には、人称形と非人称形がある。人称形には、現在形、過去形、未来形、未完了過去、アオリスト、過去完了、第二未来形、命令形、接続法がある。不人称形には、不定形、現在分詞、過去分詞、受動分詞と完了分詞がある。

又、セルビア語には単純時制と複合時制がある。

単純時制は、現在形語幹か不定形語幹に時制、もしくは叙法及び人称を示す語尾をつけることによって作られる。単純時制には、（現在形語幹から出来る）現在形、命令形、未完了過去、現在分詞、受動分詞と（不定形語幹から出来る）不定形、アオリスト、完了分詞、過去分詞がある。

複合時制は、助動詞と完了分詞か不定形で作られる。複合時制には、過去形、過去完了、未来形、第二未来形、接続法が属するのである。

不定形と現在形の語幹の種類によって、動詞には、大きく分けて、7 つのグループがある。ただし、不規則変化をもつ動詞もある。

ここでは、規則変化動詞の各グループの例を挙げておく（Stanojčić, Popović, Micić（1989）に基づく）。

1. 規則変化動詞

1.1 第一グループ

このグループに属する動詞は、現在形語幹が-e で終わり，不定形語幹が子音で終わる動詞である（例：trese-/tres-）。

不定形：tresti　（振る）

現在形

	肯定	
	単数	複数
一人称	tresem	Tresemo
二人称	treseš	Tresete
三人称	trese	Tresu

命令形

	肯定	
	単数	複数
一人称		Tresimo
二人称	tresi	Tresite

三人称	neka trese	neka tresu

アオリスト

	肯定	
	単数	複数
一人称	tresoh	Tresosmo
二人称	trese	Tresoste
三人称	trese	Tresoše

未完了過去

	肯定	
	単数	複数
一人称	tresijah, tresah	tresijasmo, tresasmo
二人称	tresijaše, tresaše	tresijaste, tresaste
三人称	tresijaše, tresaše	tresijahu, tresahu

現在分詞：tresući

過去分詞：tresavši, tresav

受動分詞：

単数 －tresen（男性），tresena（女性），treseno（中性）

複数 －treseni, tresene, tresena

完了分詞：

単数 －tresao（男性），tresla（女性），treslo（中性）

複数 －tresli, tresle, tresla

1.2 第二グループ

第二グループに属する動詞は、現在形語幹が e で終わり、不定形語幹が a で終わる動詞である（例：piše- /pisa-）。

不定形：pisati （書く）

現在形

	肯定	
	単数	複数
一人称	pišem	Pišemo
二人称	pišeš	Pišete
三人称	piše	Pišu

命令形

	肯定	
	単数	複数
一人称		Pišimo
二人称	piši	Pišite
三人称	neka piše	neka pišu

アオリスト

	肯定	
	単数	複数
一人称	pisah	Pisasmo
二人称	pisa	Pisaste
三人称	pisa	Pisaše

未完了過去

	肯定	
	単数	複数
一人称	pisah	Pisasmo
二人称	pisaše	Pisaste
三人称	pisaše	Pisahu

現在分詞：pišući

過去分詞：pisavši, pisav

受動分詞：

単数 －pisan（男性），pisana（女性），pisano（中性）

複数 －pisani, pisane, pisana

完了分詞：

単数 －pisao（男性），pisala（女性），pisalo（中性）

複数 －pisali, pisale, pisala

1.3 第三グループ

第三グループに属する動詞は、現在形語幹が－ne で終わり、不定形語幹が－nu で終わる動詞である（例：brine- /brinu-）。

不定形：brinuti （心配する）

現在形

	肯定	
	単数	複数
一人称	brinem	Brinemo
二人称	brineš	brinete
三人称	brine	brinu

命令形

	肯定	
	単数	複数
一人称		brinimo
二人称	brini	brinite
三人称	neka brine	neka brinu

アオリスト

	肯定	
	単数	複数
一人称	brinuh	brinusmo
二人称	brinu	brinuste
三人称	brinu	brinuše

未完了過去

	肯定	
	単数	複数
一人称	brinjah	brinjasmo
二人称	brinjaše	brinjaste
三人称	brinjaše	brinjahu

現在分詞：brinući

過去分詞：brinuvši, brinuv

受動分詞：

単数 －brinut（男性），brinuta（女性），brinuto（中性）

複数 －brinuti, brinute, brinuta

完了分詞：

単数 －brinuo（男性），brinula（女性），brinulo（中性）

複数 －brinuli, brinule, brinula

1.4 第四グループ

第四グループに属する動詞は、二種類ある。一つは、現在形語幹が一je で終わり、不定形語幹に語尾がない動詞である。二つ目の種類は、現在形語幹が一je で終わり、不定形語幹が a で終わる動詞である（例：čuje-/ču-;　kuje-/kova-）。

1. 4.1 第一種類

不定形：čuti　（聞く）

現在形

	肯定	
	単数	複数
一人称	Čujem	Čujemo
二人称	Čuješ	Čujete
三人称	Čuje	Čuju

命令形

	肯定	
	単数	複数
一人称		Čujmo
二人称	Čuj	Čujte
三人称	neka čuje	neka čuju

アオリスト

	肯定	
	単数	複数
一人称	Čuh	Čusmo
二人称	Ču	Čuste
三人称	Ču	Čuše

未完了過去

	肯定	
	単数	複数
一人称	Čujah	Čujasmo
二人称	Čujaše	Čujaste
三人称	Čujaše	Čujahu

現在分詞：čujući

過去分詞：čuvši, čuv

受動分詞：

単数 －čuven（男性），čuvena（女性），čuveno（中性）

複数 －čuveni, čuvene, čuvena

完了分詞：

単数 －čuo（男性），čula（女性），čulo（中性）

複数 －čuli, čule, čula

1．4.2 第二種類

不定形：kovati （溶接する）

現在形

	肯定	
	単数	複数
一人称	Kujem	Kujemo
二人称	Kuješ	Kujete
三人称	Kuje	Kuju

命令形

	肯定	
	単数	複数
一人称		Kujmo
二人称	Kuj	Kujte
三人称	neka kuje	neka kuju

アオリスト

	肯定	
	単数	複数
一人称	Kovah	Kovasmo
二人称	Kova	Kovaste
三人称	Kova	Kovaše

未完了過去

	肯定	
	単数	複数
一人称	Kovah	Kovasmo
二人称	Kovaše	Kovaste
三人称	Kovaše	Kovahu

現在分詞：kujući

過去分詞：kovavši, kovav

受動分詞：

単数 －kovan（男性），kovana（女性），kovano（中性）

複数 －kovani, kovane, kovana

完了分詞：

単数 －kovao（男性）, kovala（女性）, kovalo（中性）

複数 －kovali, kovale, kovala

1.5 第五グループ

第五グループに属する動詞は、現在形語幹が長い[8]a か長い e で終わり、不定形語幹が短い a か短い e で終わる動詞である（例：peva-）。

不定形：pevati （歌う）

現在形

	肯定	
	単数	複数
一人称	pevam	Pevamo
二人称	pevaš	Pevate
三人称	peva	Pevaju

[8] セルビア語のアクセントは、音の強弱だけでなく、高低も関与するものである。次のような４種のアクセントが区別され ている。

長い下降調 a:a [‾＼:_] 長い上昇調 a:a[_:／‾]、a:a[_／:‾]

短い下降調 aa [‾＼_] 短い上昇調 aa[_／‾]

命令形

	肯定	
	単数	複数
一人称		Pevajmo
二人称	pevaj	Pevajte
三人称	neka peva	neka pevaju

アオリスト

	肯定	
	単数	複数
一人称	pevah	Pevasmo
二人称	peva	Pevaste
三人称	peva	Pevaše

未完了過去

	肯定	
	単数	複数
一人称	pevah	Pevasmo
二人称	pevaše	Pevasmo
三人称	pevaše	Pevahu

現在分詞：pevajući

過去分詞：pevavši, pevav

受動分詞：

単数 －pevan（男性），pevana（女性），pevano（中性）

複数 －pevani, pevane, pevana

完了分詞：

単数 －pevao（男性），pevala（女性），pevalo（中性）

複数 －pevali, pevale, pevala

1.6 第六グループ

第六グループに属する動詞は、現在形語幹が長いｉで終わり、不定形語幹が短いｉかｅで終わる動詞である（例：nosi-）。

不定形：nositi（運ぶ）

現在形

	肯定	
	単数	複数
一人称	nosim	Nosimo
二人称	nosiš	Nosite
三人称	nosi	Nose

命令形

	肯定	
	単数	複数
一人称		Nosimo
二人称	nosi	Nosite
三人称	neka nosi	neka nose

アオリスト

	肯定	
	単数	複数
一人称	nosih	Nosismo
二人称	nosi	Nosiste
三人称	nosi	Nosiše

未完了過去

	肯定	
	単数	複数
一人称	nošah	Nošasmo
二人称	nošaše	Nošaste
三人称	nošaše	Nošahu

現在分詞：noseći

過去分詞：nosivši, nosiv

受動分詞：

単数 －nošen（男性），nošena（女性），nošeno（中性）

複数 －nošeni, nošene, nošena

完了分詞：

単数 －nosio（男性），nosila（女性），nosilo（中性）

複数 －nosili, nosile, nosila

1.7 第七グループ

第七グループに属する動詞は、現在形語幹が i で終わり、不定形語幹が a で終わる動詞である（例：drži-/drža-）。

不定形：držati （持つ）

現在形

	肯定	
	単数	複数
一人称	držim	Držimo
二人称	držiš	Držite
三人称	drži	Drže

命令形

	肯定	
	単数	複数
一人称		Držimo
二人称	drži	Držite
三人称	neka drži	neka drže

アオリスト

	肯定	
	単数	複数
一人称	držah	Držasmo
二人称	drža	Držaste
三人称	drža	Držaše

未完了過去

	肯定	
	単数	複数
一人称	držah	Držasmo
二人称	držaše	Držaste
三人称	držaše	Držahu

現在分詞：držeći

過去分詞：državši, držav

受動分詞：

単数 －držan（男性），držana(女性），držano（中性）

複数 －držani,　　držane,　　držana

完了分詞：

単数 －držao（男性），držala（女性），držalo（中性）

複数 －držali,　　držale,　　držala

2. 助動詞の変化

セルビア語の助動詞の働きの一つは、複合時制を作ることである。セルビア語の助動詞は jesam（である），biti（である），hteti（~したい）である。これらの助動詞は、不規則変化である。

2.1Jesam の変化

Jesam は、現在形しか持っていない助動詞である。

	現在形		接辞形		否定形	
	単数	複数	単数	複数	単数	複数
一人称	Jesam	jesmo	sam	smo	nisam	nisam
二人称	Jesi	jeste	si	ste	nisi	niste
三人称	Jeste	jesu	Je	su	nije	nisu

2.2Biti の変化

Biti は、受動分子を持っていない助動詞である。

不定形：**biti**

現在形

	現在形		否定形	
	単数	複数	単数	複数
一人称	budem	budemo	ne budem	ne budemo
二人称	budeš	budete	ne budeš	ne budete
三人称	bude	budu	ne bude	ne budu

命令形

	現在形	
	単数	複数
一人称		Budimo
二人称	budi	Budite

三人称	neka bude	neka budu

アオリスト

	現在形	
	単数	複数
一人称	bih	Bismo
二人称	bi	Biste
三人称	bi	Biše

未完了過去

	現在形		接辞形	
	単数	複数		
一人称	bejah	bejasmo	beh	Besmo
二人称	bejaše	bejaste	beše	Beste
三人称	bejaše	bejahu	beše	Behu

現在分詞：budući

過去分詞：bivši, biv

完了分詞：

単数 －bio（男性），bila（女性），bilo（中性）

複数 －bili, bile, bila

2.3Hteti の変化

Hteti も受動分詞を持っていない助動詞である。

不定形：hteti

現在形

	現在形		接辞形		否定形	
	単数	複数	単数	複数	単数	複数
一人称	Hoću	hoćemo	Ću	ćemo	neću	nećemo
二人称	hoćeš	hoćete	Ćeš	ćete	nećeš	nećete
三人称	Hoće	hoće	Će	će	neće	neće

命令形

	現在形	
	単数	複数
一人称		Htednimo
二人称	htedni	Htednite
三人称	neka hoće	neka hoće

アオリスト

	現在形	
	単数	複数
一人称	hteh, htedoh	htesmo, htedosmo
二人称	hte, htede	hteste, htedoste
三人称	hte, htede	hteše, htedoše

未完了過去

	現在形	
	単数	複数
一人称	hoćah	Hoćasmo
二人称	hoćaše	Hoćaste
三人称	hoćaše	Hoćahu

現在分詞：hoteći

過去分詞：htevši, htev

完了分詞：

単数 －hteo（男性），htela（女性），htelo（中性）

複数 －hteli, htele, htela

3. 複合時制形

3.1 過去形（jesam の現在形＋完了分詞）

	肯定	
	単数	複数
一人称	ja sam pevao	mi smo pevali
二人称	ti si pevao	vi ste pevali
三人称	on je pevao	oni su pevali

3.2 過去完了（biti の未完了過去＋完了分詞、又は、biti の過去形＋完了分詞）

	未完了過去		過去形	
	単数	複数	単数	複数
一人称	bejah/beh tresao	bejah/beh tresao	bio sam tresao	Bili smo tresli
二人称	bejaše/beše tresao	bejaše/beše tresao	bio si tresao	bili ste tresli
三人称	bejaše/beše tresao	bejaše/beše tresao	bio je tresao	bili su tresli

3.3 未来形（接辞形の hteti の現在形＋不定形（複合時制形）、又は、単純時制形）

	複合時制形		単純時制形	
	単数	複数	単数	複数
一人称	ja ću pevati	mi ćemo pevati	pevaću	pevaćemo
二人称	ti ćeš pevati	vi ćete pevati	pevaćeš	pevaćete
三人称	on će pevati	oni će pevati	pevaće	pevaće

3.4 第二未来形（biti の現在形＋完了分詞）

	肯定	
	単数	複数
一人称	(kad) budem pevao	budemo pevali
二人称	budeš pevao	budete pevali
三人称	bude pevao	budu pevali

3.5 接続法（biti のアオリスト＋完了分詞）

	肯定	
	単数	複数
一人称	ja bih pevao	mi bismo pevali
二人称	ti bi pevao	vi biste pevali
三人称	on bi pevao	oni bi pevali

参考文献

Akatsuka, Noriko. (1983) Conditionals. In *Papers in Japanese Linguistics* 9: pp.1-34.

Akatsuka, Noriko. (1985) Conditionals and the Epistemic Scale. In *Language* 61(3): pp.625-639.

Alfonso, Anthony. (1966) *Japanese Language Patterns: A Structural Approach*. Vol. 2.Tokyo: Sophia University Press.

有田節子(1993) 「日本語の条件文と知識」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』くろしお出版.

有田節子(1993a) 「日本語条件文研究の変遷」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』くろしお出版.

有田節子(1999) 「プロトタイプから見た日本語の条件文」『言語研究』115. 日本語学会.

有田節子(2006a)「条件表現の導入」益岡隆志（編）『条件表現の対照』pp. 3-28. くろしお出版.

有田節子(2006b)「時制節と日英語の条件文」益岡隆志（編）『条件表現の対照』pp. 127-150. くろしお出版.

Comrie, Bernard. (1986) Conditionals: A typology. In Elizabeth C. Traugott, etal., eds., *On Conditionals*, pp. 77-99. Cambridge: Cambridge University Press.

Dancygier, Barbara (1998) *Conditionals and prediction: Time, knowledge and causation in conditional constructions*. Cambridge University Press.

江田すみれ（1992）「複合辞による条件表現 2－「と」「とすると」「となると」の意味と機能について－」『日本語教育』78：pp. 204.

Fillmore, Charles (1990) Epistemic Stance and grammatical form in English conditional sentences. *Papers from the Twenty-Sixth Annual Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. Pp 137-162. University of Chicago.

Greenberg, Joseph H.(1966) Language universals. In Theoretical foundations T.A. Sebeok (ed.). *Current trends in linguistics*.3: pp. 61-112. Mouton.

堀恵子(2003)「韓国語母語話者を対象とする日本語条件文の習得研究」『言語と文明』pp. 53-82. 麗澤大学大学院紀要.

稲葉みどり(1991)「日本語条件文の意味領域と中間言語構造—英語話者の第二言語習得過程を中心に—」『日本語教育』75: pp. 87-99.

稲葉みどり(1992)「学習背景の異なる二つの集団の文法習得順序」『ことばの科学』4: pp. 1－13.

Jacobsen, Wesley M. (1984) Aspects of Hypothetical Meaning in Japanese Conditionals. *Function and Structure,* pp.83-122. By Akio Kamio and Ken-Ichi Takami.

Janković, Snežana. (2005) Osnovne funkcije i značenja kondicionalnih oblika u japanskom jeziku. *Philologia* 3: pp. 27-34. Udruženje građana Philologia i Versita.

ヤンコヴィッチ、スネジャナ(2008)「「と・たら・ば」の時間及び原因・理由の意味と用法—セルビア語との対照の立場から—」『対照言語学研究』18：pp. 27－48. 海山文化研究所.

ヤンコヴィッチ・スネジャナ(2010)「仮定条件における「と・たら・なら・ば」の意味と用法—セルビア語の条件文との対照の観点から」須田淳一・新居田純野（編）『日本語形態の諸問題　鈴木泰教授東京大学退職記念論文集』pp. 169－189. ひつじ書房.

Katičić, Radoje. (1984) Vrste pogodbenih rečenica u standardnom jeziku srpskom ili hrvatskome. *Zbornik Matice srpske za filologiju i lingvistiku.* XXVII-XXVIII pp. 339-343.

北條淳子（1964）「条件の表し方」『日本語教育』4, 5. : pp. 73－80. 日本語教育学会.

小林賢次（1996）『日本条件表現史の研究』pp. 11－13. ひつじ書房.

小坂光一(1992)『応用言語科学としての日独語対象研究』pp. 111-137. 同学社.

工藤浩(1989)「現代日本語の文の叙法性　序章」『東京外国語大学論集』39. 東京外国語大学.

久野　暲（1973）『日本文法研究』pp. 111. 大修館書店.

前田直子(1991)「条件分類の一考察」『日本語学科年報』13: pp. 55－79. 東京外国語大学外国語学部日本語学科.

前田直子(1998)「非仮定的な事態を接続するト・タラ文の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』8: pp. 71-88.

Martin, Samuel E. (1975) *A Reference Grammar of Japanese.* Yale University Press.

益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』くろしお出版.

益岡隆志(1993)「条件表現と文の概念レベル」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』pp. 23-39. くろしお出版.

益岡隆志(2006)「日本語における条件形式の分化ー文の意味的階層構造の観点からー」益岡隆志（編）『条件表現の対照』pp. 31-46. くろしお出版.
益岡隆志・田窪(1989)『基礎日本語文法』pp. 192 - 3. くろしお出版.
松下大三郎（1930）『標準日本口語法』勉誠社再版.
Mithun, Marianne. (1999) *The Languages of Native North America.* Cambridge: Cambridge University Press.
宮島達夫（1964）「バとトとタラ」『講座現代語(第六巻)ー口語文法の問題点』pp. 320ー321. 明治書院.
Mrazović, Pavica, Vukadinović, Zora (1990). Gramatika srpskohrvatskog jezika za strance. Izdavačka knjižarnica Zorana Stojanovića.
蓮沼昭子(1993)「『たら』と『と』の事実的用法をめぐって」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』pp. 73-97. くろしお出版.
中島悦子(1997)「自然談話に現れる「と」「ば」「たら」「なら」」『ことば』18：pp. 110. 現代日本語研究会.
西光義弘(2006)「条件表現とは何か？」益岡隆志（編）『条件表現の対照』pp. 217-226. くろしお出版.
仁田義雄(1987)「条件づけとその周辺」『日本語学』6：pp. 23. 明治書院.
仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
野田尚史(1996)「文の種類」『日本語学』8月号. 15.
奥田靖雄（1985）「文のこと・文のさまざま（1）」『教育国語』80：pp. 47.
奥田靖雄（1986）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文ーその体系性をめぐって」『教育国語』87：pp. 5ー10.
定延利之（2006）「資源としての現実世界」益岡隆志（編）『条件表現の対照』pp. 195-215. くろしお出版.
Solvang, Harry. （1999）「ノルウエー語から見た日本語の条件表現　ー日本語を学習しようとす るノルウエー人を対象にー」『ニダバ』28：pp. 108-117. 西日本言語学会.
ソルヴァン・ハリー(2006)「日本語学習者における条件文習得問題について」益岡隆志（編）『条件表現の対照』pp. 173-193. くろしお出版.
Stanojčić Živojin, Popović Ljubomir i Micić Stojan. (1989). *Savremeni srpskohrvatski jezik i kultura izražavanja,* pp.287-320. Zavod za udžbenike i nastavna sredstva.
Stevanović, Mihailo. (1981). Savremeni srpskohrvatski jezik - gramatički sistemi i književnojezička norma. Naučna knjiga, vol. 2.

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房.
鈴木義和(1993)「ナラ条件文の意味」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』くろしお出版.
鈴木義和(1994)「条件表現各論　ーバ/ト/タラ/ナラー」『日本語学』13：pp.81－91. 明治書院.
田仁淑(1989)「条件節をともなう複文」『日本語学科年報』11：pp.59－61.　東京外国語大学.
高梨信乃(2003)「遠そうで近い条件と理由、条件と主題」『月刊言語』32(3)：pp.47-53.
高橋太郎(1989)「現代日本語動詞の発展ーその文法的な性格をとおしてー」『国文学解釈と鑑賞 698』高橋 1994 に所収.
高橋太郎(1994)『動詞の研究ー動詞の動詞らしさの発展と消失ー』むぎ書房.
高橋太郎(1983)「動詞の条件形の後置詞化」『副用語の研究』pp.294－295. 明治書院.
高橋太郎・松本泰丈・鈴木泰・金子尚一・金田章宏他(2005)『日本語の文法』ひつじ書房.
田中寛(1994)「条件表現と基本文型」『日本語学』13.
寺村秀夫(1981)『日本語の文法(下)』国立国語研究所.
豊田豊子(1977)「『と』と時」『日本語教育』33：pp.90-106.
豊田豊子(1978)「接続助詞「と」の用法と機能(1)」『日本語学校論集』5：pp.36. 東京外国語大学.
豊田豊子(1979)「発見の「と」」『日本語教育』36：pp.95－96.
豊田豊子(1982)「接続助詞「と」の用法と機能(4)　ー条件の行われるきっかけを表す「と」ー」『日本語学校論集』9：pp.　2－3、pp. 15. 東京外国語大学.
坪本篤朗(1993)「条件と時の連続性———時系列と背景化の諸相———」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』pp.99-130. くろしお出版.
和佐敦子(2006)「スペイン語と日本語の条件表現—叙法と時制の観点からー」益岡隆志（編）『条件表現の対照』pp.151-171. くろしお出版.
W.M.ヤコブセン(1990)　「条件文における「関連性」について」『日本語学』4月号. 6.
山口堯二（1969a）「現代語の仮定条件法ー「ば」「と」「たら」「なら」についてー」『月刊文法』12月．増大号.

山口堯二（1969b）「仮定条件法の表現的特色－事実の仮定的表現をめぐって－」『国語国文』38巻．5号．
山口堯二（1994）「条件表現の起源」『日本語学』 8月号．
山梨正明（1985）『自然言語と推論プロセス』（補稿）．東京大学出版会．
山梨正明（1986）『発話行為』大修館書店．
山梨正明（1994）「条件文の表現機能と言葉の認識」『日本語学』8月号．13．
吉川武時（1989）『日本語文法入門』pp．209．アルク．

用例出典

安部公房 1981『砂の女』新潮文庫

芥川竜之介 1996『羅生門』と『鼻』新潮文庫

太宰治 1952『人間失格』新潮文庫

遠藤周作 1960『海と毒薬』新潮文庫

遠藤周作 1981『沈黙』新潮文庫

藤本義一 1993『娘への一二通の手紙』PHP 文庫

井伏鱒二 1979『黒い雨』新潮文庫

石川達三 1950『結婚の生態』新潮文庫

川端康成 1947『雪国』新潮文庫

川端康成 1957『山の音』新潮文庫

川端康成 1970『名人』新潮文庫

開高健 1993『花終わる闇』新潮文庫

幸田文 1955『父』と『こんなこと』新潮文庫

幸田文 1957『流れる』新潮文庫

松本清張 1971『点と線』新潮文庫

水上勉 1961『雁の寺』新潮文庫

森瑤子 1985『結婚式』新潮文庫

森村誠一 1993『都市の遺言』新潮文庫

武者小路実篤 1947『友情』新潮文庫

中山義秀 1969 『碑』と『テニヤンの来日』 (「厚物咲」「少年死刑囚」「秋風」「テニヤンの来日」「高野詣」) 新潮文庫

夏樹静子 1992『霧の向こう側』新潮文庫

夏樹静子 1994『死なれては困る』(「死なれては困る」「路上の奇禍」「女子大生が消えた」) 新潮文庫

夏目漱石 1948『門』新潮文庫

夏目漱石 1951『こころ』角川文庫

夏目漱石 1976『文鳥』と『夢十夜』(「永日小品」「思い出すことなど」「変な音」「手紙」) 新潮文庫

大江健三郎 1964『個人的な体験』新潮社

大岡昇平 1980『事件』新潮文庫

佐野洋子 1991『ふつうがえらい』新潮文庫

椎名誠 1991『新橋烏森口青春篇』新潮文庫

志賀直哉 1968『小僧の神様』と『城の崎にて』（「佐々木の場合」「城の之崎にて」「赤西蠣太」「流行感冒」「好人物の夫婦」「雪の日」「焚火」「痴情」「冬の往来」「晩秋」）新潮文庫

島崎藤村『破戒』新潮文庫

谷崎潤一郎 1947『痴人の愛』新潮文庫

渡辺淳一 1991『野わけ』ケイブンシャ文庫

吉本ばなな 1989『TUGUMI』中公文庫

吉本ばなな 1991『キッチン』（「キッチン」「満月」「ムーンライト・シャドウ」）福武文庫

吉本ばなな 1991『哀しい予感』角川文庫

以下、1995 年 CD－ROM 版新潮文庫の 100 冊の中から

赤川次郎『女社長に乾杯!』新潮文庫

有吉佐和子『華岡青洲の妻』新潮文庫

藤原 正彦『若き数学者のアメリカ』新潮文庫

五木寛之『風に吹かれて』新潮文庫

林芙美子『放浪記』新潮文庫

星新一『人民は弱し官吏は強し』新潮文庫

井上靖『あすなろ物語』新潮文庫

井上ひさし『ブンとフン』新潮文庫

石川達三『青春の蹉跌』新潮文庫

開高健『パニック』新潮文庫

倉橋由美子『聖少女』新潮文庫

三島由紀夫『金閣寺』新潮文庫

宮本 輝『錦繡』新潮文庫

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』新潮文庫

新田次郎『孤高の人』新潮文庫
大江健三郎『死者の奢り・飼育』新潮文庫
沢木耕太郎『一瞬の夏』新潮文庫
塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』新潮文庫
曽野 綾子『太郎物語』新潮文庫
高野悦子『二十歳の原点』新潮文庫
竹山道雄『ビルマの竪琴』新潮文庫
立原正秋『冬の旅』新潮文庫
福永 武彦『草の花』新潮文庫
壺井栄『二十四の瞳』新潮文庫
筒井 康隆『エディプスの恋人』新潮文庫
渡辺淳一『花埋み』新潮文庫
山本周五郎『さぶ』新潮文庫

教科書

Intensive Course in Japanese - Intermediate Course. (1980) Language Services Co., Ltd.
国際交流基金(1988)『日本語初歩』凡人社.